

宮城県仙台市

# 郡山遺跡 27

— 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群 —  
平成18年度発掘調査概報



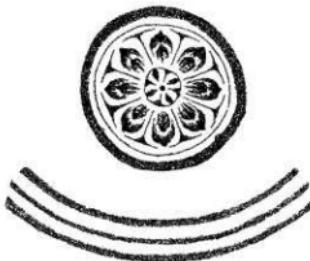
2007.3

仙台市教育委員会

宮城県仙台市

# 郡山遺跡 27

— 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群 —  
平成18年度発掘調査概報



2007.3

仙台市教育委員会



郡山遺跡第178次調査SD2150溝跡



陸奥国分寺跡 2 区全景

## 序 文

郡山遺跡は、平成18年7月に「仙台郡山官衙遺跡群 郡山官衙遺跡 郡山廃寺跡」として国史跡に指定されました。今回指定されたのは、多賀城創建以前の陸奥国府であると考えられるⅡ期官衙の中でも特に重要な中枢部を中心とした区域で、遺跡全体からすれば部分的な指定ではありますが、今後の歴史公園としての整備に向けて大きな一歩を踏み出したと考えております。

郡山遺跡の発掘調査事業は、昭和55年の国庫補助事業による確認調査の開始以来27年目となりました。本年度は、平成16年度に終了した第5次5ヵ年計画の後を受けた補足調査の2年目にあたります。昨年度は方四町Ⅱ期官衙の外溝の調査において大きな成果がありましたが、本年度はⅠ期官衙の東辺部において範囲確認調査を実施し、新たな知見を得ることができました。

本書はこの郡山遺跡範囲確認調査の他、「仙台平野の遺跡群」に対応した調査として個人住宅建築に伴う郡山遺跡の調査と、国史跡陸奥国分寺跡の範囲確認調査について平成18年度の発掘調査成果の概要をまとめたものです。

郡山遺跡については、部分的ではありますが国史跡として指定されたことは、今後の整備に向けて新たなスタートラインに立ったところと言えます。陸奥国分寺跡についても、歴史公園としての整備が待ち望まれており、今後の調査成果もおおいに期待されるところとなつております。

両遺跡ともに、今後の整備に向けて皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成19年3月

仙台市教育委員会  
教育長 奥山 恵美子

## 例　　言

1. 本書は国庫補助事業による郡山遺跡および仙台平野の遺跡群に係わる平成18年度範囲確認調査の概報である。  
本書の内容は既に公開されている現地説明会資料や各種の発表会資料に優先する。
2. 本概報は調査述報を目的としている。執筆は以下のように分担した。  
第1章、第2章、第3章Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・ⅣⅠ・Ⅴ・Ⅵ、第4章　— 平間亮輔  
第3章ⅣⅠ～3　　齊藤義彦  
遺物観察表・遺構記述表は齊藤義彦が作成し、編集は平間亮輔が行った。
3. 灰釉陶器、綠釉陶器については仙台市博物館 佐藤洋氏の御教示を得た。
4. 本調査に係わる出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

## 凡　　例

1. 郡山遺跡の平面図に示した座標系は、任意に設定した原点 (X=0, Y=0) を通る磁北線 (1984年頃の偏角で、東北から6°44'7"西傾) を基準にしている。  
陸奥国分寺跡の平面図に示した座標系は、平面直角座標系X (山渕地系) である。
2. 文中および図中の方位は真北を基準としている。
3. 遺構の略称は次のとおりで、郡山遺跡の遺構番号は全体の通しNo.、陸奥国分寺跡は今年度の通しNo.である。  
SA: 杖列などの堀跡　SB: 建物跡　SD: 溝跡　SE: 井戸跡　SF: 墓地跡　SI: 竪穴住居跡  
SK: 土坑　SX: その他の遺構　P: ピット、小柱穴
4. 遺物の略号は次のとおりで、郡山遺跡の登録番号は全体の通しNo.、陸奥国分寺跡は今年度の通しNo.である。  
A: 純文土器　B: 弥生土器　C: 上師器 (非ロクロ調査)　D: 土師器 (ロクロ調査)・赤焼土器  
E: 箕輪器　F: 丸瓦・軒丸瓦　G: 平瓦・軒平瓦　H: その他の瓦  
Ia: 土師質土器　Ib: 瓦質土器　Ic: 陶器　J: 磁器　K: 石器・石製品　L: 木製品  
Na: 鉄製品　Nb: 非鉄金属製品　P: 上製品
5. 土色については「新版標準上色帳」(小山・竹原1997)を使用した。
6. 遺物実測図の網点は黒色処理を示している。
7. 表中の( )が付いた数字は図上復元した推定値である。

# 目 次

## 第1章 はじめに

I. 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査体制	1
II. 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査計画と実績	2
I. 調査計画	2
2. 調査実績	2

## 第2章 郡山遺跡

I. 第172次発掘調査	4
II. 第173次発掘調査	8
III. 第174次発掘調査	9
IV. 第175次発掘調査	11
V. 第176次発掘調査	20
VI. 第177次発掘調査	22
VII. 第178次発掘調査	27
VIII. 第179次発掘調査	44

## 第3章 陸奥国分寺跡

I. 調査の経過と方法	45
II. 1区の調査	47
III. 2区の調査	60
IV. 3区の調査	75
V. 4区の調査	95
VI. 5区・6区の調査	103
第4章 総括	106

## 挿図目次

### 都山遺跡

第1図 都山遺跡全体図	3
第2図 第172次調査区位置図	4
第3図 第172次調査区設定図、全体図、 北壁・西壁断面図	6
第4図 第173次調査区設定図	8
第5図 第173次調査区位置図	8
第6図 第174次調査区位置図	9
第7図 第174次調査区設定図、全体図、 北壁断面図	10
第8図 第175次調査区設定図	11
第9図 第175次調査区位置図	11
第10図 第175次調査区平面・断面図	13
第11図 第175次調査出土遺物	14
第12図 I期官衙北部全体図	16
第13図 第176次調査区位置図	20

第14図 第176次調査区設定図	21
第15図 第177次調査区設定図	22
第16図 第177次調査区位置図	22
第17図 第177次調査区全体図、 南壁断面図、SB2145断面図	24
第18図 第177次調査出土遺物	25
第19図 第178次調査区位置図	27
第20図 第178次調査区設定図	28
第21図 SD2150平面・断面図	29・30
第22図 SD2150部分図（2区）	31
第23図 SD2150山土遺物	31
第24図 SD2150断面図（1区）	32
第25図 SD2150断面図（2区）	33
第26図 SD2198断面図	34
第27図 II層上面平面図	34
第28図 I期官衙北東部全体図	36
第29図 第179次調査区設定図	44
第30図 第179次調査区位置図	44

陸奥国分寺跡		
第31図	陸奥国分寺跡全体図	46
第32図	調査区断面図	48
第33図	1区全体図	49・50
第34図	SD1・6、SK2～5断面図	51
第35図	SD1・6、SK4出土遺物	52
第36図	SD1出土遺物	53
第37図	調査区東壁断面図	60
第38図	2区全体図	61
第39図	SA14・19、SD9・17、 SK10・20断面図	62
第40図	SK16平面・断面図	63
第41図	SK16遺物出土状況図	64
第42図	SK16出土遺物(1)	65
第43図	SK16出土遺物(2)	66
第44図	SK16出土遺物(3)	67
第45図	SK16出土遺物(4)	68
第46図	SK16出土遺物(5)	69
第47図	3区全体図	75
第48図	SI30平面・断面図	76
第49図	SI30遺物出土状況図	77
第50図	SI30出土遺物(1)	78
第51図	SI30出土遺物(2)	79
第52図	SD34・40、SX26平面・断面図	80
第53図	SK23・34・40、SD28出土遺物	81
第54図	SX26出土遺物(1)	83
第55図	SX26出土遺物(2)	84
第56図	SX26出土遺物(3)	85
第57図	SX26出土遺物(4)	86
第58図	SX37出土遺物	87
第59図	基本層出土遺物	88
第60図	調査区北壁・SX13断面図	95
第61図	4区全体図	96
第62図	SI38平面・断面図	97
第63図	SI38出土遺物	98
第64図	SI41平面・断面図	99
第65図	SI39・41出土遺物	100
第66図	5区全体図、SD32断面図	103
第67図	6区全体図、SD31断面図	104
第68図	I期官衙北部全体図	107
第69図	陸奥国分寺跡僧房跡、 陸奥国分尼寺跡尼坊	109

## 挿表目次

### 郡山遺跡

表1	18年度郡山遺跡ほか発掘調査計画	2
表2	18年度発掘調査実績	2

表3	第172次調査遺物集計表	5
表4	第175次調査遺物集計表	14
表5	第177次調査遺物集計表	25
表6	第178次調査遺物集計表	37
陸奥国分寺跡		
表7	1区遺物集計表	54
表8	2区遺物集計表	69
表9	3区遺物集計表	82
表10	4区遺物集計表	99
表11	5区遺物集計表	104
表12	6区遺物集計表	101

## 写真図版目次

郡山遺跡		
写真図版1	SD216溝跡	7
写真図版2	SA2130材木列	17
写真図版3	SA2135材木列	18
写真図版4	SA2140、調査区全景、 SI2186出土遺物	19
写真図版5	調査区全景、SB2145、出土遺物	26
写真図版6	SD2150出土遺物	38
写真図版7	SD2150溝跡(1)	39
写真図版8	SD2150溝跡(2)	40
写真図版9	SD2150溝跡(3)	41
写真図版10	SD2150溝跡(4)	42
写真図版11	SD2150溝跡(5)	43
陸奥国分寺跡		
写真図版12	1区全景	55
写真図版13	SF45築地塀跡(1)	56
写真図版14	SF45築地塀跡(2)	57
写真図版15	SD1溝跡、P1	58
写真図版16	SD1・6、SK4出土遺物	59
写真図版17	2区全景、SA14・19、SK16	70
写真図版18	SI16出土遺物(1)	71
写真図版19	SK16出土遺物(2)	72
写真図版20	SK16出土遺物(3)	73
写真図版21	SK16出土遺物(4)	74
写真図版22	3区全景、SI30、SX26	89
写真図版23	SI30出土遺物	90
写真図版24	SI30、SK23・34・40、 SD28出土遺物	91
写真図版25	SX26出土遺物(1)	92
写真図版26	SX26出土遺物(2)	93
写真図版27	SX37、基本層出土遺物	94
写真図版28	4区全景、SI38、SX43	101
写真図版29	SI38・39・41出土遺物	102
写真図版30	SD32・31溝跡	105

# 第1章 はじめに

## I. 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査体制

郡山遺跡の範囲確認調査は、25年間にわたる第1次から第5次までの5カ年計画が平成16年度に終了し、今年度は補足調査第2年目にあたる。

陸奥国分寺跡の範囲確認調査はこれまで断続的に実施されてきたが、今年度からは整備計画を策定することを目的とした調査を継続的に実施することとなった。調査体制は下記のとおりである。

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当	文化財課	課長	阿部 功	
	整備活用係長	吉岡英平	調査係 主任	長島栄一
	主査	高橋敏明	文化財教諭	今野秀治
	主任	安田 仁	文化財教諭	早川潤一
	主任	平間亮輔	文化財教諭	藤田雄介
	文化財教諭	齋藤義彦		

実際の発掘調査にあたっての担当職員は以下のとおりである。

郡山遺跡 第172次調査 整備活用係主任 平間亮輔、文化財教諭 齋藤義彦

第173次調査 調査係主任 長島栄一、文化財教諭 早川潤一、藤田雄介

第174次調査 整備活用係主任 平間亮輔、文化財教諭 齋藤義彦

第175次調査 調査係主任 長島栄一、文化財教諭 藤田雄介

第176次調査 調査係主任 長島栄一、文化財教諭 今野秀治

第177次調査 調査係主任 長島栄一、文化財教諭 早川潤一

第178次調査 整備活用係主任 平間亮輔、文化財教諭 齋藤義彦

第179次調査 整備活用係主任 平間亮輔、文化財教諭 齋藤義彦

陸奥国分寺跡 整備活用係主任 平間亮輔、文化財教諭 齋藤義彦

発掘調査、整理作業を適正に実施するため、「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会」を設置し、指導・助言を受けた。

委員長 工藤 雅樹（東北歴史博物館館長 考古学）

副委員長 今泉 隆雄（東北大文学部教授 古代史）

岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館名誉教授 考古学）

進藤 秋輝（宮城県考古学会会長 考古学）

桑原 遼郎（多賀城市文化財保護委員会会長 考古学）

須藤 隆（東北大文学部教授 考古学）

宮本長二郎（東北芸術工科大学芸術学部教授 建築学）

渡部 育子（秋田大学教育文化学部教授 古代史）

発掘調査にあたり地権者の方々からご協力をいただいた。

## II. 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群の調査計画と実績

### 1. 調査計画

郡山遺跡の第5次5ヶ年計画の終了後、補足調査2年目の計画については平成18年3月に開催された郡山遺跡調査指導委員会において密議がなされた。18年度は17年度に引き続き、個別の課題について補足調査を実施していくことが了承された。当初は方四町II期官衙北東部における外溝の確認を行う予定であったが、重機搬入路の確保等の条件が整わなかったため予定地における調査は断念し、I期官衙東辺の調査に切り替えて実施した。

昨年度個人住宅建築に伴って実施された第171次調査では、I期官衙東辺の材木列のさらに東側において、材木列に並行する溝跡を発見したが、調査区の制約のため規模を確定することができなかった(註1)。今回はこの溝跡の延長部分を調査し、方向や幅、深さ等を確認することを目的とした。

これらは国庫補助事業である「市内遺跡発掘調査」で実施するものであるが、この他に個人住宅建設など小規模開発に伴う発掘調査も含まれており、これらは「仙台平野の遺跡群」として包括されるものである。なお、今年度からは陸奥国分寺跡の範囲確認調査を継続的に実施していくこととなり、「仙台平野の遺跡群」の一部として調査を計画した。

郡山遺跡ほかの発掘調査総経費は15,492,000円、国庫補助金額7,745,000円の予算で計画したが、これを郡山遺跡発掘調査に3,366,000円、陸奥国分寺跡発掘調査に7,225,000円、個人住宅対応としたその他の仙台平野の遺跡群に4,901,000円として配分し、これによって以下のような発掘調査実施計画を立案した。

調査次数	調査地区	調査予定期間	調査予定期間	調査原因
郡山遺跡第178次	I期官衙東辺	150m <sup>2</sup>	10月~12月	範囲確認
陸奥国分寺跡	南辺墓地、伽藍地北端、推定寺地北部	800m <sup>2</sup>	5月~8月	範囲確認

表1 18年度郡山遺跡ほか発掘調査計画

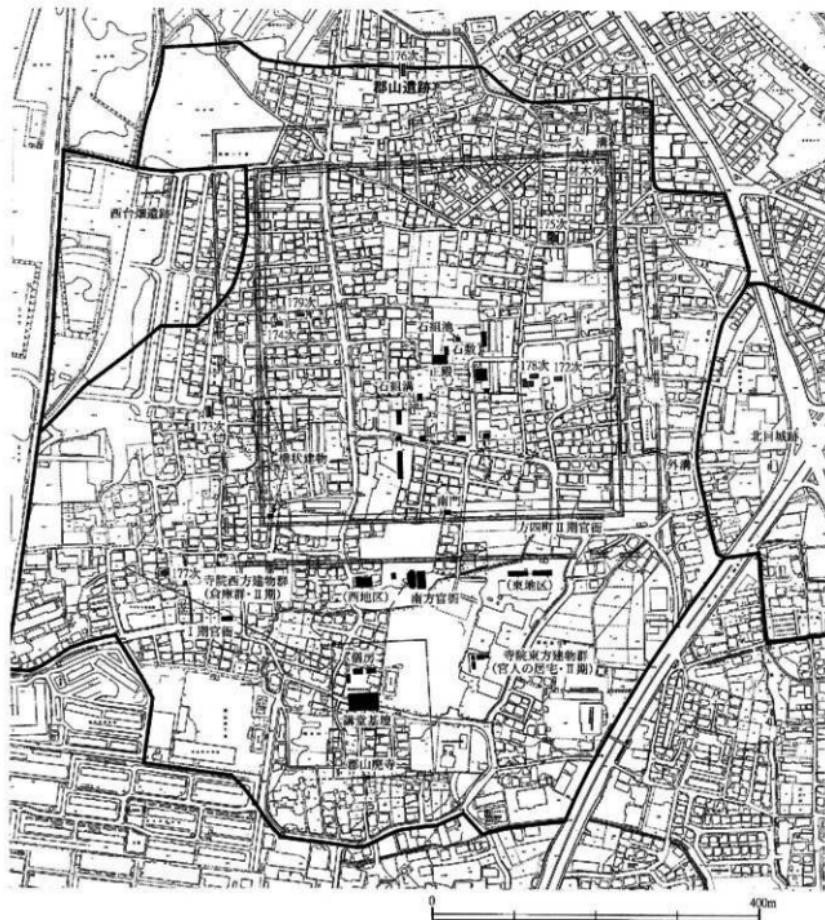
### 2. 調査実績

上記の発掘調査とは別に、個人住宅建設に伴って郡山遺跡で7箇所の調査を実施したが、これらはすべて仙台平野の遺跡群として対応した。なお、これらの調査結果はすべて本書に含めることとしたため、今年度の「仙台平野の遺跡群」としての単独の報告書は刊行しないこととした。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡第172次	方四町II期官衙東部	28m <sup>2</sup>	4月10日~18日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第173次	方四町II期官衙西外側	33m <sup>2</sup>	4月17日~18日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第174次	方四町II期官衙西部	8m <sup>2</sup>	5月10日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第175次	I期官衙北辺	36m <sup>2</sup>	7月3日~22日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第176次	方四町II期官衙北外側	12m <sup>2</sup>	9月5日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第177次	I期官衙東西部	24m <sup>2</sup>	9月28日~10月5日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
郡山遺跡第178次	I期官衙東辺	96m <sup>2</sup>	10月26日~12月22日	範囲確認	郡山遺跡発掘調査
郡山遺跡第179次	方四町II期官衙西部	24m <sup>2</sup>	11月6日~9日	個人住宅建築	仙台平野の遺跡群
陸奥国分寺跡	南辺墓地、伽藍地北端、推定寺地北部	739m <sup>2</sup>	5月23日~8月10日	範囲確認	仙台平野の遺跡群

表2 18年度発掘調査実績

(註1) このSD2125溝跡は調査区の南東隅に位置していたため、西側の肩を検出したのみであった。埋め戻しの際に調査区を南側に拡張して東側の肩を確認したが、掘り込みはできなかつたので詳細は不明であった。



第1図 郡山遺跡全体図

## 第2章 郡山遺跡

### I. 第172次発掘調査

#### 1. 調査経過

第172次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成18年2月27日付で仙台市太白区郡山3丁目2-23における住宅建築に伴う発掘届が提出された。住宅の基礎工事によって遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

調査区は平成16年に調査した第162次調査区1区（道路部分）の西に隣接し、第162次調査で発見された溝跡の延長部分が検出されることが予想された。

調査は4月10日に表土を除去し、当日午後から4月13日まで実施した。遺構は予想された溝跡1条を検出したが、その他の遺構は確認できなかった。4月18日に埋め戻しと整地作業を行った。

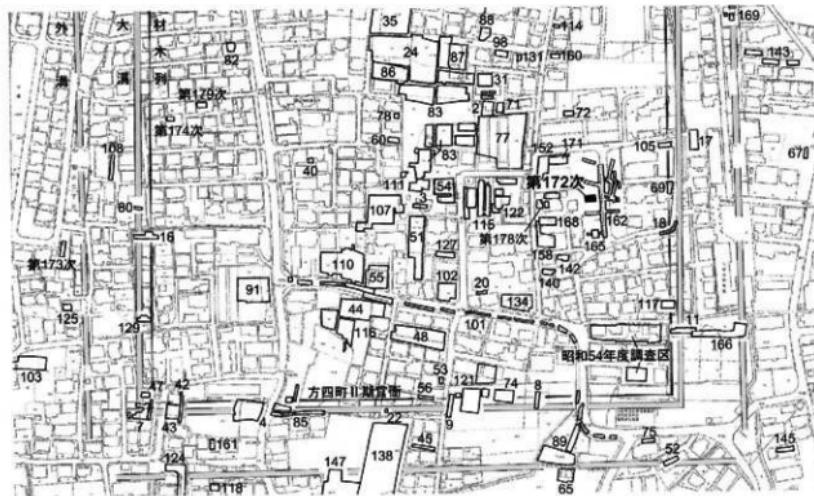
#### 2. 調査方法と基本層序

##### (1) 調査方法

調査区は東西7m×南北4mに設定した。調査面積は約28m<sup>2</sup>である。

重機で盛土とI層を除去し、III層上面で精査を行った。下層の調査は調査区の制約と周辺における調査成果から実施していない。

遺構実測のための基準杭は調査区の方向に合わせて設定し、後にこの座標値を測量する方法をとった。平面図は基準杭を基に簡易造り方を組んで1/20で作成した。断面図も1/20で作成している。写真は35mmモノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影し、補助的にデジタルカメラでも撮影した。



第2図 第172次調査区位置図

## (2) 基本層序

盛土下の基本層序は概ね第162次調査1区(註1)と共に考えられるが、調査区が狭いために対応関係を明確にすることはできなかった。Ⅰ～Ⅲ層まで確認した。

I a層 2.5Y3/2 黒褐色粘土。木炭粒を少量含む。盛土以前の畑の耕作土である。

I b層 10YR4/4 褐色粘土。暗褐色粘土ブロックを少量含む。西部で部分的に確認され、盛土と推定される。

I c層 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土。盛土以前の畑の耕作土である。

I d層 10YR3/2 黒褐色粘土。畑の耕作土で、天地返しされた層の下部に相当する。

I e層 10YR3/3 暗褐色粘土。木炭粒を多量に含む。畑の耕作土で、天地返しされた層の最下部に相当する。

II層 10YR3/3 暗褐色粘土。にぶい黄褐色粘土ブロックを少量含む。

III層 10YR5/4 にぶい黄褐色粘土。遺構確認面であり、第162次調査区のⅢ層に対応すると考えられる。他の調査区でも概ねこの褐色あるいは黄褐色の粘土層上面で遺構を確認している。

## 3. 遺構と遺物

今回の調査ではⅢ層上面で溝跡1条を確認した。

SD2169溝跡 調査区のほぼ中央を東西に横断する溝跡で、第162次調査1区で確認されたSD2169溝跡の延長部分である。上幅65～105cm、底面幅40～80cm、深さ約40cmである。断面形は箱形で、壁は急角度に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。方向はE-Wで、検出した長さは6.7mである。堆積土は4層に分層できる。

遺物は非クロロ調整の土師器焼片6点が出土した。

## 4.まとめ

SD2169は第162次調査1区で発見された溝跡であり、今回の調査でさらに西に伸びていることが確認された。このSD2169は、第162次調査2区(註2)で発見された桁行8間、梁行3間(身舎2間)の長大な南北棟であるSB2115掘立柱建物跡(Ⅱ期官衙のⅡ-A期)の南梁行から約1m離れてほぼ並行した位置関係にある。遺物が少ないと現段階では同時期と断定できないが、今後の展開に注意していく必要がある。

(註1)「第162次発掘調査1区」「郡山遺跡」仙台市文化財調査報告書第288集

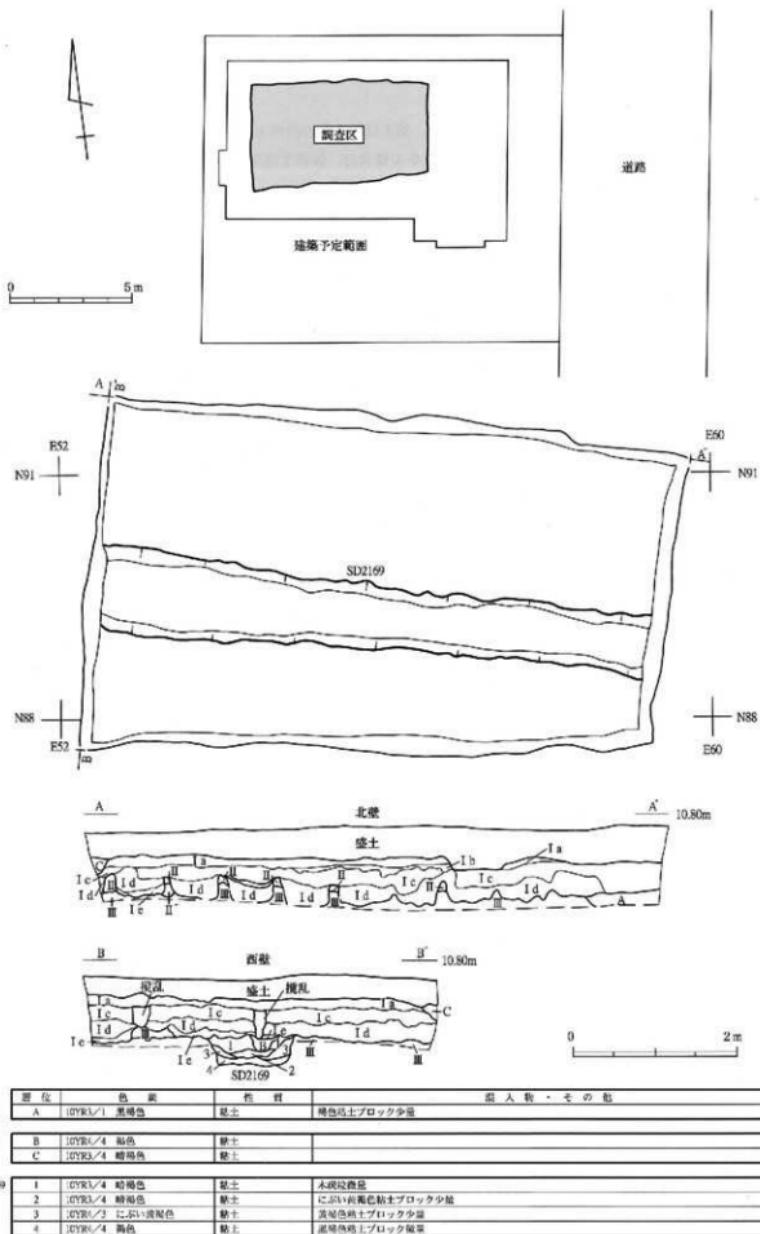
(註2)「第162次発掘調査2区」「郡山遺跡25」仙台市文化財調査報告書第284集

出土遺構・層位	土師器(非クロロ調整)	須恵器
SD2169	6	
I層	6	2

表3 第172次調査遺物集計表



作業風景



第3図 第172次調査区設定図、全体図、北壁・西壁断面図



1. SD2169確認状況（西から）



2. SD2169完掘状況（東から）



3. SD2169断面（東から）

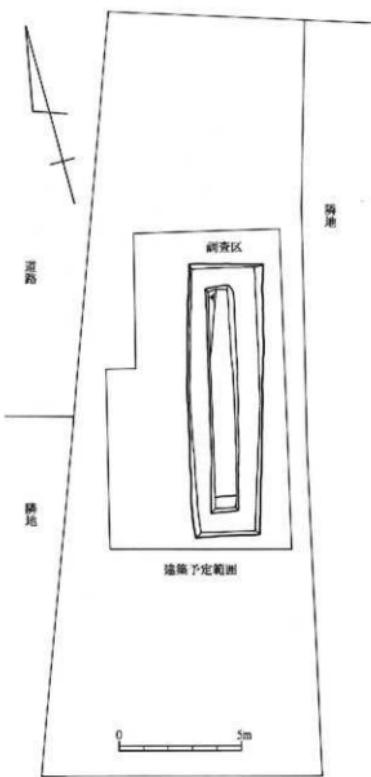
## II. 第173次発掘調査

### 1. 調査経過

第173次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成18年4月4日付で仙台市太白区郡山2丁目(32BL-1)における住宅建築に伴う発掘届が提出された。住宅の基礎工事によって遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

調査区の北西約20mの地点では、平成13年に長町副都心（現在は「あすと長町」に名称変更）土地区画整理事業に伴う調査が行われ、I期官衙に係わる溝跡などが検出されている。また、II期官衙外溝の推定通過地点からは約20m西側（外側）に位置している。

調査は4月17日に盛土と表土を除去し、翌18日まで実施した。調査区は東西3m×南北11mに設定し、地表面から約2m下まで掘り下げたが、遺構は確認できず遺物も出土しなかった。盛土下で確認した基本層は、郡山遺跡での通常の遺構確認面よりも下層で認められるグライした粘土層に類似しており、過去の土取り等によって遺構面は既に失われている可能性が高いと判断された。18日中に埋め戻しと整地作業を行い、調査を終了した。



第4図 第173次調査区設定図



第5図 第173次調査区位置図

### III. 第174次発掘調査

#### 1. 調査経過

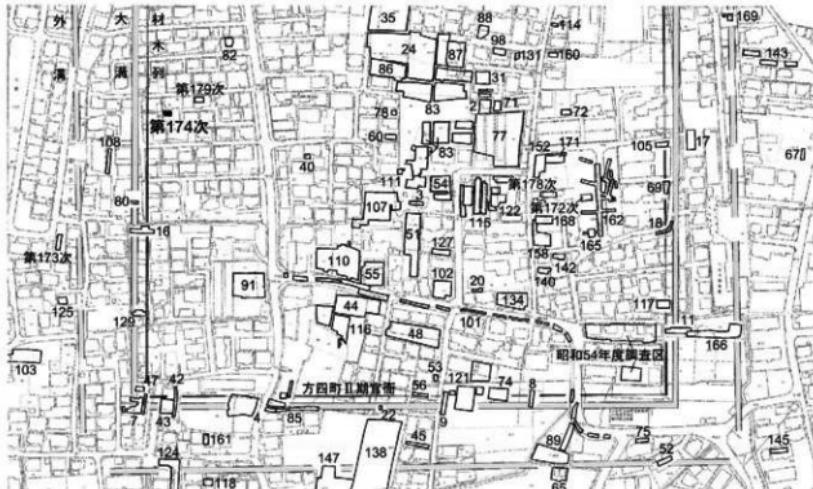
第174次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成18年5月1日付で仙台市太白区郡山2丁目7-6における住宅建築に伴う発掘届が提出された。住宅の基礎工事によって遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

調査区は方四町Ⅱ期官衙西辺から官衙内部約20mの地点にあたるため、Ⅱ期官衙に係わる遺構が検出される可能性も考えられた。

調査は5月10日に実施した。調査区は東西4.7m×南北3mに設定したが、盛土層下面における実質の調査区は東西3.2m×南北2.5mである。地表面から約2m下まで掘り下げたが、遺構は確認できず遺物も出土しなかった。盛土下1.3m下で旧水田耕作土と推定されるⅠa層を確認したが、さらにその下層の基本層Ⅱ層以下は、郡山遺跡での通常の遺構確認面よりも下層で認められるグライした粘土層に類似しており、過去の土取り等によって遺構面は既に失われている可能性が高いと判断された。このため当日中に埋め戻しと整地作業を行い、調査を終了した。

#### 2. 基本層序

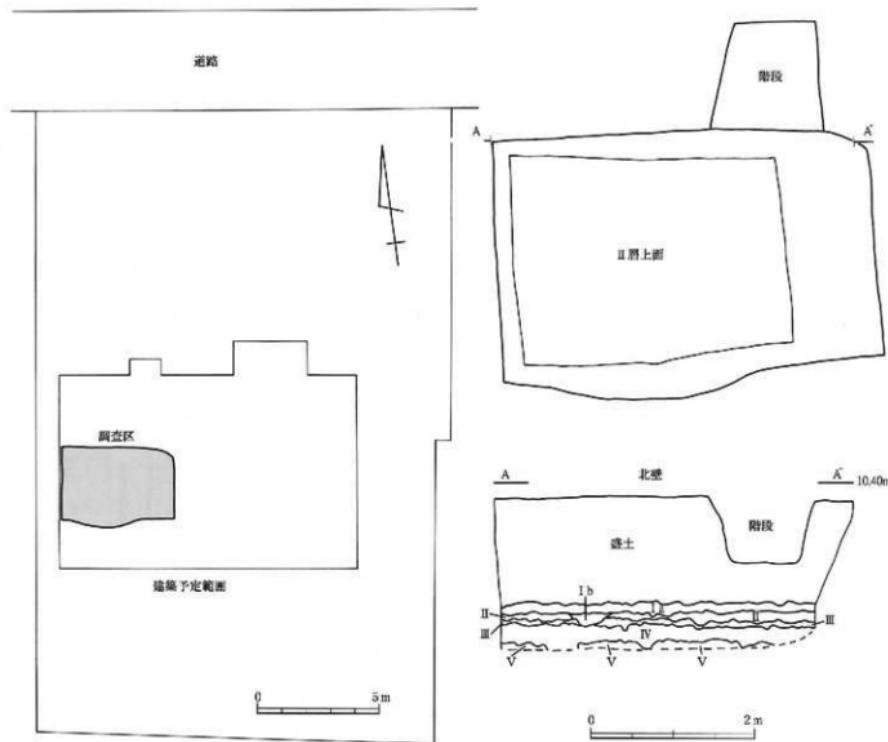
- Ia層 5Y3／1オリーブ黒色粘土。盛土以前の水田耕作土と推定される。
- 1b層 5Y3／1オリーブ黒色粘土。Ⅱ・Ⅲ層のブロックを少量含む。
- II層 2.5GY4／1暗オリーブ灰色粘土質シルト。
- III層 10Y4／1灰色粘土。
- IV層 2.5Y3／2黒褐色粘土。
- V層 2.5Y5／2暗灰黄色粘土。



第6図 第174次調査区位置図



II層上面と調査区断面（東から）



第7図 第174次調査区設定図、全体図、北壁断面図

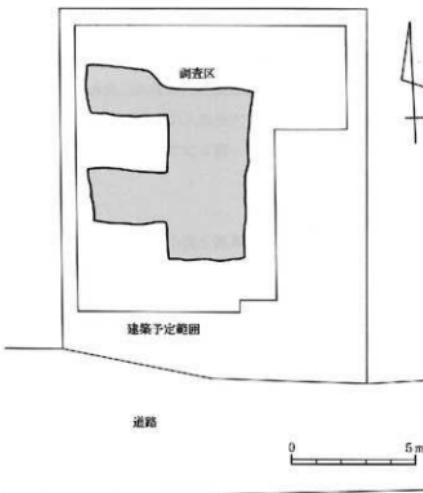
## IV. 第175次発掘調査

### 1. 調査経過

第175次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成18年6月2日付で仙台市太白区郡山3丁目6-10, 6-11における住宅建築に伴う発掘届が提出された。住宅の基礎工事によって遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

当該地はI期官衙の北東部に位置している。北西150mの地点には第156次調査区(註1)、180mの地点には第148次調査区(註2)があり、それぞれ北西から南東方向に延びる材木列が発見されている。これらの材木列の延長部分が検出される可能性も考えられていた。

7月3日に重機によって表土を除去し、遺構確認作業を開始した。I期官衙に係わる材木列や一本柱列などの重要な遺構を発見し、当初の調査区における作業は7月18日に終了した。翌日の19日に埋め戻した後、西側に折り返して調査区を設定し、補足調査を行った。7月21日に調査を終了し、22日に埋め戻しと整地作業を行った。



第8図 第175次調査区設定図



第9図 第175次調査区位置図

## 2. 調査方法と基本層序

### (1) 調査方法

調査区は建物建築予定部分のほぼ中央に東西3m×南北7m（約21m<sup>2</sup>）で設定した。重機により表土およびI・II層を除去し、III・IV層上面で造構確認作業を行った。この調査区の調査終了後、調査区を埋め戻した後に、住宅建築部分の西部における造構を確認するため、東西3m×南北2mの調査区をさらに2箇所設定して補足調査を実施した。拡張後の面積は約33m<sup>2</sup>である。

造構実測のための基準杭は調査区の方向に合わせて設定し、後日この座標値を測量する方法をとった。平面図はこの基準杭を基に簡易造り方を組んで1/20で作成した。断面図も1/20で作成している。写真は35mmモノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影し、補助的にデジタルカメラも撮影した。

### (2) 基本層序

I～IV層まで確認した。III層上面が造構確認面であるが、一部でIII層が搅乱されて遺存しない箇所ではIV層上面が造構確認面となっている。

I層 盛土層。

II層 10YR 4/2 灰黄褐色粘土質シルト。盛土以前の耕作土である。

IIIa層 10YR 7/4 にぶい黄橙色粘土。

IIIb層 10YR 6/4 にぶい黄橙色粘土。

IV層 10YR 3/1 黒褐色粘土。

## 3. 造構と遺物

今回の調査では材木列2列と一本柱例1列、竪穴住居跡1軒、溝跡1条、ピット6基を確認した。

**SA2130材木列** 調査区北部を北西から南東に横断する材木列である。

上幅50～100cmの抜き取り溝底面において柱の掘り方が確認された。この溝状の抜き取りは材木列掘り方の北側に寄っており、深さは25～40cm程度である。

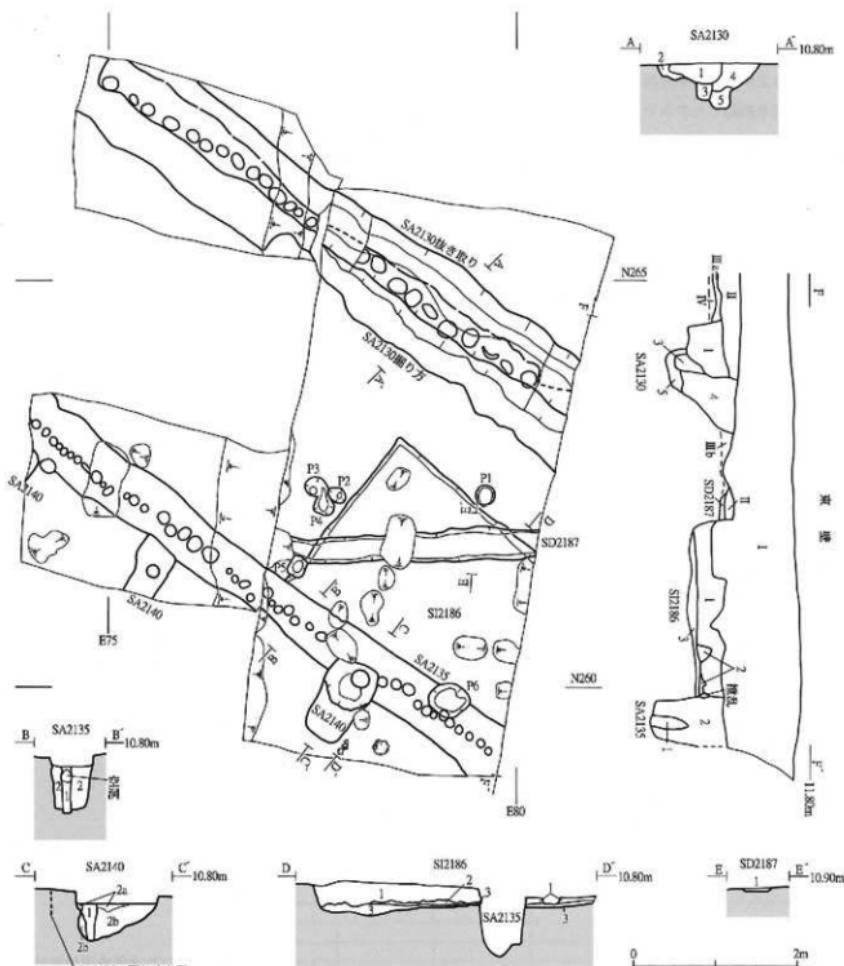
材木列の掘り方は、北側の肩を溝状の抜き取りによって壊されている。このため本米の上幅は明確ではないが、80～90cmと推定される。深さは約55cm程度であるが、調査区東壁の観察によると本来は80cm以上あったと推定される（第10図右）。南壁の立ち上がりは、下半部は急に立ち上がるが上半部は緩やかに開き、全体としては漏斗状を呈している。方向はE-28°-Sで、確認した長さは約7.3mである。抜き取りが掘り方底面まで及んでいないため、掘り方の底面近くの北壁沿いに並ぶ状態で柱痕跡が確認された。確認された柱痕跡の直径は15～20cm程度である。堆積土は掘り方が3層、抜き取りが1層である。

遺物は、抜き取り溝から非クロロ調整の土師器片22点、須恵器片1点が出土した。

**SA2135材木列** 調査区南部を北西から南東に横断する材木列で、SA2130とは柱の芯々で4.0～4.1m離れて併行している。掘り方は上幅40～70cm程度で、そのほぼ中央に直径10～15cmの柱痕跡が連続して確認された。柱痕跡は掘り方底面よりも約5cm下にくい込んでいる。材木列の方向はE-28°-Sで、確認した長さは約7.1mである。掘り方の深さは65cm程度であるが、調査区東壁の観察によると本来は90cm以上あったと推定される（第10図右）。壁は急角度で立ち上がる。掘り方の堆積土は1層である。

遺物は、掘り方埋め土から非クロロ調整の土師器片9点が出土した。土師器C-1002杯（第11図1）は体部が半球形を呈し口縁部が直立気味になる「関東系」の土器である。

**SI2186竪穴住居跡**を切り、SA2140一本柱例に切られている。



層位	色調	性質	混入物・その他の
SA2130	1 JYR1-/2 暗褐色 2 JYR5-/6 削り色 3 JYR5-/4 清潔感色 4 JYR5-/1 海底色 5 JYR5-/3 深褐色	シルト質粘土 軟土質シルト 軟土質シルト 粘土質シルト 粘土	褐色シルト質粘土少量、抜き取り 褐色シルト質粘土多量、削り方 清潔感質粘土質粘土に挟む、削り跡 白色粘土・微細鉄多量、削り方 衛化粘多量、削り方
SA2135	1 JYR1-/2 暗褐色 2 JYR5-/4 に近い褐色	粘土 粘土	柱状带 褐色粘土ブロックを含む、削り方
SA2140	1 JYR5-/1 海底色 2a JYR5-/4 に近い褐色 2b JYR5-/2 暗褐色	粘土 粘土 粘土	柱状带 削り方 削り方
SI2186	1 JYR5-/3 暗褐色 2 JYR5-/6 褐色 3 JYR5-/1 に近い褐色	粘土 粘土 粘土	黒褐色粘土多量 褐色粘土少量、削り方
SD2187	1 JYR5-/3 暗褐色	シルト質粘土	暗褐色粘土質シルト過程中に少量

第10図 第175次調査区平面・断面図

**SA2140一本柱列** 調査区南部に位置する一本柱列である。SA2135材木列の掘り方の南側と接するか半ば重複しながら北西から南東方向に延びている。今回の調査区内では2間分の柱穴を確認したが、最も西側の柱穴は掘り方の一部を確認したのみである。中央の柱穴は、掘り方が一辺約60×70cm以上の長方形、東側の柱穴は、掘り方が一辺約60×100cmの長方形で、深さ約60cmである。壁は北側が急角度で立ち上がるが、南側は緩やかで、僅かな段差が認められる。柱痕跡は直径15~20cmで、方向は不明瞭であるがSA2135と概ね同じと予想される。柱間寸法はE1・2柱穴間が約280cmで、E2・E3柱穴の柱間寸法は西側の柱痕跡が不明なため明確ではないが、掘り方の位置関係から210cm前後と推定され、E1・E2の柱間よりも狭い。堆積土は1層である。

遺物は、掘り方埋め土と柱痕跡から非ロクロ調整の土師器片15点が出土した。

**SA2135材木列・SI2186竪穴住居跡** 切っている。

**SI2186竪穴住居跡** 調査区南東部で確認された。東西3m以上、南北4m以上、方向は北壁でE 33°-Sである。カマドは確認できなかった。住居の確認面から床面までの深さは約30cmで、床面は住居の掘り方を5~15cm埋め戻して作られている。なお、床面上には柱穴や周溝などの施設は確認できなかった。堆積土は3層で、床面から上が2層、最下層は掘り方埋め土である。

遺物は堆積土上などから非ロクロ調整の土師器片16点が出土した。床面上からはC-1003高坏（第11図2）が出土している。

**SA2135材木列・SA2140一本柱列に切られている。**

**SD2187溝跡** 調査区中央部やや南寄りを東西に横断する溝跡である。西部の拡張区では確認できなかった。上幅約30~40cm、底面幅は25~30cm、深さ約5cmで、断面は浅い皿形を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。検出した長さが約3mと短いため方向は確定しがたいが、概ねE-9°-Nである。堆積土は1層である。

遺物は非ロクロ調整の土師器片1点が出土した。

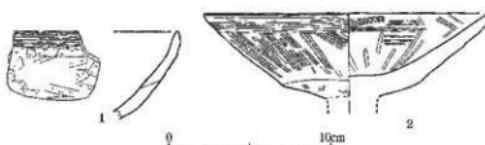
**SI2186竪穴住居跡** 切っている。

**ピット** P1~6まで検出した。柱痕跡が確認されたものではなく、いずれも詳細な性格や年代は不明である。

遺物はP3・4・6から非ロクロ調整の土師器片が1点ずつ出土したのみである。

遺構・層位	土師器	須恵器	土師質土器	磁器	瓦
SA2130	22	1			
SA2135	9				
SA2140	15				
SI2186	16				
SD2187	1				
P3	1				
P4	1				
P6	1				
I層	20				1
遺構確認面	8				
擾乱	3		8	1	

表4 第175次調査遺物集計表



No.	登録No.	北区・遺構・層位	種別・基準	遺存度	法規 (cm)			測定・特徴	再出 現地
					口径	底径	高さ		
1	C-1003	SA2135・掘り方	土師器・1K	1/5	不明	不明	不明	口縁5cmコナゲ、全体手神ヘラクズリ、内面ナメ、白けなし	4-1
2	C-1003	SI2186・床底	土師器・高坏	牙茎のみ	17.8	小明	不明	深幅3cmコナゲ、ハケメ、内曲ハケメ底削れ+ヒシミガキ、口沿無	4-2

第111図 第175次調査出土遺物

#### 4. まとめ

今回確認した遺構は材木列2列と一本柱列1列、竪穴住居跡1軒、溝跡1条、ピット6基である。このうち材木列2列と一本柱列1列がI期官衙期の遺構である。遺構の重複関係から判明している新旧関係は以下のとおりである。

SA2130 → (SA2130抜き取り)

SI2186竪穴住居跡 → SA2135材木列 → SA2140一本柱列

並行する2列の材木列のうち北側のSA2130材木列は抜き取りを受けている。また、柱痕跡が直径15~20cmとやや太く、しかも掘り方の北側に寄っている。これに対して南側のSA2135材木列は北側のSA2130材木列から芯々で約1m離れて並行するが、こちらは抜き取りを受けず、柱痕跡も10~15cmと若干細く、その位置も掘り方のほぼ中央にある。これは、北西に約180m離れた第148次調査区で検出されたSA2030材木列とSA2035材木列の様相と同様である。遺構の状況と位置関係からは、両調査区で検出された各2列の材木列は関連する可能性が高いと言える。第148次調査区のSA2030材木列はSA2130材木列へ、第148次調査区のSA2035材木列はSA2135材木列へと連続する遺構になると考えられる(第12図)。なお、今回検出されたSA2130材木列とSA2135材木列は直接の重複関係はないため新旧関係は断定できない。

平成14年の第148次調査の時点では、2列の材木列のうち北側のSA2030材木列がI期官衙の北辺になっている可能性も考えたが断定はできなかった(註3)。しかし、平成15年にI期官衙東辺における第152次調査(註4)で2列の材木列が確認され、さらに本次調査において第148次調査の材木列に連続する可能性のある材木列が確認された結果、I期官衙の北辺について新たな可能性が考えられるようになってきた。前述したように、北側のSA2130材木列の柱痕跡は直径15~20cmで、南側のSA2135材木列の柱痕跡が10~15cmであるのに比べるとやや太く、柱痕跡が掘り方の北側に寄っている。また、抜き取り溝が幅広で掘り方全体に及んでいるなどの特徴が認められる。これは第152次調査で確認されたSA2055材木列の様相と類似している。SA2055材木列はI期官衙の正面である東辺の最も外側の材木列であることから、今回確認されたSA2130材木列も官衙の最も外側の材木列であった可能性が考えられる。ただし、SA2130材木列に連続すると推定される第148次調査のSA2030材木列はI期官衙期の掘立柱建物跡を切っていることから、SA2030材木列は造りかえられていると考えられる。

SA2140一本柱列については、第152次調査で検出されたSA2065が同様の遺構であり、第152次調査の場合はSA2065の掘り方が半ば切りながら並行するSA2060材木列の補修の可能性も考えられている。今回検出されたSA2140一本柱列もSA2135材木列を切る別の遺構である可能性と、SA2135の補修である可能性の両方を考えておきたい。

遺物のうちSA2135の掘り方から出土したC-1002環は、体部が半球形を呈し口縁部が直立気味になる「関東系」の環である。このタイプの環はI期官衙の遺構であるSI412(註5)などから出土している。

SI2186竪穴住居跡は床面からC-1003高杯が出土したことから、南小泉期と考えられる。南西に約120m離れた第31次調査SD324(註6)からは南小泉式の环や高杯が出土していることから、この付近には遺構密度は低いものの、古墳時代中期の遺構が分布していることが明確となった。

(註1) 「第156次発掘調査」『郡山遺跡24』仙台市文化財調査報告書第369集 2004

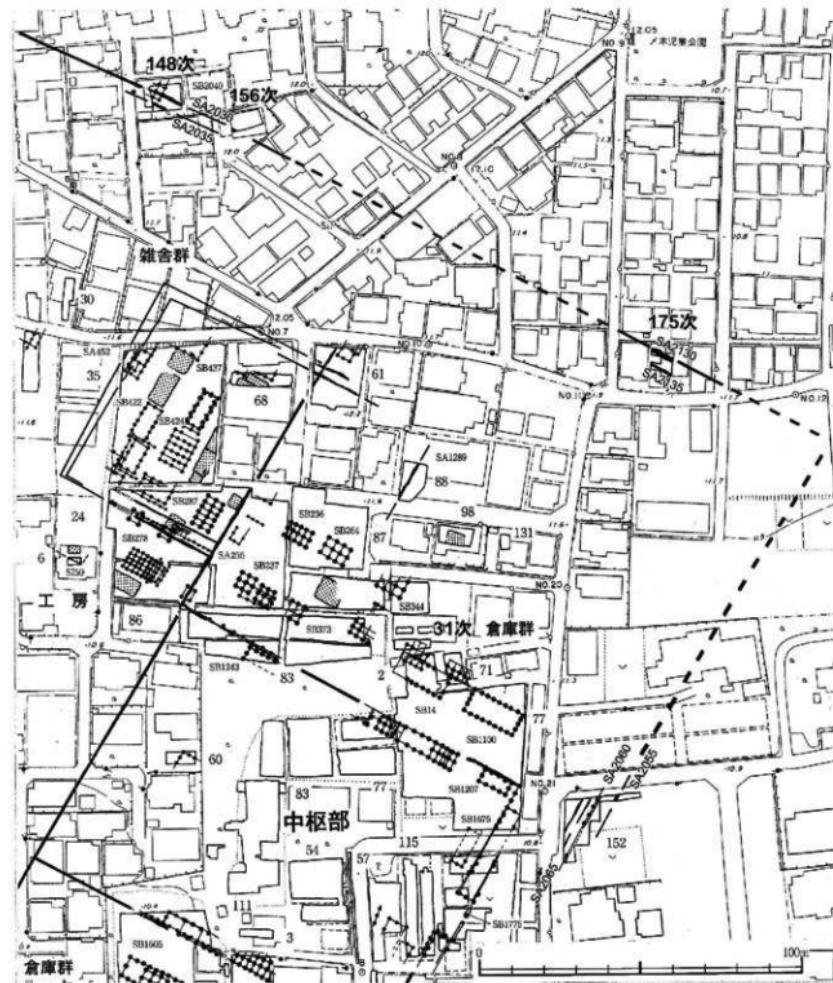
(註2) 「第148次発掘調査」『郡山遺跡23』仙台市文化財調査報告書第263集 2003

(註3) 計2文献、41頁

(註4) 「第152次発掘調査」『郡山遺跡21』仙台市文化財調査報告書第369集 2004

(註5) 「第24次発掘調査」『郡山遺跡III』仙台市文化財調査報告書第46集 1983

(註6) 「第31次発掘調査」『郡山遺跡III』仙台市文化財調査報告書第46集 1983



第12図 Ⅰ期官衙北部全体図



1. 確認状況（拡張区、南から）



2. 断面



3. 完壊状況（南東から）

写真図版2 SA2130材木列



1. 確認状況（拡張区、南から）



2. 断面



3. 確認状況（南東から）

写真図版3 SA2135材木列



1. SA2140断面（北西から）



2. 調査区全景（南から）



1



2

3. 出土遺物

写真図版4 SA2140、調査区全景、出土遺物

## V. 第176次発掘調査

### 1. 調査経過

第176次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成18年8月2日付で仙台市太白区郡山3丁目11-16における住宅建築に伴う発掘届が提出された。住宅の基礎工事によって遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

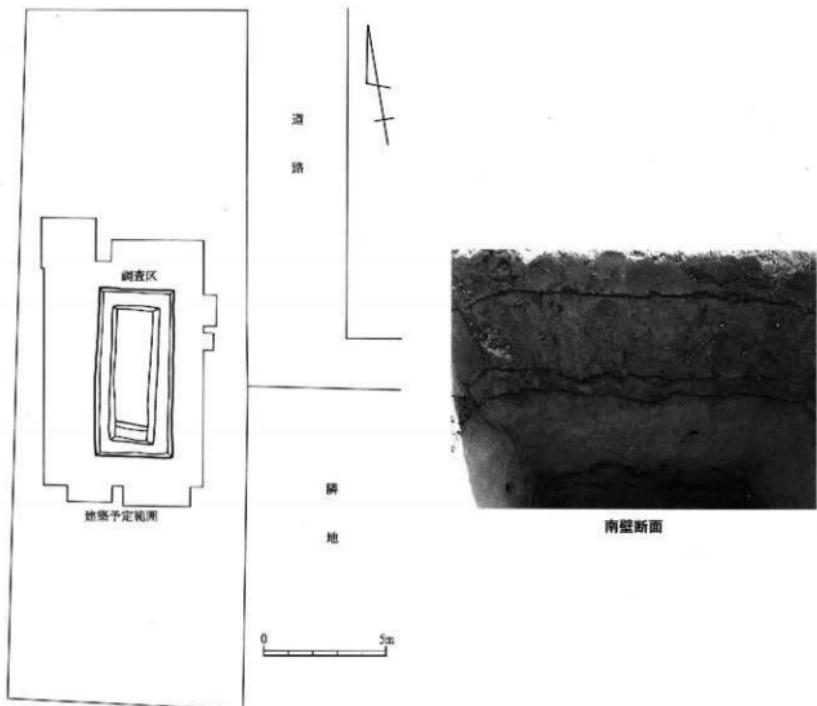
当該地は方四町Ⅱ期官衙北辺の外溝のさらに北側である。

調査は9月5日に実施した。調査区は東西3m×南北7mに設定したが、盛土層下面における実質的調査区は東西2.0m×南北5.5mである。盛土下55cm下は厚さ約20cmの旧水田耕作土で、その下層は厚さ約30cmの畑の耕作土となっている。その直下は厚さ約70cmに及ぶに亘る黄褐色の砂層が堆積しており、さらに下層には礫を多量に含む砂層が認められた。最終的に地表面から約2m下まで掘り下げたが、遺構は確認できず遺物も出土しなかった。今回畑の耕作土の直下で確認した砂層は、南西に約200m離れた第167次調査区（註1）の調査結果からすると河川の堆積土である可能性が高く、これによって遺構面は既に失われていると判断された（註2）。このため当日中に埋め戻しと整地作業を行い、調査を終了した。

（註1）仙台市教育委員会「郡山遺跡・長町駅東遺跡」『平成17年度 宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』2005  
 （註2）平成17年に「あすと長町土地区画整理事業」に伴う第167次調査が実施されている。この調査では、広瀬川の旧河道と考えられる河川跡が確認され、これによる大規模な侵食によって、Ⅱ期官衙の外溝などの古代の遺構が削られて消失している状況が明らかとなっている。今回確認された砂層が第167次調査で確認された河川跡と同一のものと断定はできないが、今次調査区は第167次調査区と広瀬川との間に位置することから完全に旧河道の中に入っている可能性がある。



第13図 第176次調査区位置図



第14図 第176次調査区設定図



調査区全景

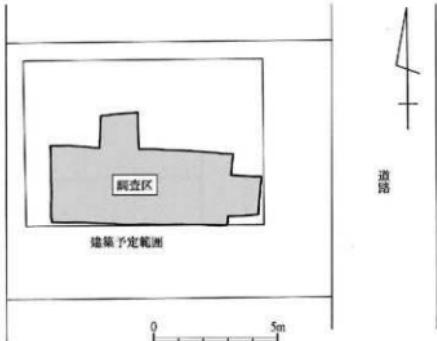
## VI. 第177次発掘調査

### 1. 調査経過

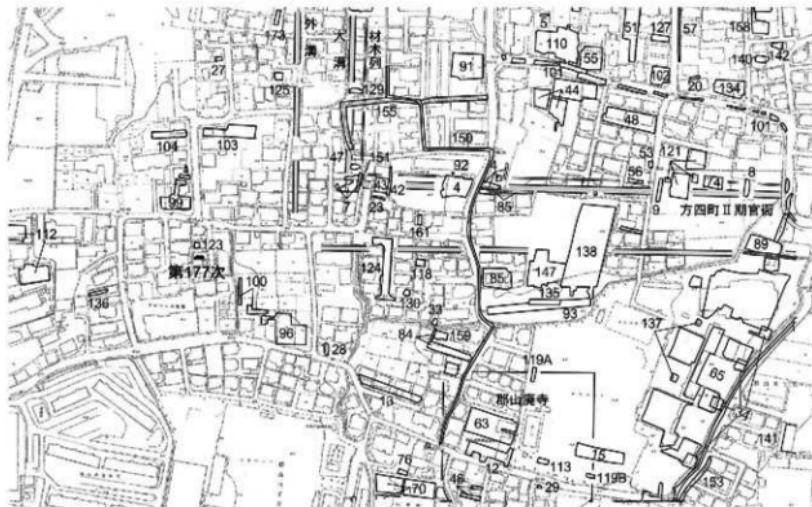
第177次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成18年9月20日付で仙台市太白区郡山6丁目202-3における住宅建築に伴う発掘届が提出された。住宅の基礎工事によって遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

当該地は1期宮衙の南西部に位置している。北西50mには第99次調査区（註1）、南東50mには第100次調査区（註2）があり、それぞれ1期宮衙の西辺や南辺の材木列が発見されている。また北側に隣接する第123次調査区ではII期宮衙期の掘立柱建物跡が検出されている。

調査は9月28日から開始した。重機によって表土を除去し、遺構確認作業を開始したが、湧水が激しいため排水作業を行いながらの調査となつた。調査を終了したのは10月4日で、翌日の10月5日に一部補足調査を行いながら埋め戻しと整地作業を行つた。



第15図 第177次調査区設定図



第16図 第177次調査区位置図

## 2. 調査方法と基本層序

### (1) 調査方法

調査区は建物建築予定部分の南寄りに東西8.5m×南北3mで設定したが、重機により盛土およびI・IIa層を除去した後は東西7mに縮小し、IIb層、III層、IVa層上面で造構確認作業と精査を行った。なお、湧水が激しいため調査区南壁沿いに側溝を掘って排水作業を行った。また、調査区を埋め戻す際に、本調査区外の北側と東側をそれぞれ1.2m拡張し、造構の状況を確認している。拡張後の面積は約24m<sup>2</sup>である。

造構実測のための基準杭は調査区の方向に合わせて設定し、平面図はこの基準杭を基に簡易造り方を組んで1/20で作成した。断面図も1/20で作成している。写真はデジタルカメラで撮影した。



調査区断面

### (2) 基本層序

I～VII層まで確認し、III～IV層上面が造構確認面である。

#### I層 盛土層。

IIa層 10YR 3 / 3 暗褐色粘土質シルト。層厚約40～60cmで、黒褐色粘土ブロックを少量含む。盛土以前の耕作上である。

IIb層 10YR 4 / 2 灰黄褐色粘土質シルト。層厚約20cmで、調査区西部にのみ分布する。

III層 10YR 4 / 3 にぶい黄褐色粘土。層厚約20cmで、暗褐色粘土、灰黄褐色粘土ブロックを少量含む。

IVa層 10YR 4 / 4 褐色粘土質シルト。層厚約8cmで、暗褐色シルト質粘土ブロックを少量含む。

IVb層 10YR 2 / 3 黒褐色粘土。黒褐色シルト質粘土ブロックを斑状に含む。層厚約5cmで、調査区東側の一部に分布する。

IVc層 10YR 4 / 4 褐色粘土。暗褐色粘土を管状に少量含む。層厚約15cmで、調査区東側の一部に分布する。

V層 10YR 4 / 4 褐色粘土。黒褐色粘土ブロックを斑状に少量含む。層厚約30cmである。

VI層 10YR 6 / 2 灰黄褐色粘土。層下部ににぶい黄橙色粘土を多量に含む。層厚約70cmである。

VII層 10YR 6 / 1 褐灰色粘土。層厚約10cm以上である。

## 3. 造構と遺物

今回の調査では柱穴2基、竪穴造構1基、土坑3基、ピット20基を確認した。柱穴は2基が重複してはいるが、確認できたのは1箇所のみで、対応する柱穴は確認できなかったが、掘立柱建物跡として取り扱っている。古いほうをSB2145a、新しいほうをSB2145bとした。

**SB2145a掘立柱建物跡** 調査区南部で柱穴を1基確認した。掘り方は一辺約70×90cmの隅丸長方形で、深さは約80cmである。底面で直径約20cmの柱痕跡を確認している。掘り方の埋め土は3層に分層した。なお、埋め戻しの際に調査区北側と東側を拡張して対応する柱穴の確認に努めたが確認できなかった。遺物は掘り方埋め土から非クロロ調整の土師器片10点が出土した。

SB2188竪穴造構を切り、SB2145bに切られている。

**SB2145b掘立柱建物跡** 調査区南部で柱穴を1基確認した。掘り方は一辺約60cmの歪んだ方形で、深さは約80cmである。掘り方の中心からやや東寄りに一辺約50cmの方形の抜取り穴がある。抜き取りは深さ約60cmで、掘り方底面までは及んでいないため、抜取り底面で直径約20cmの柱痕跡と掘り方埋め土を確認した。遺物は抜取り穴や掘り

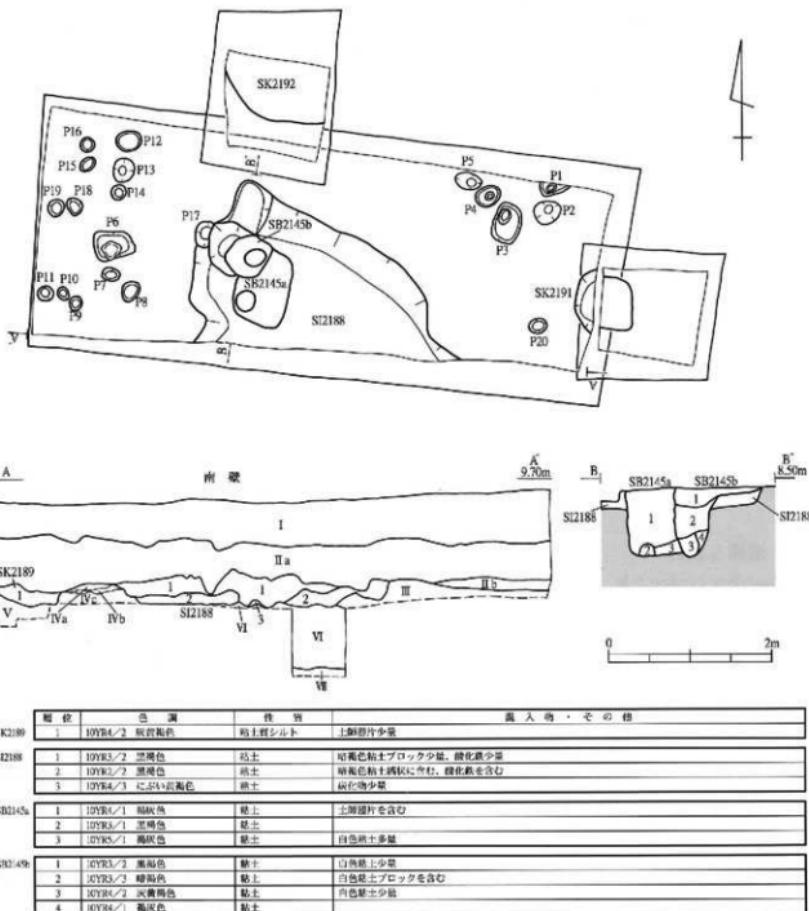
方埋め土から非クロロ調整の土師器片、須恵器片、焼骨片など約50点が出土した。須恵器E-527盤（第18図1）は抜取り穴から出土した。

SI2188堅穴造構・SB2145aを切っている。

SI2188堅穴造構 調査区南壁際に位置する。東西約3.3m以上、南北2.0m以上の不整な平面形である。深さは約30cmで、壁は傾斜を持って立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、柱穴等の施設は確認できなかった。堆積土は3層である。遺物はハケメ調整の甕など、非クロロ調整の土師器片が約60点、須恵器片2点が出土した。

SB2145a・2145bに切られている。

SK2189土坑 調査区南東コーナーに位置する（第17図南壁断面図）。大部分が調査区外となっているため平面形は不明瞭である。大きさは東西60cm以上、南北50cm以上、深さは約20cmである。堆積土は1層で、遺物は非クロロ



第17図 第177次調査区全体図、南壁断面図、SB2145断面図

調整の土師器片が16点出土した。上部器C-1004(第18図2)は脚部を欠損するが高杯と推定される。

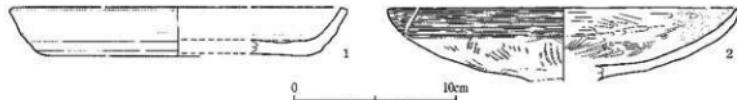
**SK2191土坑** 調査区東壁際に位置する。大部分が調査区外となっていたが、拡張した際に全体を検出した。平面形は東西約70cm×南北80cmの隅丸方形である。深さは約30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は1層で、遺物は非クロロ調整の土師器が2点出土した。

**SK2192土坑** 調査区北側の拡張区に位置する。大部分が調査区外となっているため規模は不明であるが、円形を呈するやや規格の大きな遺構と考えられる。遺構確認のみで精査を実施しなかったので詳細な時期や性格は不明である。

**ピット** 20箇所検出した。柱痕跡を確認できたのはP13のみで、詳細な時期や性格は不明である。遺物はP3・5・7・8・9・14・18から少量の土師器片が出土している。

#### 4.まとめ

SB2145aとSB2145bの樹立柱建物跡は各1基の柱穴が重複している。前述したように、これらに対応する柱穴は調査区の北側と東側拡張区では確認できなかったので、調査区からは斜め方向の南東や南西に展開する建物である可能性がある。これはSB2145bについても同様である。方向性はⅠ期官衙の遺構と共通するが、SB2145bの抜取り穴から出土した須恵器E-527盤は8世紀前半頃と考えられることから、Ⅰ期官衙の年代とは隔たりがある。SB2145の年代は、現段階では判断はできない。



No.	番号	地区・遺構・坑名	遺物・基礎	遺物高	寸法(cm)			調整・特徴	参考文献
					U往	志往	器高		
1	B-527	SB2145a・抜き取り穴	須恵器・盤	1/8	(20.0)	(16.4)	3.0	1枚打削、底面一全体下部四角部へラケズリ、口付なし	5-6-1
2	C-1004	SB2145b	土師器・高杯	堆積1D	(21.4)	-	外高 内低多量	1枚打削・ナゲテ、底面ハケメ・イザ、内面ヘラミガキ・黒色施塗	5-4-2

第18図 第177次調査出土遺物

遺構・部位	土師器	須恵器	その他
SB2145a	10		
SB2145b	48	3	続骨1
SI2188	61	4	
SK2189	16		
SK2191	2		
P3	1		
P5	4		
P7	1		
P8	2		
P9	2		
P14	2		
P18	1		
遺構確認面	24	2	
壁面・側溝	13		

表5 第177次調査遺物集計表

(註1) 仙台市教育委員会「郡山遺跡第99次調査」「郡山遺跡XIV」仙台市文化財調査報告書第178集 1991

(註2) 仙台市教育委員会「郡山遺跡第100次調査」「郡山遺跡XIV」仙台市文化財調査報告書第178集 1991



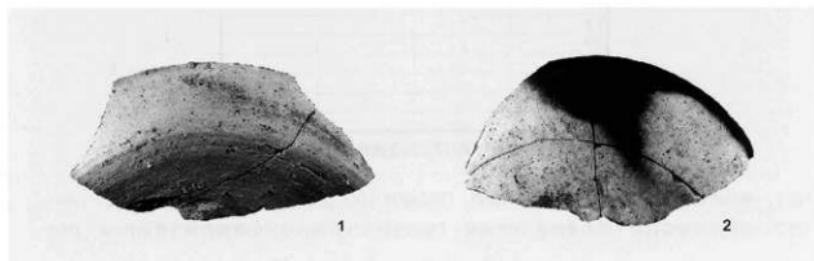
1. 調査区全景（東から）



2. SB2145断面（東から）



3. SB2145柱穴完掘状況



4. 出土遺物

写真図版5 調査区全景、SB2145、出土遺物

## VII. 第178次発掘調査

### 1. 調査経過

第178次調査は範囲確認調査である。今回の調査区の北側10~25mには平成15年度の第152次調査区（註1）と平成17年度の第171次調査区（註2）があり、南側には平成17年度の第168次調査区（註3）や平成16年度の第158次調査区（註4）が位置している。第152次調査ではⅠ期官衙東辺の材木列が2列と一本柱列が1列、溝跡2条が並行して発見され、これと一部重複する第171次調査では、Ⅰ期官衙の最も外側の材木列であるSA2055のさらに東側に約8m離れて並行するSD2125溝跡が確認されていた（註5）。

今回の調査は、このSD2125溝跡の南側の延長部分を確認し、幅や深さ等を確認する目的で実施した。

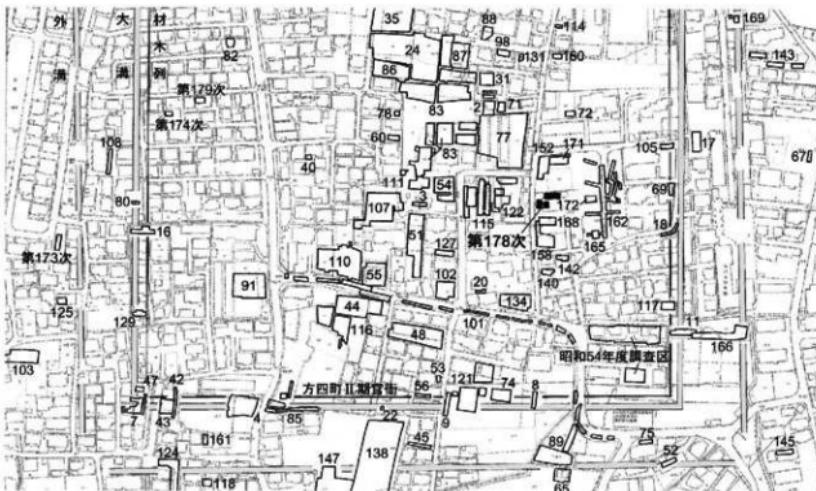
調査は平成18年10月26日から開始した。重機によって表土を除去し、遺構確認作業を開始した。Ⅱ層上面の遺構精査終了後、SD2150の精査を行ったが、溝の幅、深さ共に予想を超えた規模であり、また礫の集中地点が認められるなどしたため、12月4~5日に重機によって掛土の整理と共に調査区を追加、拡張して精査を続けた。なお、2区と3区の間には水道管が通っているため3区は離して設定した。調査を終了したのは12月20日で、翌日の21日に遺構の養生を行い、22日に重機によって埋め戻しと整地作業を行った。

### 2. 調査方法と基本層序

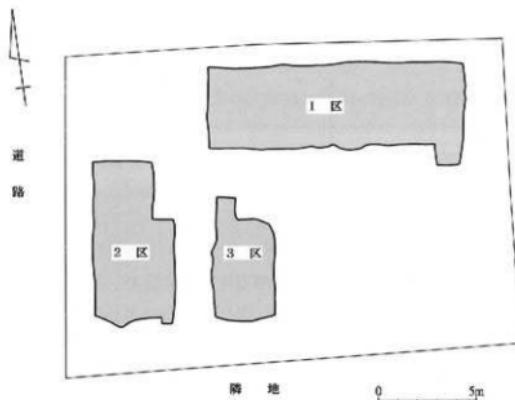
#### (1) 調査方法

当初の調査区は東西13m×南北4mの1区、1区の南西側に東西3m×南北5mの2区を設定したが、後に2区南部の東側を1m、南側を2m拡張するとともに、2区の東側に東西3m×南北5mの3区を設定した。拡張後の面積は約96m<sup>2</sup>である。

重機により盛土およびⅠ層を除去し、Ⅱ層、Ⅲ層上面で精査を行った。



第19図 第178次調査区位置図



第20図 第178次調査区設定図

遺構実測のための基準杭は調査区の方向に合わせて設定し、後に基準杭の座標値を測量する方法を取った。平面図はこの基準杭を基に簡易遺り方を組んで1/20で作成した。断面図も1/20で作成している。写真は35mmモノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影し、補助的にデジタルカメラでも撮影した。

## (2) 基本層序

厚さ約50~70cmの盛土層下にⅠ~Ⅲ層まで確認した。Ⅲ層上面が遺構確認面である。

Ⅰa層 10YR 2/2 黒褐色シルト。木炭粒・焼土粒を多量に含む。盛土以前の耕作土で、2区に分布する。

Ⅰb層 10YR 3/2 黒褐色粘土質シルト。盛土以前の耕作土。

Ⅰc層 10YR 4/2 灰黄褐色粘土。盛土以前の耕作土で、1区東半に分布する。

Ⅰd層 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト。盛土以前の耕作土で、Ⅱ層を攪拌している。

Ⅱ層 10YR 4/4 褐色シルト。層厚約10~30cm。にぶい黄褐色シルト粒を多量に含む。褐色シルトブロック（径20~50mm）を少量含む。黒褐色粘土ブロックを少量含む。旧耕作土と推定される。上面が1区のSD2193や2区のSD2198などの確認面である。

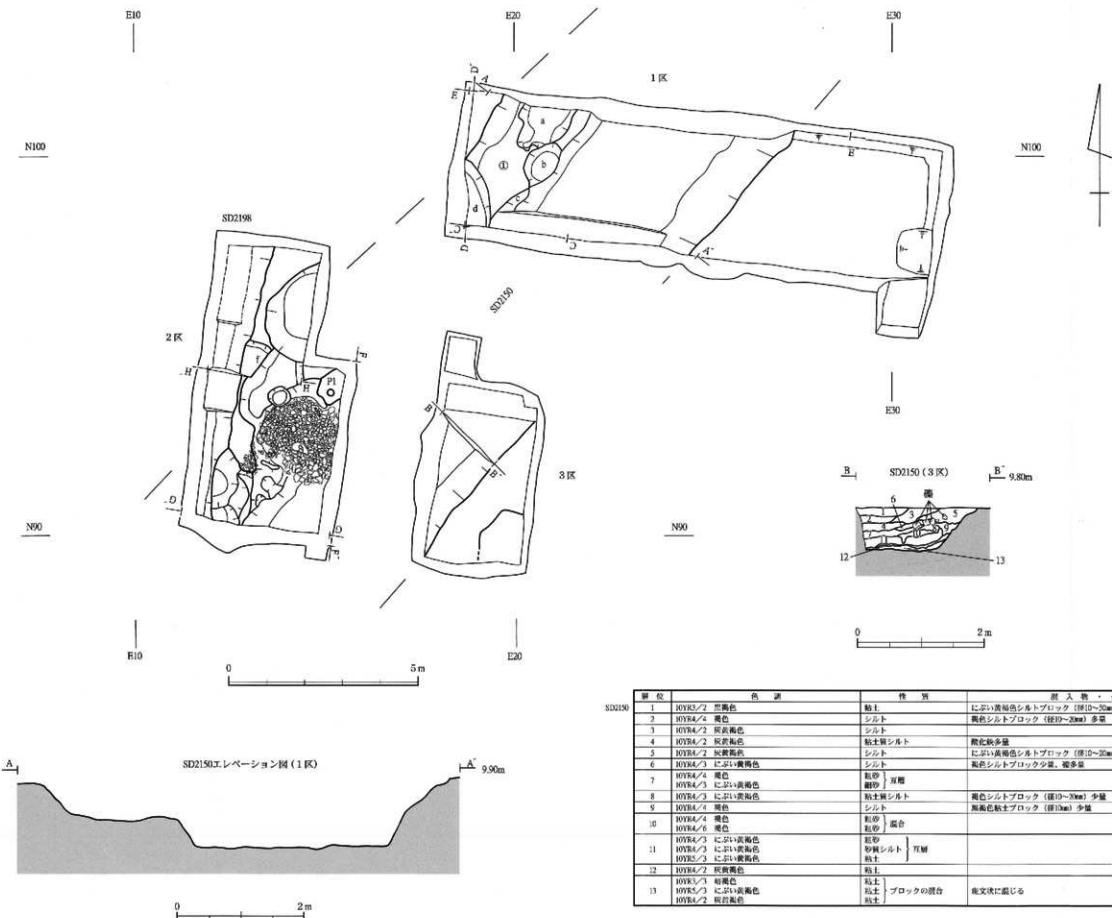
Ⅲ層 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土。層厚約20cmで、暗褐色粘土・灰黄褐色粘土ブロックを少量含む。1区の東半部は以前に家屋があったためかグライ化が著しい。上面がSD2150の確認面である。

## 3. 遺構と遺物

今回の調査では溝跡7条、柱穴1基、土坑1基を確認した。これらの遺構のうちSD2150溝跡と柱穴1基が1期宮衙に係わる遺構、SK2199が古代の遺構で、その他は近世以降と考えられる。

**SD2150溝跡** 1区西部を北東から南西方向に横断する大規模な溝跡で、2区では西側の肩、3区では東側の肩を検出している。1区では、西壁下に幅約1.6mのテラス状の平坦面（註6）を伴う段差があり、その東側にさらに一段深い部分が認められた。

西壁下のテラス状の平坦面については、このすぐ近くに土坑状の窪みが集中している（註7）ことから、土坑状の窪みの連続によって結果的にテラス状の平坦面を形成している可能性も考えられる。2区においても土坑状の窪みが連続して西壁（註8）下にテラス状の面が形成されているが、2区の場合は1区のような平坦面ではなく、明らかに土坑状の窪みの底面が連続して凹凸面となっている。1区のテラス状の平坦面については、2区とは状況が異なっていることから、土坑状の窪みとは関係なく最初から存在していたと考えられる（註9）。なお、土坑状の窪

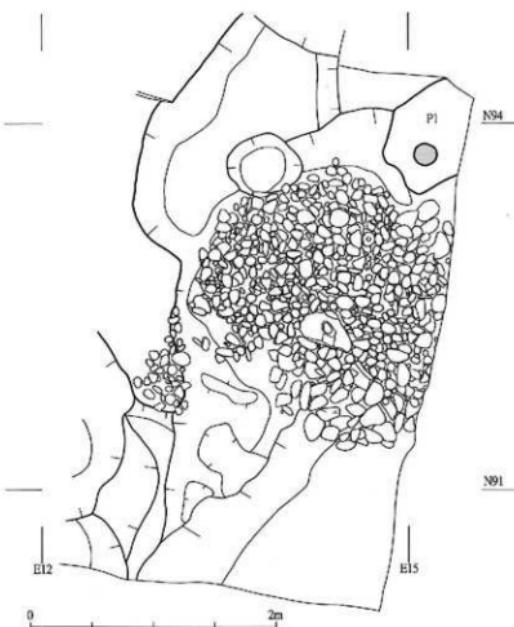


第21図 SD2150平面・断面図

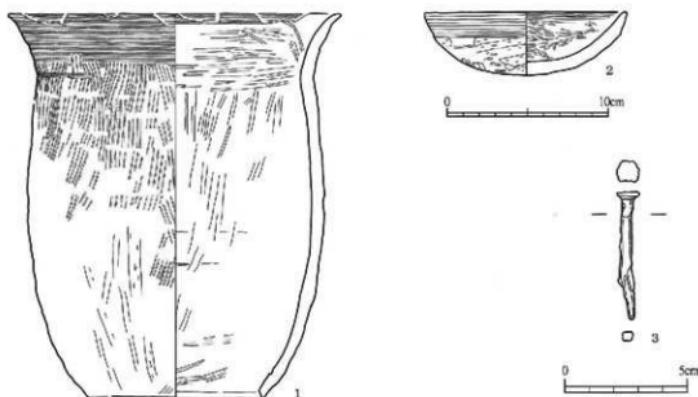
みは、溝が機能していたある時期、溝の半ば堆積途中で掘られたものと推定されるが（註10）、その性格等については明らかにできなかった。

以上のように、西辺は不確定であるが、上幅は最大で6.3m、最小の場合でも約5.0mと推定され、底面幅は東側の最深部で3.0m、深さは東側上端から約1.1m、西側のテラス状の平坦面から約50cmである。西側のテラス状の平坦面は最も広く捉えた場合で幅約1.6m、深さは55～60cmである。断面は、東側の部分だけを見ると逆台形を呈し、底面は平坦である。壁の下半部は急角度で立ち上がるが、上半部はやや緩やかな角度となる。確認した長さは各区を総合して約14mで、方向は概ねN-34°-Eである。

堆積土は、最上層が黄褐色粘土ブロックや黒色シルトブロックを多量に含む厚さ40～50cmの灰黃～暗褐色粘土であり、人為的に埋め戻されている。



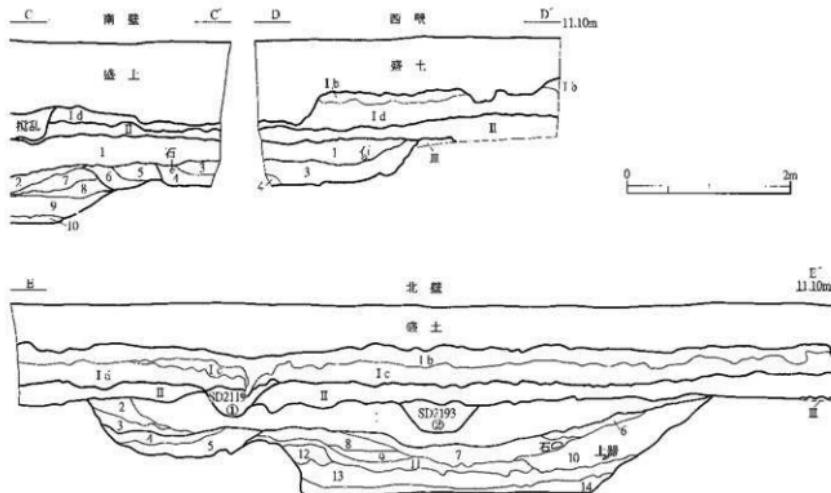
第22図 SD2150部分図（2区）



第23図 SD2150出土遺物

No.	登録No.	地区・遺跡・層位	種別・形様	遺存度	寸法(cm)			特徴・特徴	写真 回数
					口径	底径	留高		
1	C-1007	1区・SD2150下層	土器部・甌	1/4	(20.4)	(10.5)	34	口横ヨコナギ、底部ハケメー部分的にナギ、手折ヘラケツリ、堅いヘラミガキ、内面白粘コナギ。底部ヘラミガキ、体筋下端部分にヘラナギ、口付なし	6-2
2	C-1006	2区・SD2150	土器部・甌	絶対定期	12.5	—	3.9	口横ヨコナギ、底部ケズリ→堅いヘラミガキ、内面ヘラミガキ、内折なし	6-1

No.	登録No.	地区・遺跡・層位	種別・形様	遺存度	寸法		特徴	写真 回数
					長さ	幅		
3	N-0-129	1区・SD2150上層	鉄製品・刃	絶対定期	長さ5.3cm、幅2.9cm、厚さ0.3cm、重さ3.9g	—	—	5-3



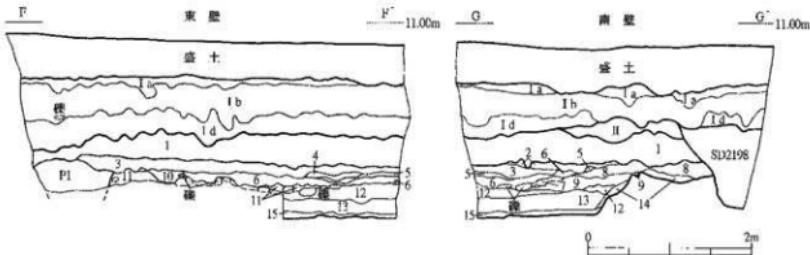
層位	色調	性質	埋入物・その他の
1. 0YRS/2 黄褐色	粘土	褐色粘土ブロック (径10~30mm) 多量、型輪柱ホルトブロック (径20~50mm) 少量、北壁の1層	
2. 0YRS/3 にぶい黄褐色	砂	褐色粘土 (底文灰) シルト、上壁の少層	
3. 0YRS/3 細粒砂	粘土	にぶい黄褐色 (10YRS3/3) 軽オブリック (厚30~30mm) が複数段に入る	
4. 0YRS/3 にぶい黄褐色	粘土	風化粘土ブロック (径10~30mm) 黄褐色粘土ブロック (径10~20mm) 多量	
5. 0YRS/3 黄褐色	粘土	0YRS/4 にぶい黄褐色	
6. 0YRS/4 黄褐色	粘土	褐色粘土ブロック (径5~15mm) 淡褐色粘土ブロック (径5~15mm) 少量	
7. 0YRS/4 にぶい黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック (径5~10mm) 少量	
8. 0YRS/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰黄色細粒シルトブロックを底文灰に多量に含む、北壁の2層	
9. 0YRS/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	部分的に褐色粘土ナリック (厚5mm) 少量、にぶい黄褐色 Lブロック (径5mm) 少量、北壁の13層	
10. 0YRS/5 細粒砂	粘土	0YRS/5 にぶい黄褐色	
		にぶい黄褐色粘土ブロック (径5mm) 少量	
		0YRS/5 にぶい黄褐色	
		北壁の14層	
①	10YR4/2 黄褐色	粘土	にぶい黄褐色シルトブロック (径5mm) 多量、SD2119
②	10YR4/2 細粒砂	粘土	灰褐色粘土ブロック (底文灰) 多量、褐色粘土ブロック (厚30mm) 少量、SD2120
1	10YR4/2 黄褐色	粘土	褐色粘土ブロック (径10~30mm) 多量、
2	10YR5/3 可塑性	粘土	風化粘土シルトブロック (径5~10mm) 少量
3	10YR5/3 黄褐色	粘土	褐色シルト粘土
4	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	底下の褐色粘土と互層
5	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック が底文灰に入る 褐色粘土ブロック (ライ化)、褐色粘土ブロック (厚10mm) 少量
6	10YR5/5 可塑性	粘土	東半部は褐色粘土 (ライ化)、東半部は可塑性
7	10YR5/5 にぶい黄褐色	砂質	小量の褐色粘土層に入る
8	10YR5/5 にぶい黄褐色	粘土	にぶい黄褐色粘土ブロック (厚10~30mm) 少量、 灰褐色粘土にぶい黄褐色 (10YR5/5) 粘土と互層
9	10YR5/5 にぶい黄褐色	砂質	酸化鉄 (底文灰) 少量
10	10YR5/5 黄褐色	粘土 砂質	褐色粘土ブロック (径5~10mm) 少量、木炭粉少量
11	10YR5/5 黄褐色	シルト質粘土	部分的に褐色粘土と互層になる
12	10YR5/5 にぶい黄褐色	砂質シルト	灰褐色細粒シルトブロックを底文灰に多量に含む
13	10YR5/5 にぶい黄褐色	砂質シルト	部分的に褐色粘土ブロック (厚5mm) 少量、 にぶい黄褐色粘土ブロック (厚5mm) 少量
14	10YR5/5 黄褐色	江戸	
	10YR5/5 黄褐色	砂質シルト	
	10YR5/5 にぶい黄褐色	江戸	
	10YR5/5 にぶい黄褐色	粘土	
	10YR5/5 にぶい黄褐色	底文灰に盛る	
	10YR5/5 黄褐色	粘土	

第24図 SD2150断面図（1区）

この埋め戻し土は溝東部の深い部分だけでなく、西側の浅い段差部分にも及んでいる。下層はすべて自然堆積層である。壁際に流入土が認められるものの、粘土を主体とする互層と水平に堆積した砂層が認められた。砂の質は1区では細砂で粘土層との薄い互層となっている場合が多いが、2区では比較的層が厚く、また粒子が粗い傾向にある。このような層相から水成堆積層と考えられる。

2区において礫が集中する地点が認められた。礫は川原石と推定され、大きさは5~10cm程度のものが大部分であるが、中には20cmに達するものも認められる。礫群の中央部には25×45cmの大きな礫がある。断ち割りをしなかつたので礫の重なり方は明確ではないが、一重へ二重程度であり、さほどの厚みはないと考えられる。礫群の範囲は、南北約2.3m、東西は2.0m以上で、大部分が西壁下の浅い半円形の上坑状の窪み(註11)内部に収まるが、一部の礫は土坑状の窪みの外(西)側にも認められたことから、礫の分布範囲は窪みの外側にも及んでいたと推定される(註12)。東側では溝の深い部分の堆積土であるやや粗い砂層(註13)の上に乗っている。なお、東側では礫の上を細砂層(註14)が覆っていることから、礫が集められた後も、ある程度の期間はSD2150には一定量の水流があったと考えられる。これらの礫の用途、機能については不明である。

2区東壁際では、礫群を覆っている細砂層(註15)を切る柱穴P1を確認しているが、これと組む柱穴を確認できなかったので掘立柱跡物跡としては取り扱わなかった。P1の掘り方は80cm×60cm以上の長方形と推定され、柱痕跡は直径約16cmの円形である。掘り方は粘土層によって版築状に突き固められている。掘り方の上を細砂層(註16)が覆っているので、SD2150に一定量の水流がある段階に掘られ、機能していたと推定される。掘り方からは土



層位	性 質	生 質	盛 入 物 や その他の	
			入	物
1	SD2150/? 塗膜色	粘土	角褐色粘土ブロック(厚10~30mm) 多量、 黄褐色粘土ブロック(厚10~50mm) 多量(下部に多い)	
2	SD2141/2 黄褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土ブロック(厚10~30mm) 少量、 黄褐色粘土ブロック(厚10~20mm) 少量	
3	SD2141/2 黄褐色	泥炭	黒褐色粘土ブロック(厚10mm) 少量、部分的に黄褐色粘土と混じる	
4	SD2141/2 黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック(厚10~30mm) 多量	
5	SD2150/3 にぶい黄褐色	泥炭	火候褐色粘土ブロック(厚5~10mm) 少量	
6	SD2150/3 にぶい黄褐色	細砂		
7	SD2141/2 黄褐色	細砂		
8	SD2141/2 黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック(厚10~50mm) 多量、にぶい黄褐色粘土ブロック(厚5mm) 少量、黄褐色粘土多量	
9	SD2141/2 黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック(厚5~10mm) 多量	
10	SD2141/3 にぶい黄褐色	粘土	ブロックの混合	
	SD2141/2 黄褐色	細砂		
11	SD2141/2 黄褐色	細砂(礁の殻等に入る)	毛細孔セラミック(厚5~10mm)、黒褐色粘土ブロック(厚5~10mm)、 にぶい黄褐色粘土ブロック(厚5~10mm) 多量	
12	SD2141/2 黄褐色	セラミック		
13	SD2141/2 黄褐色	泥炭		
14	SD2150/2 黄褐色	粘土	黒褐色粘土ブロック(厚10~20mm) 多量	
15	SD2150/2 黄褐色	粘土	ブロックの混合	
柱穴開口			厚さ~30mmの互層、 断面形状に變化	
P1			にぶい黄褐色粘土ブロック(厚5~30mm) 多量	

第25図 SD2150断面図(2区)

師器片が3点出土している。柱穴の用途は特定できなかった。

遺物は非クロロ調整の土師器片324点、須恵器片5点、鉄製品4点、鉄滓12点が出土した。鉄製品Na-129釘(第23図3)は1区の埋め戻し土から、土師器C-1007釘(第23図1)は1区最深部の下層(註17)から出土した。土師器C-1006釘(第23図2)は2区の様群を覆う細砂層(註18)から出土した。器形や調整技法から在地の土器と考えられる(註19)。

1区でII層上面の遺構SD2119・2194・2196・2197溝跡と、SD2193溝跡に切られ、2区でII層上面の遺構SD2198溝跡に切られている。

**SD2119溝跡** 1区のII層上面で確認した溝跡で、1区の西部を南北方向に横断している。上幅約45~60cm、底面幅は30~45cm、深さ約35cmで、断面形は上が開いた「U」字形を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。検出した長さが約3.6mと短いため方向は確定しがたいが、概ねN-4°-Eである。堆積土は1層である。位置関係と形状から第152次調査で検出したSD2119の延長部分と考えられる。

遺物は土師器片が2点出土した。

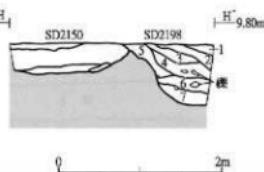
同じくII層上面で確認したSD2194・2196・2197溝跡を切っている。

**SD2193溝跡** 1区のSD2150の堆積土上面で確認した溝跡で、1区のほぼ中央を南北方向に横断している。上幅約75~90cm、底面幅は40~45cm、深さ約35cmで、断面形は逆台形を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。検出した長さが約3.5mと短いため方向は確定しがたいが、概ねN-1°-Eである。堆積土は1層である。

遺物は土師器片1点、鉄製品1点が出土した。

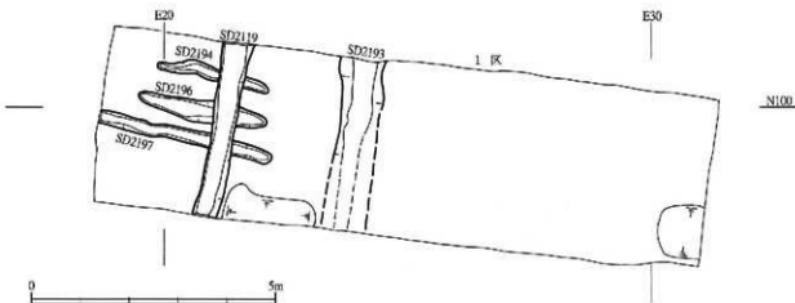
SD2150溝跡を切っている。

**SD2194・2196・2197溝跡** 1区のII層上面で確認した溝跡で、1区の西部を東西方向に走っている。上幅約20~45cm、底面幅は15~30cm、



層位	色調	性質	堆積物・その他	
			SD2150	SD2198
1	SD216/3 にぶつ青褐色	シルト質粘土		
2	SD213/2 黒褐色	粘土		
3	SD214/4 黑色	シルト		
4	SD214/2 深赤褐色	粘土	灰青褐色シルト質粘土ブロック(径10cm)少量	褐色粘土ブロック(径10cm)少量、褐色多量
5	SD214/2 にぶつ青褐色	シルト	褐色シルト軽少量	
6	SD214/1 褐灰色	粘土	褐色粘土ブロック・褐色粘土ブロック(径10~40cm)少量、褐色多量	
7	SD214/1 褐灰色	粘土質シルト	褐色な互層	
	SD214/2 深赤褐色	粘土		

第26図 SD2198断面図



第27図 II層上面平面図

深さ3~7cmで、断面形は浅い皿形を呈する。壁は緩やかに立ち上がる。検出した長さは約2.3~3.6mで、方向は概ねE~2°~Sである。堆積土は直上層に類似している。同じような形状の溝跡3条が並んでいることと堆積土の状況から、これらは直上層の耕作に伴う小溝状遺構群である可能性が高い。

遺物は出土しなかった。

SD2119溝跡に切られている。

**SD2198溝跡** 2区のII層上面で確認した溝跡で、西壁際を南北方向に継続している。東側の肩から下端にかけて検出できたのみである。上幅は1.2m以上、底面幅は45cm以上、深さ約100cmである。東壁は急角度で立ち上がるが、上方はやや緩やかになる。検出した長さは約7.2m、方向は概ねN~3°~Eである。堆積土は自然堆積層であるが、礫が大量に含まれる。

遺物は土師器片、須恵器片、陶器片、鉄滓などが少量出土した。

SD2150溝跡を切っている。

**SK2199土坑** 3区南東コーナーに位置する。東西1.1m以上、南北1.4m以上である。堆積土上部に灰白色火山灰を含んでいるので古代の遺構と考えられる。約10cm掘り下げたのみで、それ以上の精査は行わなかった。土師器片2点、須恵器片1点が出土した。

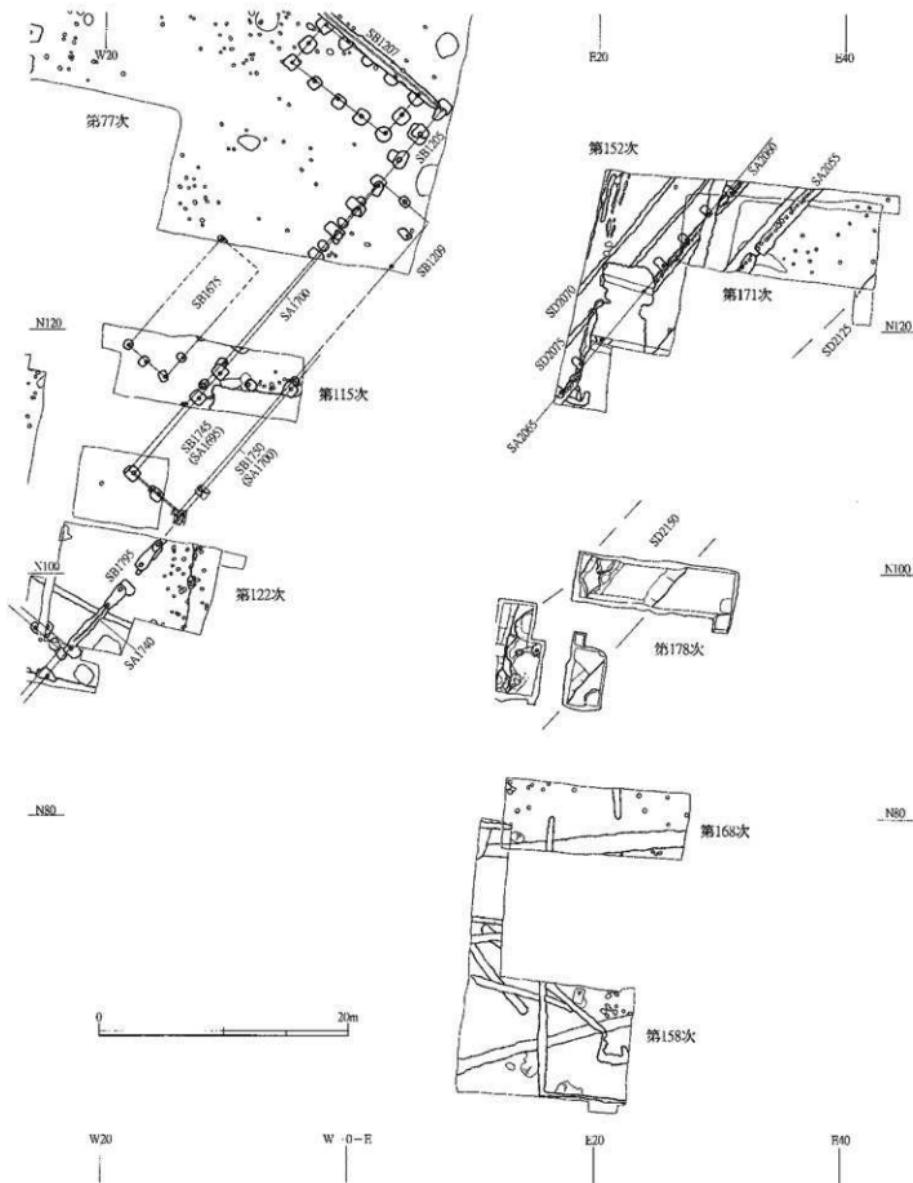
#### 1.まとめ

SD2150溝跡は、方向や出土遺物などからI期官衙期の遺構と判断される。これまで確認されているI期官衙期の溝跡の中では最も幅広で深い。位置関係から、北東に約30m離れた第171次調査区で確認されたSD2125溝跡と連続する遺構であると考えられる。第171次調査SD2125はごく一部のみの調査に留まっているが、深さが約15cmと浅く、底面の標高は約0.5mである。1区におけるSD2150の深さは、西側の段差部分で約50cm、東側の深い部分で約110cm、底面の標高は、西側の段差部分で約9.3m、東側の深い部分で約8.6mであるので、第171次調査区のSD2125溝跡はSD2150の内側の段差部分に対応する可能性がある。なお、第171次調査区ではSD2125の幅を約230cmと推測したが(註20)、これではSD2150の溝幅6.3mとは一致しない。これには次のような理由が考えられる。171次調査区埋め戻しの際に、調査区南側を拡張してSD2125の東側の肩を確認したが、仮に拡張した部分のSD2125の堆積土が、今回調査したSD2150と同じように最上層の埋め戻し土に黄褐色粘土ブロックが多く含まれていた場合、これを基本層直層と認めた可能性がある。したがって第171次調査でSD2125の東側の肩と判断した箇所は堆積土の違いであった可能性がある。

第171次調査区のSD2125溝跡はSA2055材木列から東に約8m離れて並行しているが、このSA2055材木列は、I期官衙東辺を構成する複数の材木列や一本柱列のうちで最も東側にあるので、SD2125溝跡とSD2150溝跡はI期官衙東辺のさらに東側に位置することとなる。当調査区の2区から約30m西の地点にはI期官衙中枢部の区画に設置されたSB1795門跡(註21)があり、この付近がI期官衙の正面と考えられている。SD2150溝跡を南西方向へこのまま延長していくと、SB1795門跡から約25m離れてはいるが、その正面を通過することとなる。

SD2150溝跡の下層の堆積土は、層相から水成堆積層であると考えられた。大部分は細砂であるが、2区では粗砂に近いものも認められた。ただし、堆積土すべてが砂層ではなく、粘土や粘土質シルトを主体とする互層も認められることから、ほとんど流れずに搬んだ状態もあったと考えられる(註22)。のことと、溝跡が幅広で深いこと、溝底面が平坦であること、また北東には広瀬川が流れていることなどから類推すると、SD2150溝跡は「運河」としての機能も持っていた可能性が考えられる(註23)。ただし「運河」として確定するためにはまだ検証すべき項目が数多くあることから、今回はその可能性を指摘するに留めておきたい(註24)。

なお、2区のSD2150内部に認められた縦については、縦が砂層の上に乗り、さらにその上を別の砂層が覆っている



第28図 I期官衙北東部全体図

ることから、SD2150に水が流れている時点で集められたものと推定した。調査区の制約によって礫群の東側の状況は確認できず、性格も特定できなかった。すぐ北側で確認された柱穴P1についても用途は確定できなかった。

遺構・層位	土師器	須恵器	金屬製品	陶器	磁器	その他
SD2150	324	5	4			鉄片12
SD2119	2					
SD2193	1		1			
SD2198	1	3		1		鉄片2
SK2199	2	1				
P1・掘り方	3					
I・II層	85	13	2	28	23	瓦6、鉄片4

表6 第178次調査遺物集計表

- (註1) 仙台市教育委員会「第152次発掘調査」『郡山遺跡24』仙台市文化財調査報告書第269集 2004  
 (註2) 仙台市教育委員会「第171次発掘調査」『郡山遺跡26』仙台市文化財調査報告書第296集 2006  
 (註3) 仙台市教育委員会「第168次発掘調査」『郡山遺跡26』仙台市文化財調査報告書第296集 2006  
 (註4) 仙台市教育委員会「第158次発掘調査」『郡山遺跡25』仙台市文化財調査報告書第281集 2005  
 (註5) SD2125は調査区の南東隅に位置していたため部分的な積石に留まっている。埋め戻しの際に調査区南側を一部扯張して幅を約2.3mと推定しているが、今回の調査結果からすると幅の数値については修正する必要があると考えられる。  
 (註6) 第21図中①地点  
 (註7) 1区平面図のa～d地点が土坑状の窓み。北壁断面図(第24図下)4・5層、I区西壁断面図(第24図右上)3・4層、1区南壁断面図(第24図左上)3・4層、5・6層がこの堆積土に相当する。  
 (註8) 2区における西壁は明確ではないが、図中f地点が西壁と想定される。  
 (註9) 1区北壁断面図のSD2150の堆積土8層と11層が40cm程このテラス状の平坦面の上に乗っていることから、平坦面(西壁の段差)が存在したことが確認できる。ただし当初からこの幅(約1.6m)であったかどうかは断定はできない。  
 (註10) 1区北壁断面図の4・5層や2区南壁断面図の8・14層の上には溝の埋め戻し土が積っていることから、埋め戻しの段階ではこの部分は埋んでいたことが判る。また、2区南壁断面図(第25図右)の8・14層は、溝の堆積土に続いているので、この部分は溝が機能していた時期に掘り込まれたと考えられる。後述する礫の集中地点についても土坑状の窓みと関連がある。  
 (註11) SD2150の上面及び堆積土においてプランは確認できなかった。  
 (註12) すぐ西側にSD2150を切るSD2198溝跡が位置しているが、このSD2198の堆積土中には多くの礫が認められた。断定はできないが、これらがSD2150の窓みの外側にあった礫である可能性は考えられる。  
 (註13) 2区東壁断面図(第25図左)の12層  
 (註14) 2区東壁断面図の6層・5層・3層  
 (註15) 2区東壁断面図の11層  
 (註16) 2区東壁断面図の3層  
 (註17) 1区北壁断面図(第24図下)の13層  
 (註18) 2区東壁断面図の3層  
 (註19) C-1006杯は、やや厚手で、丸底の体部とわずかに開き気味の口縁部を有し、内面および外面部にヘラミガキが施されている。内面の黒色処理は確認できず、はじめから黒色処理が施されていないのか、後で失われたのか判断しがたいが、全体的にはⅠ期官衙期の構造に認められる在地の土器と共通する特徴を有している。  
 (註20) 仙台市教育委員会「第171次発掘調査」『郡山遺跡26』仙台市文化財調査報告書第296集 2006  
 (註21) 仙台市教育委員会「第122次発掘調査」『郡山遺跡XIX』仙台市文化財調査報告書第234集 1999

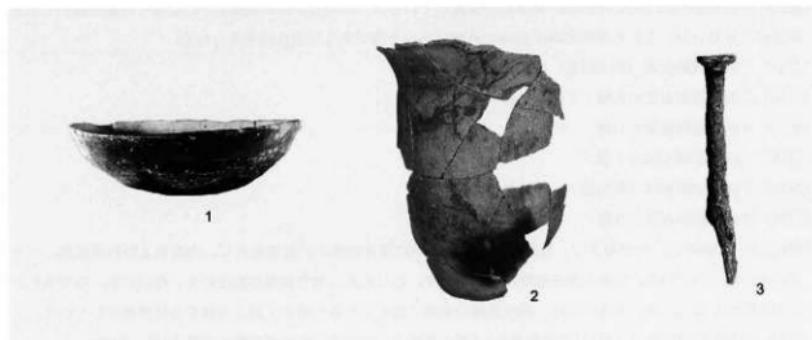
(註22) 恒常に水があったかどうかは不明である。

(註23) 県内で運河状遺構として報告例があるのは、多賀城跡南面に位置する市川橋遺跡と赤井遺跡である。市川橋遺跡の場合は河川を直線的に改修した大規模なものであるので比較できないが、赤井遺跡で「SD365運河状遺構」とされた溝跡は区画溝と運河としての両機能が考えられている。この「SD365運河状遺構」は上端幅4.5m前後、底面幅が3.5m前後で、底面は平坦であるなど、SD2150と共通点が多く認められる。

(註24) 北東、南西方向のつながりは不明である。また北東方向へ約600m直線的に延長すると広瀬川に達するが、この地点における川の水面標高は通常5m以下であり、SD2150底面の標高8.6mと比べるとかなり差がある。当時の水面標高が現代よりも高かった可能性や、本書「第176次発掘調査」で述べたように、河川の流路が現代とは大きく異なって遺跡北部にかなり近い地点を流れていた可能性などがあり、川からの取水ルートなどは不明である。



土器C-1006出土状況



写真図版6 SD2150出土遺物



1. SD2150完掘状況（1区・東から）



2. SD2150断面（1区北壁）

写真図版7 SD2150溝跡（1）



1. SD2150断面（1区北壁・部分）



2. SD2150断面（1区西壁）



3. SD2150断面（1区南壁・部分）

写真図版8 SD2150溝跡（2）



1. SD2150跡出土状況（2区・南から）



2. SD2150跡出土状況（2区・北から）

写真図版 9 SD2150溝跡（3）



1. SD2150断面（2区南壁）



2. SD2150断面（2区東壁）



3. SD2150断面（2区東壁）

写真図版10 SD2150溝跡（4）



1. 3区全景（南から）



2. 3区全景（北東から）



3. 断面（3区）

## VIII. 第179次発掘調査

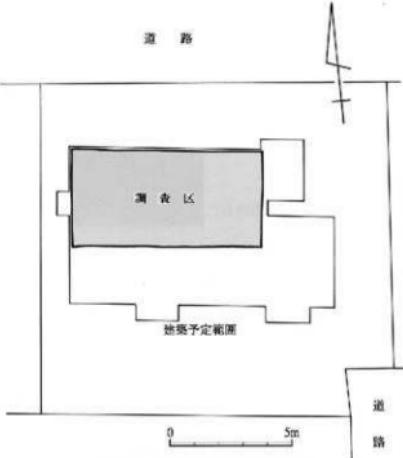
### 1. 調査経過

第179次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成18年10月23日付で仙台市太白区郡山2丁目56-11における住宅建築に伴う発掘届が提出された。住宅の基礎工事によって遺構が破壊されると想定されたため、調査を実施することとした。

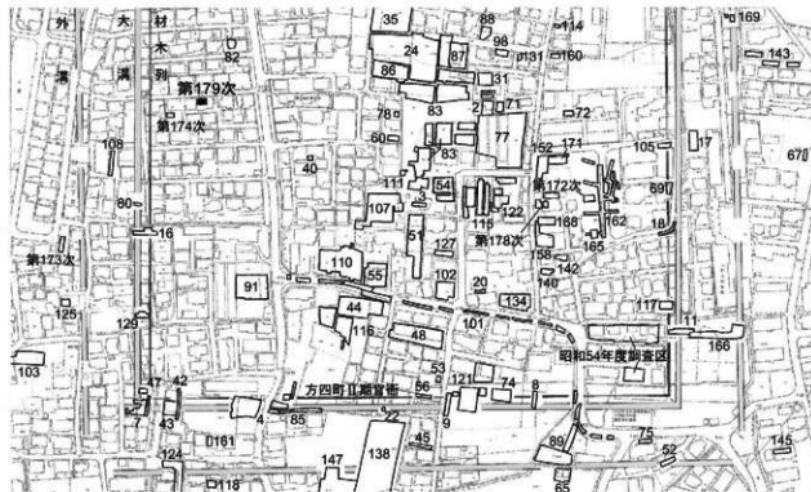
調査区は方四町Ⅱ期官衙西辺から官衙内部40~50mの地点にあたるため、Ⅱ期官衙に係わる遺構が検出される可能性も考えられた。

調査は11月6日に開始した。調査区は東西8m×南北3mに設定し、重機で盛土層を除去した後、精査を実施した。盛土下1.4m下で旧水田耕作土と推定される粘土層を確認し、さらにその下層で確認した黄褐色粘土層上面で遺構確認作業を行ったが、遺構は確認できず遺物も出土しなかった。下層観察を行ったところ、郡山遺跡での通常の遺構確認面よりも下層で認められる粘土層が確認されたので、過去の土取り等によって遺構面は既に失われている可能性が高いと判断した。

11月8日には全景写真や図面作成を終了し、9日に埋め戻しと整地作業を行い、調査を終了した。



第29図 第179次調査区設定図



第30図 第179次調査区位置図

## 第3章 陸奥国分寺跡

### I. 調査の経過と方法

#### 1. 調査経過

陸奥国分寺跡は若林区木ノ下に所在する。大正11年（1922）に国史跡となり、昭和30年（1955）から34年（1959）にかけて実施された学術調査により主要伽藍の概要が明らかとされている。その後昭和47年からは史跡公園として整備するため断続的に調査が行われてきたが、今年度からは整備計画を策定すること目的とした調査を継続的に実施していくこととなった。第1年次にあたる今年度は、伽藍地南辺と北辺部の状況を明らかにすることを主要な目的とした。

5月23日に重機によって1区の表土除去を開始し、翌日から精査を開始した。1区における南辺築地の精査が進んだ段階で調査区を拡張する必要性が認められたため、6月5～6日に2・3区の表土除去作業終了後に1区北部と南部を拡張した。その後は各区を併行して精査を進めたが2区と3区は造構・遺物が多かったために調査時間が長くかかっている。7月28日には指導委員会による現地指導を受け、8月5日に現地説明会を実施し、8月9日にはすべての調査を終了した。埋め戻しと整地作業は8月9～10日に行った。各区の調査面積と調査日程は以下のとおりである。

1区	195m <sup>2</sup>	5月23日～6月19日	2区	120m <sup>2</sup>	6月5日～8月9日	3区	144m <sup>2</sup>	6月6日～8月8日
4区	168m <sup>2</sup>	6月27日～8月9日	5区	72m <sup>2</sup>	6月27日～7月19日	6区	40m <sup>2</sup>	6月28日～7月18日

#### 2. 調査方法

##### （1）調査方法

伽藍地の南辺西部に1区、伽藍地の北側に2・3区、寺地北部に4～6区を設定して調査を開始した。このうち1区は調査中に拡張し、拡張後の総面積は約739m<sup>2</sup>である。

重機で盛上層と旧表土層を除去し、その直下層上面で精査を行った。なお、造構は完掘せずに保存することを前提とし、基本的に土坑などは半裁まで、柱穴などのビットは柱痕跡を確認するまで留めることとしている。

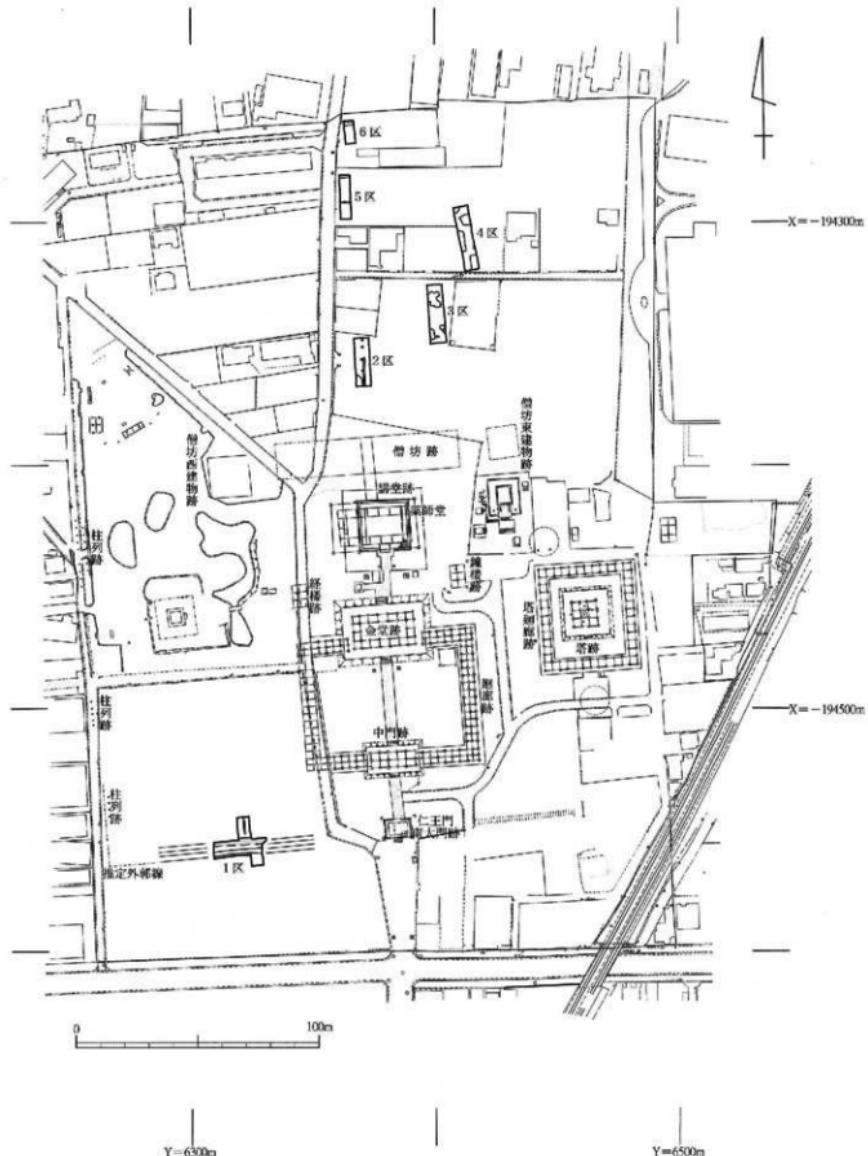
造構実測のための基準杭は調査区の方向に合わせて設定し、後にこの座標値を測量する方法をとった。平面図は基準杭を基に簡易造り方を組んで1/20で作成した。断面図も1/20で作成している。写真は35mmモノクロフィルムとリバーサルフィルムを一眼レフカメラで撮影し、補助的にデジタルカメラでも撮影した。

##### （2）基本層序

調査区が広範囲なため、1～6区まで全区に共通する基本層序を把握することは困難であるが、盛土層下は概ね以下のように分けられる。

- I. 現代の表土層で暗褐色シルト～粘土質シルト層、1区と2区はこの上に校庭の砂と瓦盤層が乗っている。
- II. 旧耕作上で、暗褐色や黒褐色のシルト層。
- III. 旧表土と推定される黒褐色の粘土層。
- IV. 暗褐色の粘土層で、上面が造構確認面である。

なお、各区における基本層序は、必要に応じて後述する。



第31図 陸奥国分寺跡全体図

## II. 1区の調査

### 1. 調査の概要

1区は昨年度に移転した学校敷地内にあり、ちょうど校庭部分にあたる。伽藍地南辺の築地と溝跡を調査するため東西20m×南北6mに設定したが、築地が予定よりもやや北側に寄って確認されたため北側を5×10m拡張することとし、南側についても昭和54年調査区との間ににおける状況を把握するため5×5mの範囲で拡張した。調査の結果、築地本体は遺存していなかったが、その基礎部分を確認し、南側には並行する溝跡、北側には直交する溝跡を確認した。

### 2. 基本層序

- 校舎解体後、敷地全体に30~40cmの厚さで盛土がされている。盛土層下で確認した基本層序はI~IV層である。
- Ia層 校庭に敷かれた砂とその基盤層。基盤層は極めて固い。
  - Ib層 10YR 4/3にぶい黄褐色粘土質シルト。褐色粘土ブロックを少量含む。校庭基盤層下の盛土層。
  - Ic層 10YR 3/3暗褐色シルト質粘土。校庭基盤層下の盛土層。
  - II層 10YR 3/3暗褐色シルト質粘土。褐色粘土ブロックを少量含む。校庭を造成する以前の旧耕作土と推定される。調査区南部に分布する。
  - IIIa層 10YR 2/3 黒褐色シルト質粘土。部分的に暗褐色シルト質粘土ブロックを少量含む。旧表土と推定され、調査区北部に部分的に遺存するが、南部ではII層によって深く攪拌されており、全く遺存しない。
  - IIIb層 10YR 2/2 黒褐色粘土。旧表土と推定され、調査区北部に部分的に遺存する。
  - IV層 7.5YR 4/4 褐色粘土。上面が遺構確認面である。

### 3. 遺構と遺物

1区では築地塀の掘り込み地業1(SF45)、溝跡3条(SD1・6・7)、上坑5基(SK2~5・46)、ピット約25基を確認した。このうち陸奥国分寺跡に係わる遺構はSF45築地塀跡、SD1・6溝跡、P1・2と考えられる。

**SF45築地塀跡** 築地塀本体は削平されて遺存しないが、基礎部分である掘り込み地業の版築層を確認した。掘り込み地業は溝状を呈しており、拡張以前の調査区北壁にかかるて東西方向に延びている。西部は倒木痕と推定されるSK4や塊乱があり、東部は南西から延びてくる暗渠によって大部分が破壊されているため、遺存状況はよくない。平面で確認できたのは北側拡張区南端の東西5m×南北1mの範囲と、調査区北東部の東西2.8m×南北1.3mの範囲であるが、調査区北壁の観察などによると拡張以前の調査区北壁際にも断片的に残存していた可能性がある(註1)。掘り込み地業の幅は拡張区南端で確認した北側のライン(第33図①)と調査区東端で確認した南側のライン(第33図②)によると約2.6mであるが、上部を削平されているので本来はもっと幅広であった可能性がある(註2)。掘り込み地形の深さは約30~35cmで、褐色粘土ブロックを含む黒褐色や暗褐色粘土層による固い版築層となっている。版築層は主に褐色粘土ブロックの混合度合いによって3層に分類したが、実際は厚さ5mm前後の層が連続して積み重なっており、褐色粘土ブロックが横につぶれた状況が観察された(写真図版I3-3、14-2・3)。方向は概ねE~4°-Nである。

**SK4東側のIV層上面**には10×25cm程度の楕円形や不整形の窓があり、版築層の最下層が入り込んでいた。掘り込み地業に係わる痕跡と考えられる(註3)。

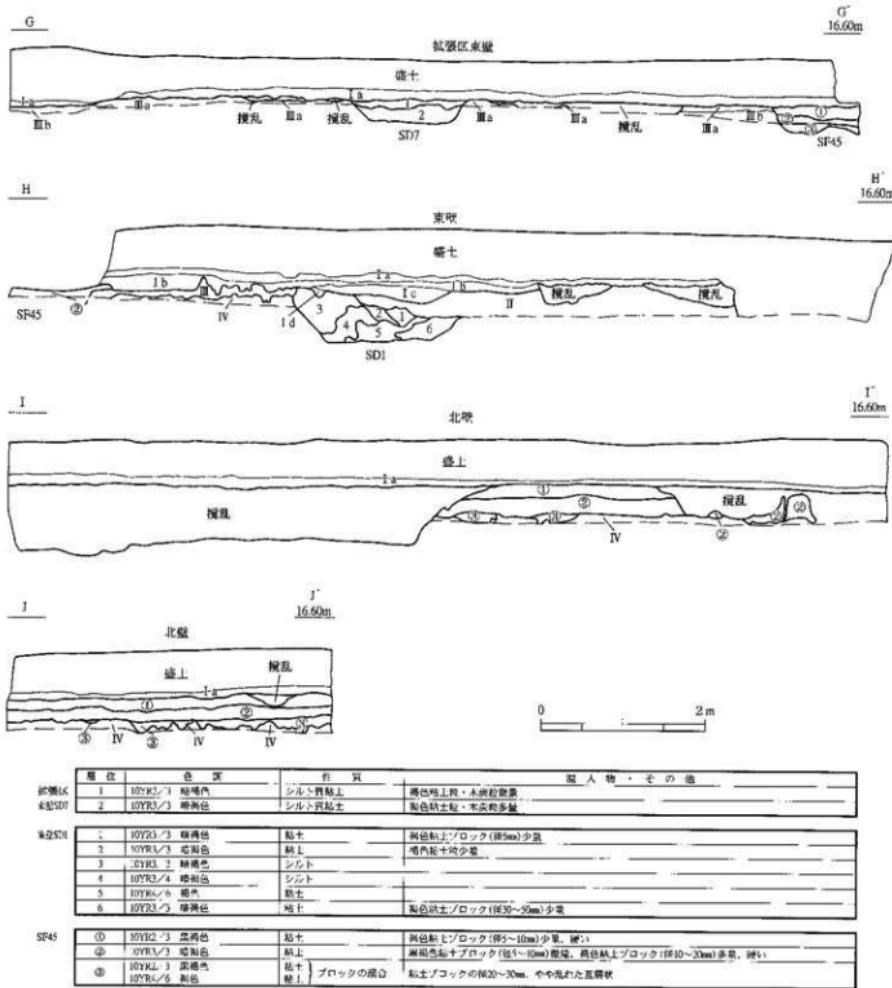
なお、溝状の掘り込み地業の北辺と南辺からそれぞれ約20cm離れた外側で、ピット2基(P1・P2)を確認して

いる。P1は掘り方が30×50cmの楕円形で直徑約15cmの柱痕跡を確認している。P2は直徑約30cmの掘り方で柱痕跡は確認できなかった。P1とP2の東西方向の間隔は約6m、南北方向の間隔は約3mである。掘込地盤の外側に位置する可能性が高いことから、寄柱ではなく、築地塀の工事に係わるピットと考えられる。

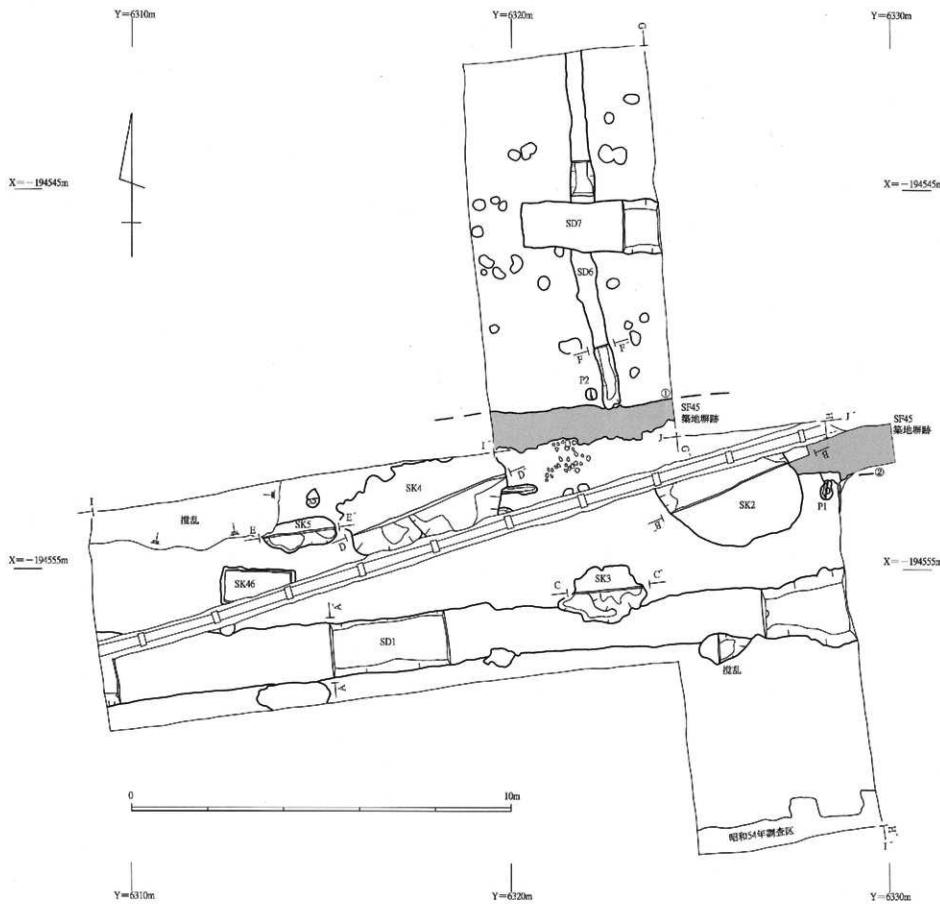
遺物は調査区東部の遺構確認面から瓦片が6点出土している。

SK2、SK4に切られている。SK5とは位置関係からは重複しているが、新旧関係は不明である。

SD1溝跡 調査区南壁際を東西方向に延びている。上幅1.2~2.0m、底面幅1.0~1.3m、深さ約45cmで、断面形は



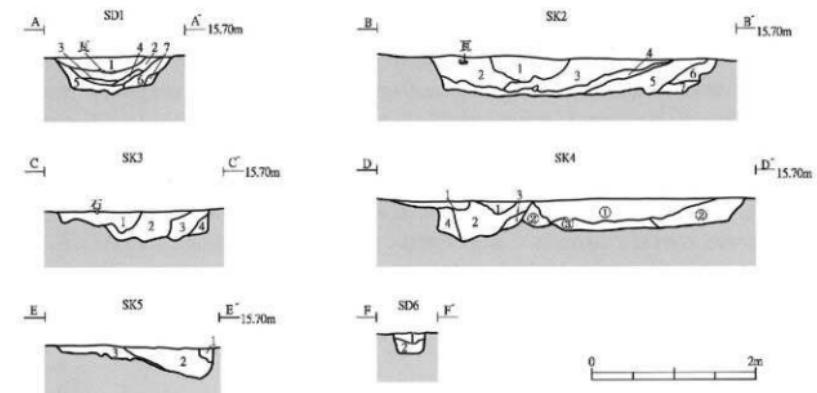
第32図 調査区断面図



第33図 1区全体図

逆台形に近い。底面はほぼ平坦である。方向は概ねE-4°-Nで、確認した長さは19.6mである。堆積土は粘土を主体とする自然堆積層である。なお、底面まで掘り下がったのは西壁際、西部の長さ3m部分、東壁際約2mの部分のみである。この溝跡は築地塀に併行して外側を巡る溝跡であり、溝跡の北側の肩と、築地塀の掘り込み地業跡の南側の推定線までの間隔は約2.2mである。遺物は上部器片・瓦片が150点出土した。G-53山形文軒平瓦など4点が図化できた（第35・36図）。

SK3土坑に切られている。



層位	色調	性質	組入物・その他	
			SD1	SK2
SD1	1 [0YR3/3] 黄褐色	シルト	褐色粘土粒多量、黒褐色粘土粒少量	
	2 [0YR3/3] 黄褐色	粘土	褐色粘土ブロック (径5mm) 少量	
	3 [0YR3/3] 黄褐色	粘土	褐色粘土ブロック (径5mm) 多量、褐色粘土粒多量	
	4 [0YR3/6] 塗褐色	粘土	褐色粘土粒多量	
	5 [0YR3/6] 塗褐色	粘土	褐色粘土粒少量	
	6 [0YR3/2] 深褐色	粘土	褐色粘土粒多量	
	7 [0YR3/6] 塗褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック (径10~20mm) 少量	
SK2	1 [0YR3/3] 塗褐色	粘土質シルト	暗褐色シルトブロック (径5mm) 少量	
	2 [0YR3/4] 塗褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック (径10~20mm) 多量	
	3 [0YR3/4] 塗褐色	粘土	暗褐色シルトブロック (径5mm) 少量	
	4 [0YR3/2] 塗褐色	粘土	黒褐色シルトブロック・暗褐色粘土ブロック (径5~10mm) 少量	
	5 [0YR3/4] 塗褐色	粘土 粘土	黒褐色シルトブロックの混合	
	6 [0YR3/4] 塗褐色	シルト質粘土	暗褐色シルトブロック少量	
	7 [0YR3/2] 黒褐色	粘土質シルト	暗褐色粘土ブロック (径10~20mm) 少量	
SK3	1 H0Y3/4 塗褐色	シルト質粘土	暗褐色粘土ブロック (径30mm) 多量	
	2 H0Y3/4 黄褐色	粘土	暗褐色粘土ブロック (径10~20mm) 少量	
	3 H0Y3/2 黒褐色	粘土	暗褐色シルトブロック (径10~20mm) 少量	
	4 H0Y3/6 塗褐色	粘土	暗褐色粘土粒少量	
SK4	① H0Y4/4 両色	粘土		
	② H0Y4/5 黄褐色	粘土		
	③ H0Y4/4 塗褐色	粘土 粘土	ブロックの混合	径20~50mm
	④ H0Y4/4 黄褐色	粘土		
	⑤ H0Y4/4 黄褐色	粘土		
	⑥ H0Y4/4 黄褐色	粘土		
	⑦ H0Y4/4 黄褐色	粘土		
	⑧ H0Y4/4 黄褐色	粘土		
	⑨ H0Y4/3 にじみ黄褐色	粘土 粘土	ブロックの混合	径10~20mm
SK5	1 10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	褐色シルトブロック少量	
	2 10YR3/4 黄褐色	シルト	褐色シルトブロック・暗褐色粘土質シルトブロック (径2~3mm) 多量	
	3 10YR3/3 黄褐色	粘土 シルト	ブロックの混合	
SD6	1 10YR3/3 黄褐色	シルト	褐色粘土粒多量	
	2 10YR3/3 黄褐色	シルト	暗褐色粘土ブロック (径10mm)・褐色粘土ブロック (径1~5mm) 多量	

第34図 SD1・6、SK2～5断面図

**SD 6 溝跡** 北拡張区で確認した溝跡で、SF45築地塀跡の北側に接しており、南北方向に延びている。上幅約40～60cm、底面幅約30～40cm、深さ約25cmで、断面形は「U」字形に近い。底面はほぼ平坦である。やや蛇行しているが、方向は概ねN-6°-Wで、確認した長さは9.4mである。堆積土にはブロック土が多量に含まれることから人為的に埋め戻されている可能性が高い。築地塀の割り込み地業に接し、方向が直交していることから、築地塀と同時期の造構である可能性がある。遺物は土師器片1点、瓦片16点が出土した。F-22（第35図2）は細片であるが齒車軒丸瓦と考えられる。

**SD 7 溝跡** に切られている。

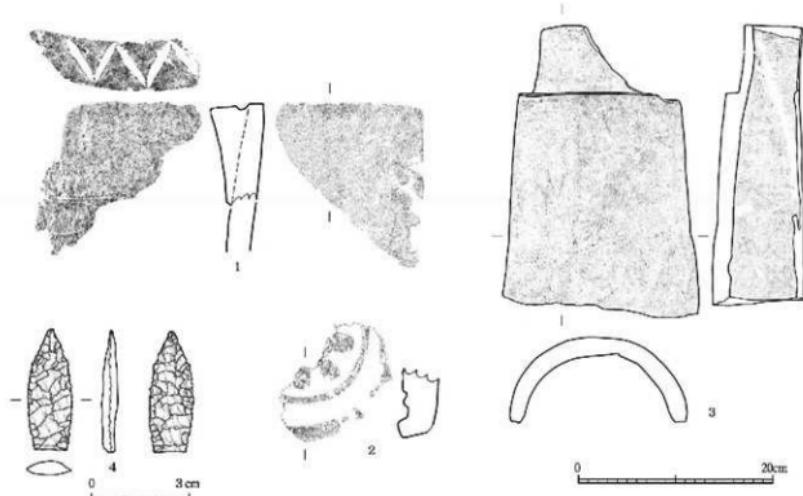
**SD 7 溝跡** 北拡張区で確認した溝跡で、東西方向に延びているが調査区西部で途切れている。上幅約140cm、底面幅約90cm、深さ約30cmで、断面形は逆台形に近い。底面は平坦である。方向は東西方向で、確認した長さは約3.5mである。堆積土は2層であるが、下層は人為的に埋め戻されている可能性が高い。遺物は土師器片、須恵器片、瓦片など約30点の他、煉瓦やガラス、磁器などが出土している。

**SD 6 溝跡を切っている。**

**SK 2 土坑** 調査区東部に位置し、東西約3.9m、南北約2.4mの楕円形である。深さは約50cmで、壁は比較的急に立ち上がる。底面は凹凸がある。堆積土は自然堆積層で、基本層IV層に類似した粘土層の下に暗褐色や黒褐色の層が入り込む特徴から倒木痕の可能性が高い。遺物は土師器片、須恵器片、瓦片、鉄製品などが9点出土した。

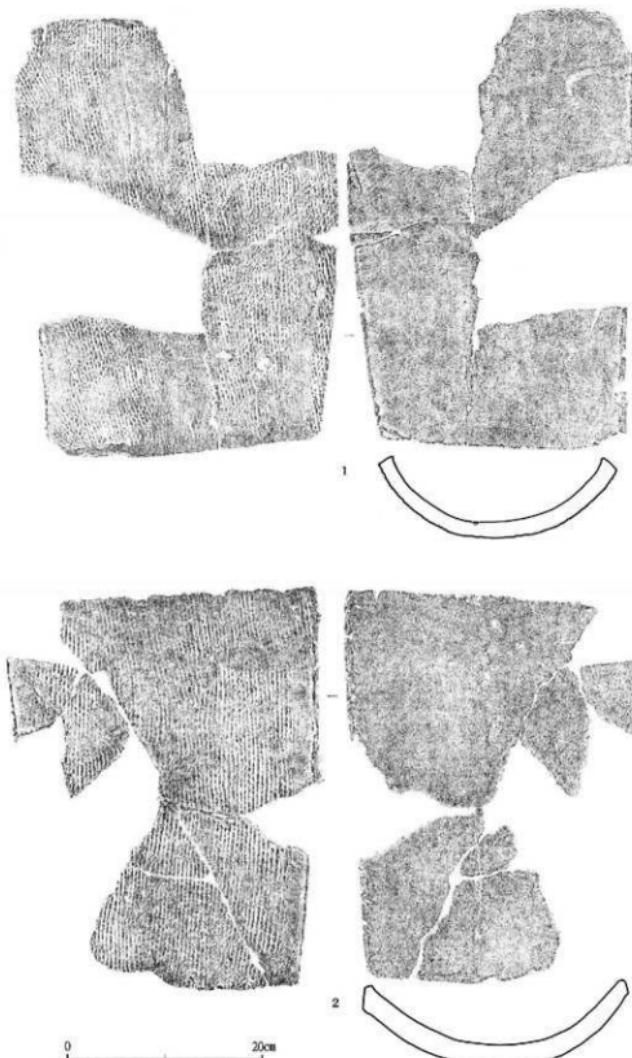
**SF45築地塀跡を切っている。**

**SK 3 土坑** 調査区南部に位置し、東西約2.4m、南北約1.5mの不整形である。深さは約40cmで、壁は比較的急に立ち上がる。底面は凹凸がある。堆積土は自然堆積層で、SK 2と同様に基本層IV層に類似した粘土層の下に暗褐色



No.	番号	地区・遺構・測位	種別・断面	諸寸法	特徴	色調	写真
1	G-53	IIK・SD 1・中壁	井平瓦	1/10	山形文、第部ナギ、凸面：すり面し、側面ヘラケズリ、凹面：山口型、側面ヘラケズリ、白粉なし	黒灰	16-3
2	F-32	IIK・SD 6	小片		山形文、四面丸真抜合板、白粉なし	黒灰	16-1
3	F-23	IIK・SD 1	丸瓦	3/4	内面：押印き(縦い斜線)2回、側面すり面し、側面ヘラケズリ、四面：布目紋、布合せ板、側面ヘラケズリ、凹面ヘラケズリ、厚30mm、白粉なし	灰	16-2
4	K-4	IIK・SK 4	ポイントタ	基部欠損	残存長17.5cm、幅13.5cm、厚5.5cm、重さ2.5g	—	16-6

第35図 SD 1・6、SK 4 出土遺物



第36図 SD 1 出土遺物

No.	登録No.	地区・遺構・部位	種別・形種	保存度	特 記	色調	写真 位置
1	G-52	1区・SD1・中層	平瓦	2/3	凸面：彫刻（やや刷り・複数）、縁目ややつぶれ。凹面：布目一部すり消し、布合せ織。 西面下段後、復縫幅4.0cm、長さ45.0cm、厚3mm、白角なし。	灰	16-4
2	G-51	1区・SD1・上層	平瓦	2/3	凸面：彫刻（やや刷り・複数）、縁目ややつぶれ。凹面：布目すり消し、布合せ織、縫縫・小口縫ヘラケタギリ。正縫幅27.5cm、長さ41.0cm、厚20~28mm、白角なし。	灰	16-5

や黒褐色の層が入り込む特徴から倒木痕の可能性が高い。遺物は瓦片が9点出土した。

SD1溝跡を切っている。

**SK4土坑** 調査区北西部に位置し、東西約1.5m、南北2.0m以上の不整形である。深さは約40~50cmで、壁は比較的急に立ち上がる。底面は凹凸がある。堆積土は自然堆積層で、SK2と同様に基本層IV層に類似した粘土層の下に暗褐色や黒褐色の層が入り込む特徴から倒木痕の可能性が高い。堆積土や平面形から判断すると2基の土坑が重複していると考えられる。遺物は瓦片や石器（第35図4）などが3点出土した。

SF45築地壙跡を切っている。

**SK5土坑** 調査区北西部に位置し、東西約1.9m、南北0.8mの精円形である。深さは東側が約40cmであるが、西側に向かって徐々に浅くなる。東壁は急に立ち上がる。堆積土にはブロック土が多量に含まれることから人為的に埋め戻されている可能性が高い。遺物は瓦片が5点出土した。

SF45築地壙跡と位置関係からは重複しているが、新旧関係は不明である。

**SK46土坑** 調査区西部に位置し、東西約2.0m、南北約1.0mの長方形を呈する。壁面近くに厚さ約1cmの木質部が認められることから木棺墓の可能性がある。精査は行なわなかったので詳細は不明である。

#### 4. まとめ

築地本体は遺存していなかったが、その掘り込み地業であるSF45の版築層を確認できた。残存するSF45の幅は約2.6mであるが、上部を削平されることから本来はこれよりも幅広だった可能性があり、昭和58年の調査結果（註4）を考慮すれば、本来は南北両側にそれぞれ20~30cm近く、3m前後の幅であった可能性がある。SD1溝跡はSF45の南側に並行し、共に伽藍地南辺を構成している。SF45との間隔は約2.2mであるが、前述したようにSF45の本来の幅を3m前後と仮定すれば、SF45とSD1との間隔は2m前後と考えられる（註5）。SF45とSD1の方向は調査区内においては概ねE~E'~N~N'であるが、今後は南大門の東側も含む広い範囲で計測を重ね、精密な位置関係や方向を確定していく必要がある。

（註1）SK4の東側で暗渠北側の部分には掘り込み地業の痕跡が確認され、調査区の断面でも確認できるのでこの付近には版築層が残存していた可能性がある。

（註2）昭和58年に南大門跡の東側で行われた環境整備予備調査では、幅約3.1m、深さ35~10cmの掘り込み地業が確認されている。仙台市教育委員会「1984『陸奥国分寺跡 昭和58年度環境整備予備調査概報 南大門跡地東脇築地跡』仙台市文化財調査報告書第63集」

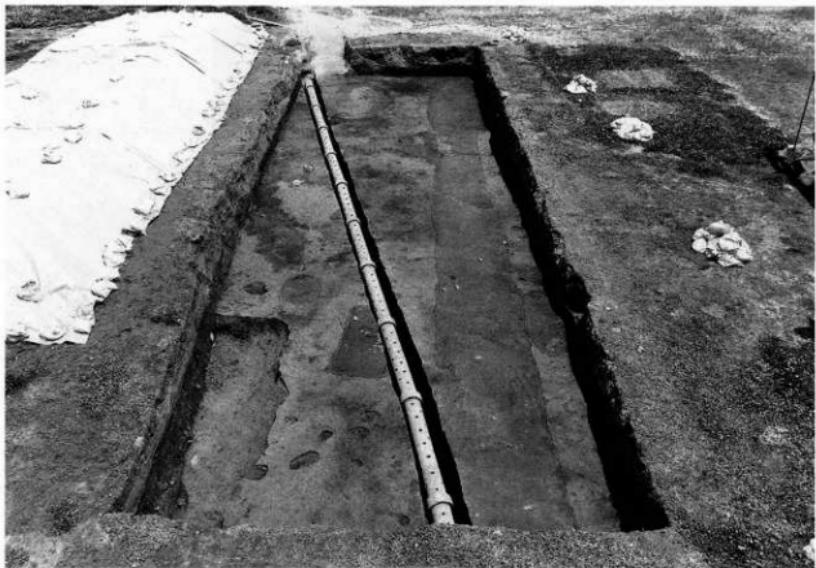
（註3）郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会及び現地指導においては、突き棒の痕跡の可能性があるとの指摘を受けている。その他としては溝状に掘り込んだ際の工具痕などの可能性も考えられる。

（註4）註2と同じ。

（註5）昭和58年に南大門跡の東側で行われた調査では、築地壙の掘り込み地業と南側の溝跡との間隔は約1.9~2.2mである。

遺構・部位	土質窓		頭虫跡		赤地土器		石	陶器	鉄器	石製品	骨製品	その他
	数値	重量(g)	数値	重量(g)	数値	重量(g)						
SF45	21	49	—	—	—	—	6	370	—	—	—	—
SD1	—	—	—	—	—	—	129	19,125	—	—	—	—
SK2	2	2	1	—	45	—	—	—	—	—	—	—
SK3	—	—	—	—	—	—	5	370	—	—	—	1
SK4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SK5	—	—	—	—	—	—	9	500	—	—	—	—
SD6	—	—	—	—	—	—	2	560	—	—	—	—
SD7	5	—	3	—	1	—	5	410	—	—	—	—
I-II層・周辺	47	82	3	36	29	62	273	19,682	6	2	2	2
計	76	138	5	82	29	62	466	43,897	6	3	2	4
近世瓦6、鉄洋1 近世瓦6、鉄洋1												

表7 1区遺物集計表



1. 遺構確認状況（西から）

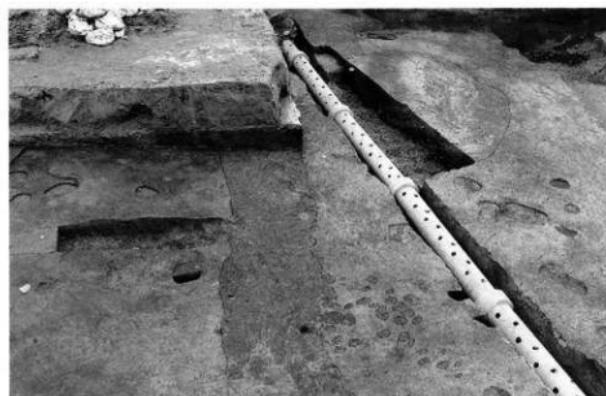


2. 全景（西から）

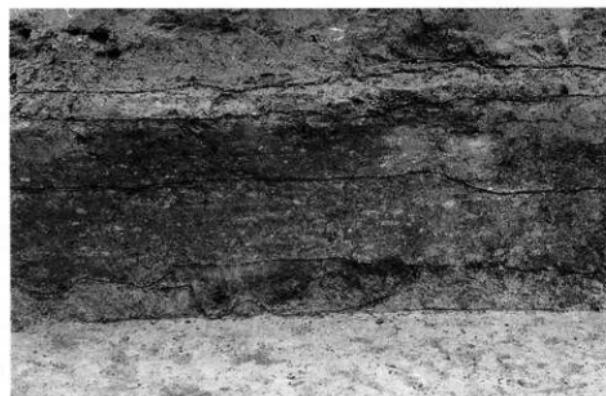
写真図版12 1区全景



1. 調査区東部（西から）



2. 調査区中央部（西から）



3. 挖り込み地業断面（北壁）

写真図版13 SF45築地堀跡（1）



1. 堀り込み地業断面  
(拡張区東壁)



2. 堀り込み地業断面  
(北壁・拡大)



3. 堀り込み地業断面  
(北壁・拡大)



1. SD1（東から・部分）

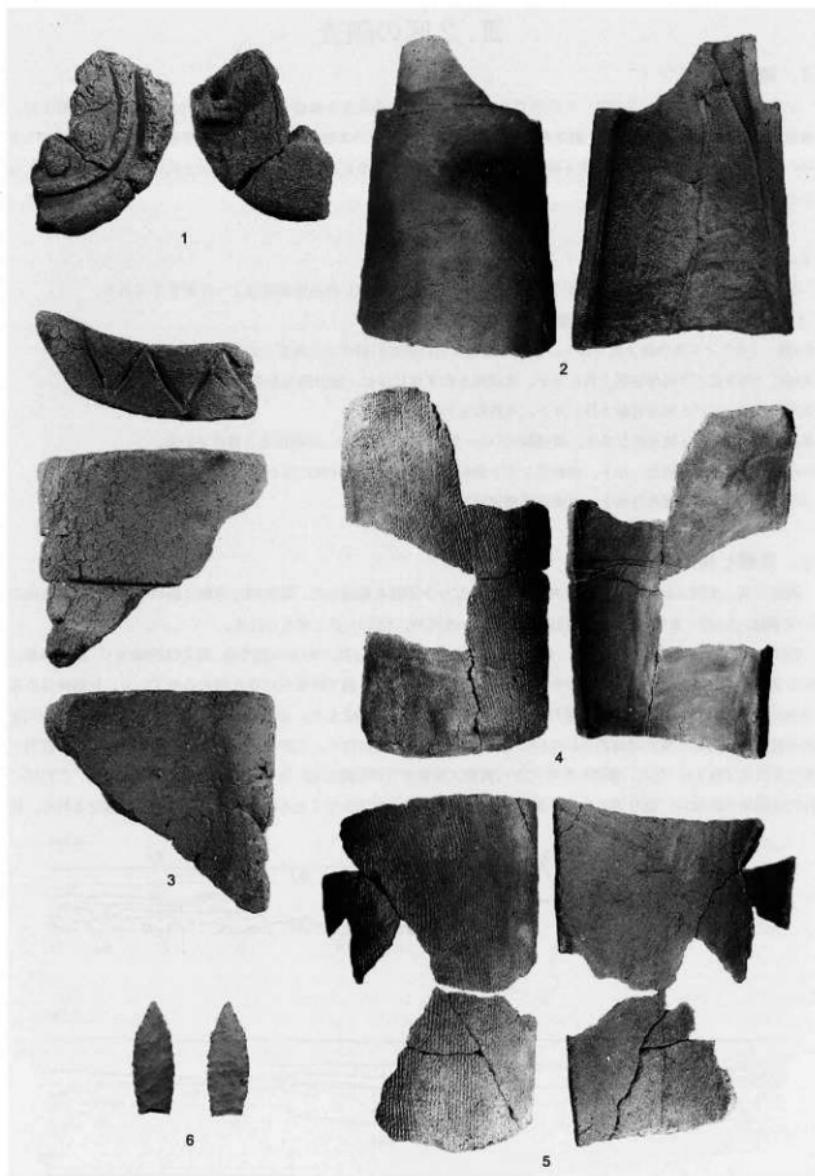


2. SD1断面（東から）



3. P1断面（西から）

写真図版15 SD1溝跡、P1



写真図版16 SD1・6、SK4出土遺物

### III. 2区の調査

#### 1. 調査の概要

2区は学校のグラウンドであった場所である。伽藍地の北の状況を確認するため、傍路北側の伽藍中軸線上に、東西6m×南北20mに設定した。調査の結果、南北方向の溝跡と一本柱列跡、それと直交する東西方向に併行する2列の一本柱列跡と想定される遺構を確認した。また、土取り穴と推定される規模の大きな土坑には土師器、須恵器、瓦などが大量に発見されていた。

#### 2. 基本層序

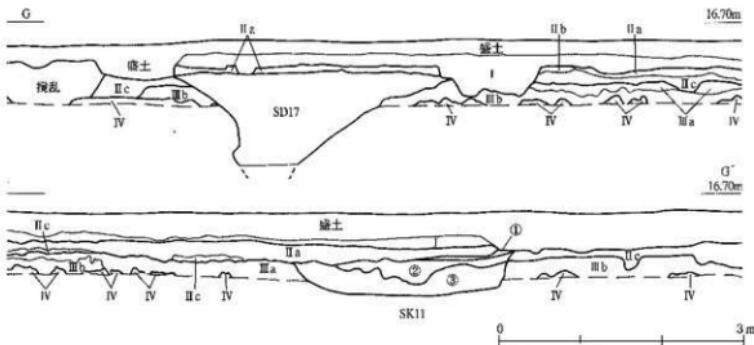
敷地全体に約20cmの厚さで盛土がされている。盛上層下で確認した基本層序はI～IV層までである。

- I層 校庭に敷かれた砂とその基盤層。基盤層は極めて固い。
- IIa層 5Y2/1 黒色粘土質シルト。校庭を造成する以前の旧耕作土と推定される。
- IIb層 10YR 3/3 暗褐色粘土質シルト。木炭粒をわずかに含む。部分的な分布である。
- IIc層 10YR 2/3 黒褐色粘土質シルト。木炭粒をわずかに含む。
- IIIa層 10YR 2/2 黒褐色シルト。IIIb層のブロックを斑文状に含む。旧耕作土と推定される。
- IIIb層 10YR 2/1 黒色シルト。暗褐色シルト質粘土ブロックを斑文状に含む。
- IV層 10YR 3/4 暗褐色粘土。上面が遺構確認面である。

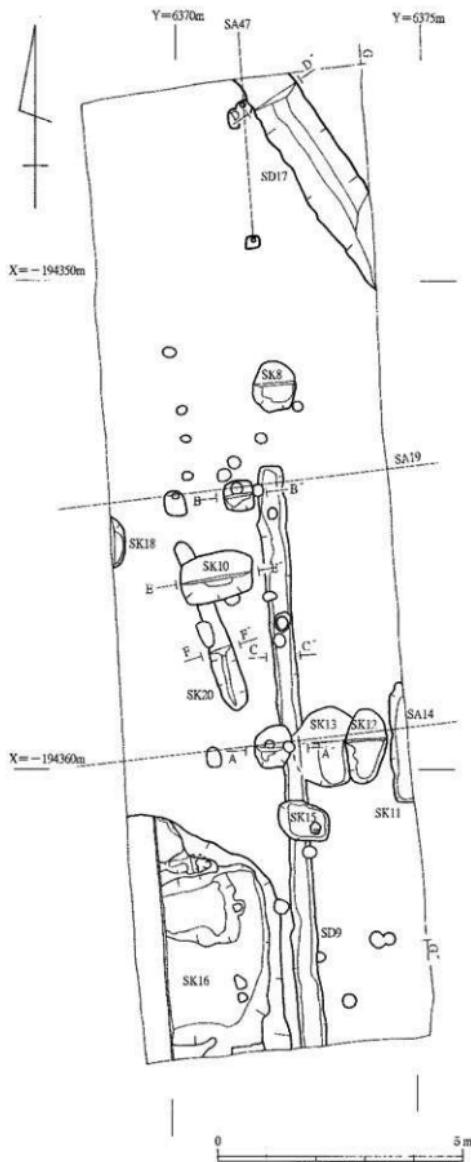
#### 3. 遺構と遺物

溝跡2条、土坑9基、一本柱列3列、その他のピット23基を確認した。陸奥国分寺跡に係わる遺構は南北方向のSD9溝跡、SA47一本柱列、東西方向のSA14・19一本柱列、SK10・16と考えられる。

SA14一本柱列 調査区南部でピットを1基確認した。掘り方は75×90cmの楕円形、深さは約55cmで、壁は西側が急に立ち上がるが、東側はやや緩やかである。掘り方埋め土は3層で版築状に突き固められている。柱跡跡は直径18cmの円形である。柱間で約5.3m離れた北側に同様の柱穴(SA19とした)が1基認められたが、この2基の柱穴を結ぶ延長線上に他の柱穴は認められないことから、南北方向ではなく、これと直交する東西方向に展開する柱列と推定される(註1)。なお、確認した柱穴から調査区西壁までの距離は約2.7m、東壁までは約2.4mあるが、この間に柱穴は認められない。掘り方の大きさを考慮すると、柱間寸法は少なくとも3.5m前後かそれ以上と推定される。柱



第37図 調査区東壁断面図



第38図 2区全体図

間寸法からは建物跡を構成する柱穴である可能性はあるが、柱間寸法が3.5m以上の上層を支えるには径18cmの柱ではやや細いと考えられることと、掘り方の規模から一本柱列の可能性が高いと考えた(註2)。遺物は土師器、瓦が6点出土した。

SD 9 を切り、ピットに切られている。

**SA19—一本柱列 調査区のほぼ中央でピットを1基確認した。掘り方は一辺約60cmの隅円方形、深さは約70cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。掘り方埋め土は5層で、褐色粘土ブロックを含む黒褐色粘土で版築状に突き固められている。柱痕跡は直径23cmの円形である。SA14と同様の理由から、東西方向に延びる一本柱列と推定した。遺物は出土しなかった。**

**SA47—一本柱列 調査区北部でピットを2基確認した。掘り方が一辺25~30cmの隅円方形で、直径約10cmの柱痕跡を確認した。柱間寸法は2.75mで、方向はN-4°-Wである。掘立柱建物跡の一部である可能性もあるが、一本柱列と推定した。後述するSD 9 の延長線上にあり、SD 9 の北端からは約4.5m離れているが、SK 8 の場所にもさらに柱穴があった可能性がある。その場合はSD 9との間隔はさらに狭くなる。遺物は出土しなかった。**

北側のN 1はSD17に切られている。

**SD 9溝跡** 調査区中央から南に延びる溝跡である。上幅45~55cm、底面幅20~35cm、深さ約15cmである。断面形は逆台形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。方向はN-4°-Wで、確認した長さは約12mである。堆積土は1層である。遺物は土師器、須恵器、瓦、石礫など約40点が出土した。

SA14、SK13・15に切られている。

**SD17溝跡** 調査区北東部に位置する溝跡である。上幅1.0~1.1m、底面幅20~30cm、

深さ65~70cmである。断面形は下部が「U」字形であるが上部は大きく開く。壁は下部が垂直に近く、上部が緩やかである。底面はほぼ平坦であるが東南方向への緩やかな傾斜がある。方向はN-32°Wで、確認した長さは約8.5mである。堆積土は3層である。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦、陶器、磁器、鉄製品など約150点が出土した。SA47を切っている。

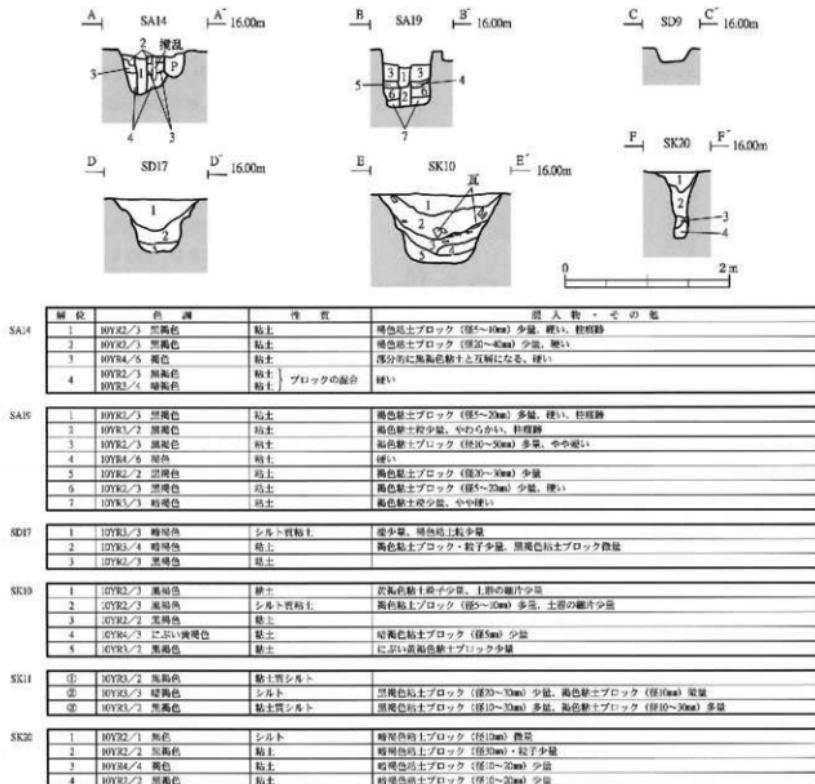
**SK8土坑** 調査区北部に位置する。東西85cm、南北100cmの楕円形である。深さは約50cmで、壁は垂直に近く立ち上がる。底面は凹凸がある。堆積土は2層である。遺物は土師器、瓦が2点出土したのみである。

**SK10土坑** 調査区ほぼ中央部に位置する。東西約1.5m、南北約1mの圓内長方形である。深さは約80cmで、壁は下部が垂直に近く立ち上がり、上部はやや緩やかである。底面は平坦である。堆積土は自然堆積層である。遺物は土師器、須恵器、瓦、鐵滓などが約70点出土したが、瓦が多い。

SK20を切っている。

**SK11~13・15土坑** これらは調査区南東部に位置する。すべて浅く、堆積土は1~2層である。遺物は少ない。SK13はSD9を切り、SK12に切られている。SK15はSD9を切っている。

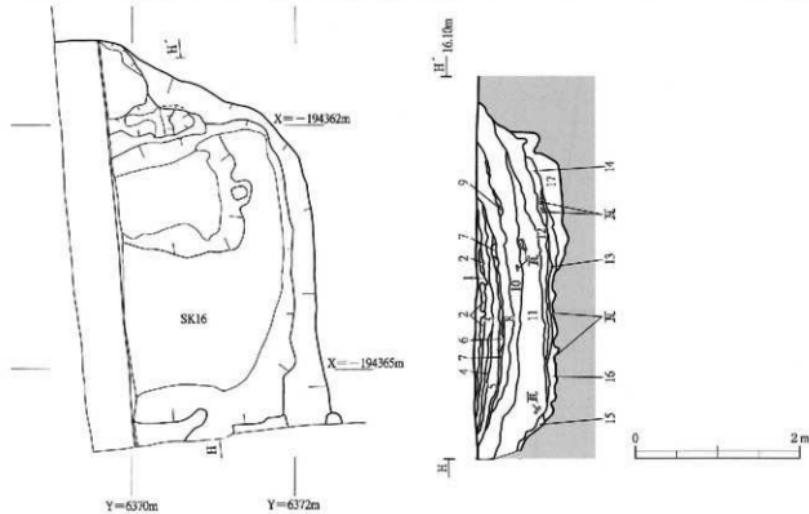
**SK16土坑** 調査区南西部に位置する。東西3.0m以上、南北5.0m以上であるが西部と南部が調査区外となっている。平面形は明確ではないが、底面は方形となっている。深さは約1.15mである。断面形は逆台形であるが、壁は下部



第39図 SA14・19、SD9・17、SK10・20断面図

が垂直に近く立ち上がり、上部はやや緩やかである。北壁には段が2箇所認められ、その部分が北側へ張り出す形となっている。底面はやや凹凸があり、北側には深さ約15cmの窪みがある。土坑の底面は、ちょうど基本層IV層の下にある礫層の上面と一致している。堆積土は自然堆積層で、上部には灰白色火山灰層がある。

遺物は土器、須恵器、赤焼土器が約4000点と灰釉陶器1点、瓦約4000点、その他石製品、鉄製品、鉄滓、羽口、漆紙（註3）などが約30点出土した。第41図に出土状況を示したように分布に偏りは認められなかった。遺物は各層が堆積する過程において随時廃棄されていたものと推定される。第42～46図に出土遺物を示した。土器D-1・3・5～8杯（第42図1～6）は体部が直線的に開き、底径がやや小さく（註4）、内面のヘラミガキは放射状のものは少ない。底部は回転糸切無調整のものと回転糸切後手持ちヘラケズリ調整が施されるものが混在している。須恵器E-1・2・23片（第42図8～10）は底部が回転糸切無調整である。灰釉陶器Ic-1碗（第42図7）は厚手で、体部は直線的に近く、口縁部はやや外反する。高台は角高台である。胎土の特徴から猿投窯産で、黒窯14号窯式-2型式と考えられる。鉄製品（第42図13～20）の大部分は釘であるが、Na-8は銅帶金具と推定される。土製品P-1は輪の羽口である。軒丸瓦はF-10・11重弁蓮華文、F-1宝相花文、軒平瓦はG-9・10扁行唐草文、G-5均整唐草文、G-17連珠文などがある。平瓦の大部分は縦位の繩叩きであるが、繩目をすり消したG-6・11や、横位



層位	色・調	性質	出土物・その他の様
1	IICYR3-4 緋褐色	シルト	木炭数・土器の種類少量。灰口小ブロック（径5mm）無量
2	灰白火山灰		1層が灰化灰状に入り込む
3	IICYR3-2 黒褐色	シルト	木炭数・灰白小ブロック（径5～30mm）少量
4	IICYR3-3 緋褐色	シルト質粘土	褐色出土ブロック（径3～10mm）多量
5	IICYR3-3 緋褐色	シルト質粘土	褐色色土ブロック（径3～5mm）・木炭数少量
6	HWR2-2 黑褐色	粘土	褐色砂土・鉄器量
7	HWR2-3 緋褐色	シルト質粘土	褐色砂土ブロック（径10mm）多量
8	HWR2-2 黑褐色	シルト質粘土	褐色色土シルトブロック（径5mm）・木炭数少量
9	HWR2-2 黑褐色	粘土	上部中層化した焼化土となる
10	HWR2-2 黑褐色	シルト質粘土	木炭数微量
11	HWR2-2 黑褐色	粘土	木炭数多量、燒土英微量、部分的に周下部に灰斑（灰漬灰）をはさむ
12	HWR2-2 黑褐色	粘土	褐色砂土鉄器量、銀器に褐色砂土シルトブロックの網目ブロックあり
13	HWR2-4 黑褐色	泥の層	
14	HWR2-5 黑褐色	砂質シルト	瓦類
15	HWR2-3 緋褐色	粘土	褐色砂質シルトブロック（径5～30mm）多量
16	HWR2-2 黑褐色	粘土	黑色粘土ブロック（径5mm）に褐色色土粘土ブロック少量
17	HWR2-2 黑褐色	粘土	褐色色土粘土ブロック（径30mm）少量、褐色色土質シルトブロック微量

第40図 SK16平面・断面図

の縄叩きのG-15、平行叩きのG-13、斜格子叩きのG-7などもある。押印瓦はG-14、道具瓦はII 1~3がある。

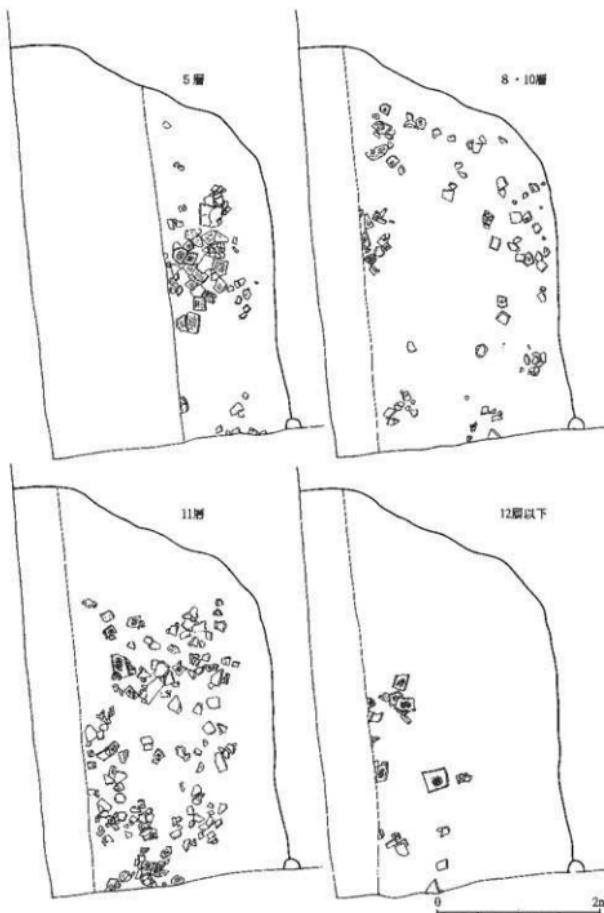
SK18土坑 調査区西壁際に位置するが西側は調査区外となっている。南北約1m、深さは約15cmで、壁は緩やかである。底面は平坦である。堆積土は2層である。遺物は上師器、須恵器、瓦が6点出土した。

SK20土坑 調査区西部に位置する。東西0.35~0.5m、南北約3.6mの葉巻形である。深さは約80cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は4層で、自然堆積層である。遺物は出土しなかった。形状から縄文時代の落し穴と推定される（註5）。遺物は出土しなかった。

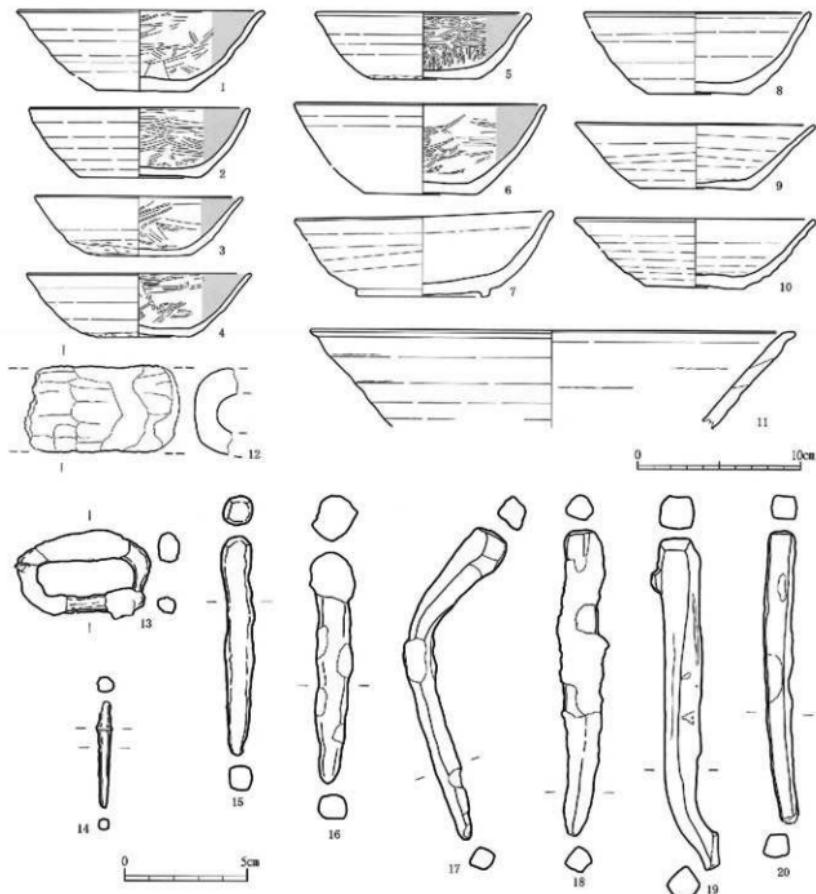
SK10に切られれている。

#### 4.まとめ

東西方向の一本柱列と推定したSA14・SA19は柱痕跡が直径18~23cmと比較的大く、掘り方は硬く突き固められて入念に作られている。掘立柱建物跡の可能性もあるので調査区外の東西方向への延びを確認しないと断定はできないが、これらは寺地内部を南北に区画する遮蔽施設の可能性を考えられる。南北方向のSA47一本柱列の柱穴は、SA14・19よりも規模が小さく簡単な構造であることから、SA47は補助的な区画施設であったと考えられる。なお、SA47とSD9は概ね伽藍中軸線上に位置するように見えるが、現在のところ正確な伽藍中軸線の位置と方向が確定できていないので、断定は差し控えておきたい。なお、SD9消跡とSA47は同じ延長線上にあることから同時期に存在した可能性があるが、SD9はSA14・19に切割されているので、これらの遺構は、SD9・SA47→SA14・19へと変遷した可能性



第41図 SK16遺物出土状況図



No.	遺跡No.	地区・遺構・層位	種別・形態	保存度	法長(cm)			断面・特徴	写真 図版
					口径	底径	高さ		
1	D-1	2R5・SK16・3~6層	土師器・鉢	L/2	15.3	5.5	5.0	クロコ目跡、底端細部角切り。内面ヘラミガギ・黑色処理。单一の付着物。内径少部・底盤/口径3.7	18-1
2	D-3	2R5・SK16・6層	土師器・鉢	確認未完	13.4	7.2	4.3	クロコ目跡、底端細部角切り。内面ヘラミガギ・黑色処理。白糞斑。底盤/口径6.0	18-2
3	D-5	2R5・SK16・11層	土師器・鉢	3/4	12.6	6.1	3.7	クロコ目跡、底端細部角切り。内面ヘラミガギ・黑色処理。白糞斑。底盤/口径4.0	18-3
4	D-6	2R5・SK16・11層	土師器・鉢	4/5	13.8	5.6	3.9	クロコ目跡、底端細部角切り。内面ヘラミガギ・黑色処理。白糞斑。底盤/口径4.1	18-4
5	D-8	2R5・SK16・11層	土師器・鉢	確認未完	13.2	5.8	4.2	クロコ目跡、底端細部角切り。底部外側・底盤下端手掛けアズリ。内面ヘラミガギ・黑色処理。白糞斑。底盤/口径6.0	18-5
6	D-7	2R5・SK16・11層	土師器・鉢	3/4	15.3	6.5~6.5	5.5	クロコ目跡、底端細部角切り。内面ヘラミガギ・黑色処理。白糞斑。底盤/口径6.4~6.6	18-6
7	16-1	2R5・SK16・6層	脚器・灰陶塊	1/2	15.0	6.2	5.3	クロコ目跡、底端細部角切り。底盤外側・底盤下端手掛けアズリ	18-11
8	E-23	2R5・SK16・3~6層	灰陶器・鉢	2/3	13.7	6.0~6.5	5.0	クロコ目跡、底端細部角切り。白糞少部。底盤/口径0.44~0.46	18-8
9	B-1	2R5・SK16・10~12層	脚器・灰陶器・鉢	2/3	14.5	6.8	4.0	クロコ目跡。底端細部角切り。白糞なし。底盤/口径0.47	18-9
10	E-2	2R5・SK16・11~15層	脚器・灰陶器・鉢	3/4	14.4	6.0	4.2	クロコ目跡、底端細部角切り。内面なし。底盤/口径0.42	18-10
11	D-4	2R5・SK16・5層	土師器・鉢	1/8	(29.0)	不規	不規	クロコ目跡。輪状孔。白糞なし	18-7
No.	遺跡No.	地区・遺構・層位	種別・形態	保存度	法長(cm)			特徴	写真 図版
					直径	軸	厚さ		
12	P-1	2R5・SK16・12~13層	土師器・鉢口	小片	不規	5.5	—	—	18-11
13	Na-8	2R5・SK16	鉢足・鋸歯	確認未完	5.4	3.3	1.0	16g	18-13
14	Na-2	2R5・SK16	鉢足・鋸歯	量・品目のみ	0.65	0.60	2g	18-14	
15	Na-6	2R5・SK16	鉢足・鋸歯	確認未完	1.2	1.2	2.0	27g	18-5
16	Na-5	2R5・SK16	鉢足・鋸歯	調落欠損	1.25	1.50	3.0	35g	18-6
17	Na-3	2R5・SK16	新瓦器・鉢	確認未完	12.5	1.2	1.2	周曲、50g	18-17
18	Na-7	2R5・SK16	新瓦器・鉢	確認未完	12.6	1.0	1.5	50g	18-18
19	No-1	2R5・SK16	新瓦器・鉢	確認未完	13.6	1.8	1.6	20g	18-9
20	No-4	2R5・SK16	新瓦器・鉢	確認未完	1.9	1.1	1.2	13g	18-20

第42図 SK16出土遺物 (1)



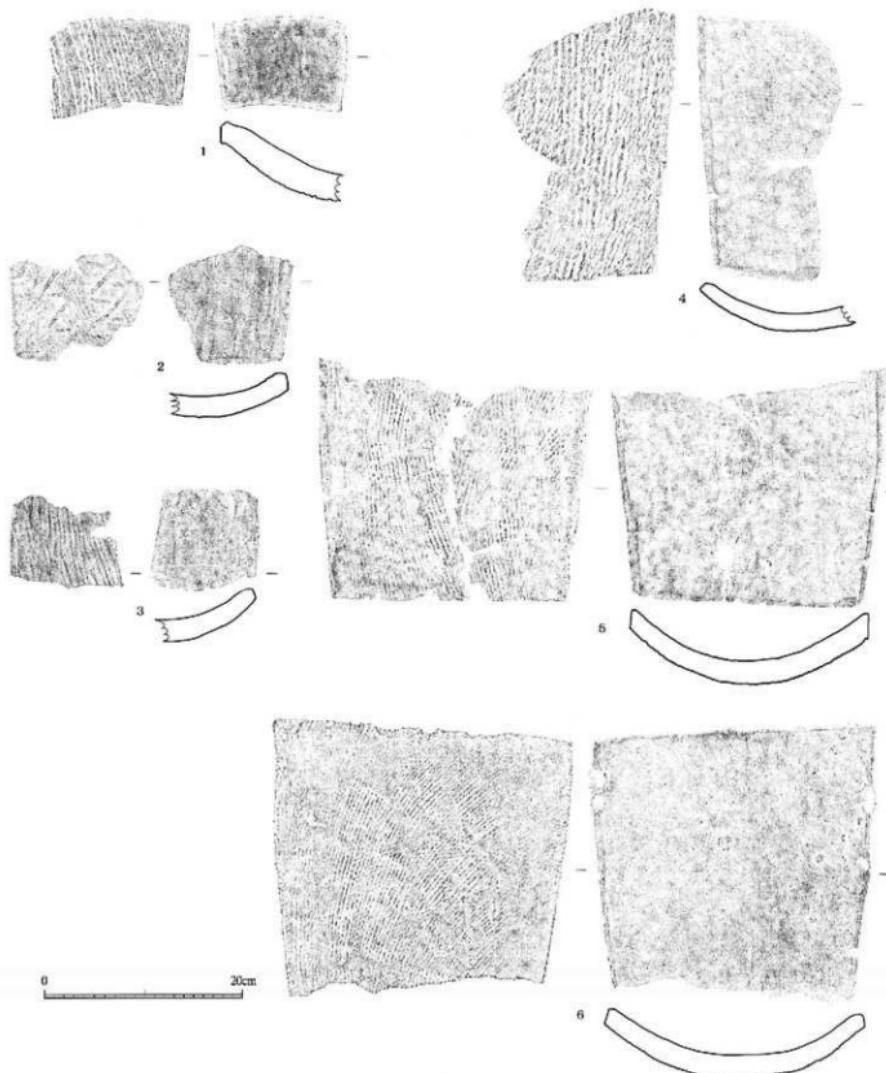
No.	遺物No.	地区・遺構・部位	種別・器種	保存状	特徴	色調	写真 図版
1	F-10	20K・SK16-11層	研丸瓦	小片	八葉金井連縫文、白粉なし	灰	19-1
2	F-11	20K・SK16-11層	研丸瓦	小片	八葉金井連縫文(国分寺跡3物)、繩面丸五縫合様、白粉なし	灰	19-2
3	F-1	20K・SK16-3-8層	研丸瓦	小片	空相花文、直筒面に凸の木目、裏面ナガ、丸瓦連合姿、白粉なし	灰白	19-2
4	F-5	20K・SK16-11層	丸瓦	小片	凸面・ナギ、ヘラ彫き、凹面・凸目彫、厚20mm、白粉なし	灰黒	19-4
5	F-4	20K・SK16-11層	丸瓦	小片	凸面・端平き(無い範囲)、網目入り削し、裏印「六」、凹面・すり削し、厚23mm、白粉なし	灰黒	19-5
6	F-12	20K・SK16-12層	丸瓦	1/2	凸面・クロナギ、凹面・江戸彫、表面ナセ彫、瓶いナギ(横2), 横14mm、白粉なし	灰白	19-6
7	F-7	20K・SK16-11層	丸瓦	1/3	凸面・クロナギ、網目へラケズリ、凹面・表面、表面ナセ彫、網目へラケズリ、厚25mm、白粉なし	灰白	19-7
8	F-8	20K・SK16-11層	丸瓦	4/5	凸面・網目彫(無い・複数)、ロクロナギ、凹面・ヘラケズリ、凹面・表面、表面ナセ彫、網目へラケズリ、厚20mm、白粉なし	灰	19-8

第43図 SK16出土遺物（2）



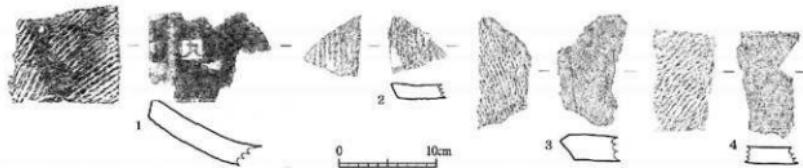
No.	標記No.	地区・遺構・層位	種別・器種	造存度	特 質	色調	写真 複数
1	G-9	2区・SK16・11層	軒平瓦	小片	軒面横平瓦、腹部少子、凹面：布目一側すり消し、白粉なし	灰	10-10
2	G-10	2区・SK16・11層	軒平瓦	小片	軒面横平瓦、凸面：銅材すり消し、凹面：布目底、側面ヘラケズリ、白粉なし	褐灰	20-1
3	G-5	2区・SK16・11層	軒平瓦	小片	軒面横平瓦、銅部剥離形、凸面：銅叩き(無い・痕なし)、凹面：布目底、凸物台付底、白粉なし	褐灰	19-9
4	G-17	2区・SK16・12～13層	軒平瓦	小片	先末文、成形焼き(やや崩れ・變形)、横目やかつぶれ、波瀬文、凹面：布目底、白粉なし	褐灰	19-11
5	G-6	2区・SK16・5層	平瓦	1/4	凸面：横叩き(やや崩れ・變形)、斜面すり消し、側面・小口面ヘラケズリ、凹面：布目底、小口面ヘラタリアリ、厚23mm、白粉なし	灰	20-8
6	G-11	2区・SK16・11層	平瓦	1/9	凸面：横叩き(やや崩れ・変形)、斜面すり消し、凹面：布目底、厚14mm、白粉なし	黄灰	20-6
7	G-1	2区・SK16・5層	平瓦	1/4	凸面：横叩き(やや崩れ・変形)、殘目ややつぶれ、凹面：布目底、斜面ヘラケズリ、厚20mm、白粉なし	灰	22-3
8	G-15	2区・SK16・11～12層	平瓦	1/6	凸面：横叩き(無い・板前・剥離)、凹面：布目底、急切刃底、無縫、小口面ヘラケズリ、厚23mm、白粉なし	黄灰	20-4

第44図 SK16出土遺物（3）



No.	登錄No.	地区・遺構・層位	形別・断面	測定値	特 訴	色調	写真 回数
1	G-12	26S・SK16・11層	平瓦	L/8	凸面：開口部（やや細い・縦條）、側面ややつぶれ、凹面の状態、正面：春目すり剥し、板張もじ、側面へフアツリ、厚約2~3mm、白粉なし	青灰	21-4
2	G-7	26S・SK16・5~16層	平瓦	L/10	凸面：開口部（やや細い・縦條）→側面字形1号、小口面へラケズリ、背面：春目板、凸面有川筋、側面・小口面へラケズリ、厚3mm、白粉なし	青灰	20-3
3	G-13	26S・SK16・11層	平瓦	L/10	凸面：平瓦字形（やや細い・縦條）、側面：春目すり剥し、側面へラケズリ、厚約2~3mm、白粉なし	灰黄	20-2
4	G-2	26S・SK16・5層	平瓦	L/3	凸面：開口部（やや細い・縦條）、側面：春目ややつぶし、正面：布目板、落砂り痕、側面・小口面へラケズリ、厚約2mm、白粉なし	灰黄	21-2
5	G-3	26S・SK16・5層	平瓦	L/2	凸面：開口部（やや細い・縦條）、側面：春目ややつぶし、凹面有川筋、側面：布目一削すり剥し、側面・小口面へラケズリ、厚約2.7mm、厚3~2mm、白粉なし	灰赤	21-1
6	G-16	26S・SK16・底面	平瓦	2/3	凸面：開口部（やや細い・縦條）、正面：布目すり剥し、側面・小口面へラケズリ、底盤缺	灰	20-3

第45図 SK16出土遺物（4）



No.	遺物No.	地区・層系・解説	種別・器種	遺存度	特徴	色調	写真番号
1	G-14	2F・SK16・11層	平瓦	1/12	凸面：彫印（やや細い・斜め）、縁目つぶれ、凹面：布目（丸）、厚さ～28mm、白粉なし	黄灰	29-7
2	H-1	2F・SK16・8～10層	須作瓦・彫印（丸）	小片	凸面：彫印（やや細い・斜め）、布目（丸）、厚さ19mm、白粉なし	29-5	
3	H-2	2F・SK16・11層	須作瓦・彫印（丸）	小片	凸面：彫印（やや細い・斜め）、布目（丸）、一筋さざれし、斜面：ウラケズリ、厚さ25mm、白粉なし	29-6	
4	H-3	2F・SK16・11層	須作瓦・彫印（丸）	小片	凸面：彫印（やや細い・斜め）、縁目つぶれ、一部布目模、凹面：布目（丸）、厚さ17mm、白粉なし	29-7	

第46図 SK16出土遺物（5）

がある。

SK16は土取り穴と考えられた。土師器・須恵器の特徴は多賀城跡第60次調査SE2101BⅢ層出土遺物（註6）よりもやや新しく、多賀城跡SK2272出土土器（註7）に近い。多賀城跡SE2101BⅢ層出土土器の年代は概ね9世紀第2四半期頃、SK2272出土土器は概ね9世紀第3四半期頃と推定されているので、土師器・須恵器の様相は概ね9世紀第3四半期頃を示している。なお、下層からはG-17連珠文軒平瓦が出土している。連珠文軒平瓦は貞觀11（869）年の陸奥国大地震後の修復に用いられた瓦と考えられているので、土師器・須恵器の年代観と一致する。一方、灰釉陶器の年代は、黒笠14号窯式-2型式が820～840年頃とされている（註8）、土器類や瓦と比べると若干古いか、廃棄された遺物にある程度の時期差があることは十分考えられる。したがってSK16が埋没したのは概ね9世紀第3四半期頃と推定されるが、土取り穴として掘削された年代については限定することはできなかった。なお、少量であるが輪の羽口や鉄滓、漆紙などが出土していることは、寺地内部における鍛冶や漆工関連遺構の存在を示唆するものと考えられる。

（註1）第38図のSA14とSA19の推定線は暫定的なものである。

（註2）陸奥国分尼寺跡では、尼坊を構成する2棟の掘立柱建物跡が確認され、南側のSB1建物跡が大坊、北側のSB1建物跡が小字坊と想定されている。SB1は梁行2間（6.6m）、桁行15間（44.8m）であるので柱間寸法は約3.0～3.3m程度であるが、柱の直径は35cm前後であり、掘り方も短軸で1m以上、長軸で最大2.4mのものもある。

（註3）写真図版18-12、赤外線レビカメラで観察したが、表面に文字は確認できなかった。

（註4）圓化できた6点の底径／口径は0.37～0.54で、平均0.46である。

（註5）縄文時代の遺構・遺物としては、同じ2区のSD9と1区SK4から石鏃やポイントが出土している他、3区のSK36も平面形から落し穴の可能性が考えられる。

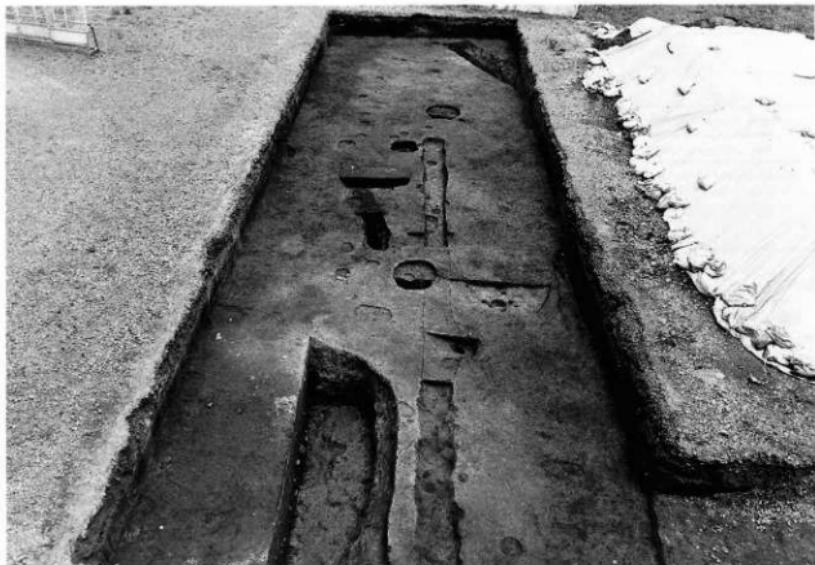
（註6）宮城県多賀城跡調査研究所 1991「第60次調査」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1991

（註7）宮城県多賀城跡調査研究所 1994「現状変更に伴う調査」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1994

（註8）齊藤孝正 2000「猿投窓出土の灰釉・綠釉陶器類・皿類の変遷」『越州窓青磁と綠釉・灰釉陶器』日本の美術  
6 №409

遺構・部位	土器部		須恵器		赤陶土器		瓦		陶器	磁器	石製品	金属製品	その他の	
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)						
SK8	1	31					1	21						
SD9	13	102	9	115			18	1,791						
SK10	11	31	3	17			54	12,204						
SK12	2	1					1	8						
SK13	5	6												
SA14	4	18			2	10								
SK16-1～5層	1,351	5,534	141	1,045	92		329	1,058	52,175		2	2	鉄滓2	
SK16-8～10層	938	5,152	359	2,888	52	258	1,475	69,440		1	6	灰釉陶器1、鉄滓1		
SK16-11層	686	4,338	124	1,355	17	43	1,052	93,690		1	1	鉄滓1		
SK16-12層以上	161	1,272	22	508	4	17	355	65,915				羽口1		
SD17	13	60	10	101	11	35	85	4,003	4	13	7	近世瓦3、鉄滓1		
SK18	3	7	1	4			2	460						
ピット							3	1,085						
1・E場・擾乱	104	380	23	159	34	85	437	16,675	1				近世瓦2	
計	3,292	16,932	692	6,172	212	777	4,543	298,483	5	13	3	26	灰釉陶器1、鉄滓5、羽口1	近世瓦3

表8 2区遺物集計表



1. 2区全景（南から）



2. SA19断面（南から）



3. SA14断面（南から）

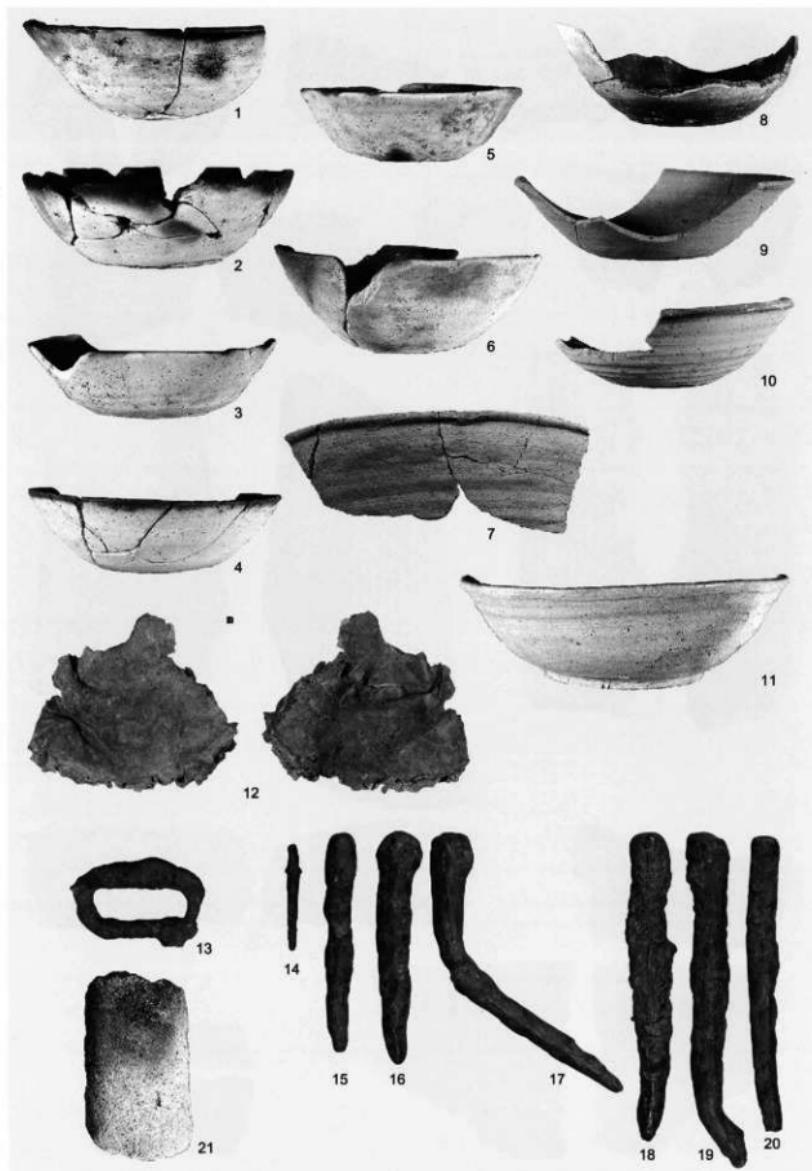


4. SK16全景（南から）

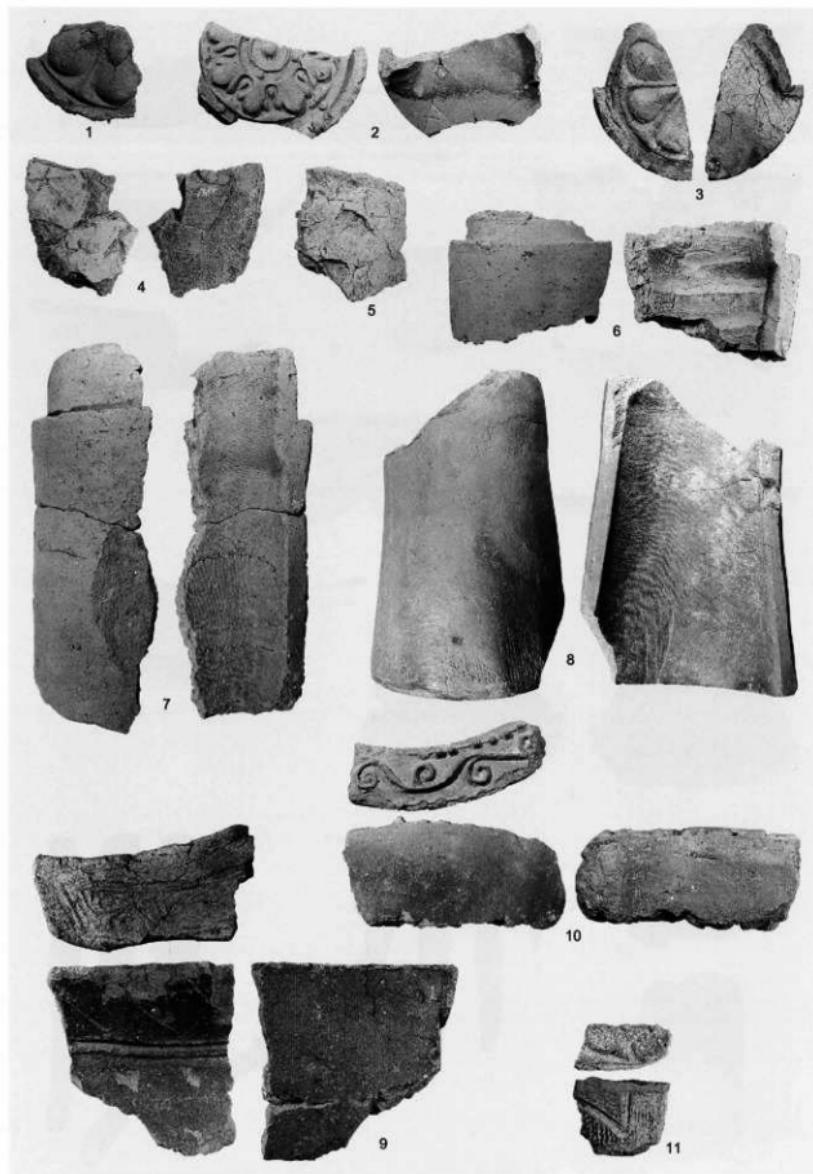


5. SK16遺物出土状況（東から）

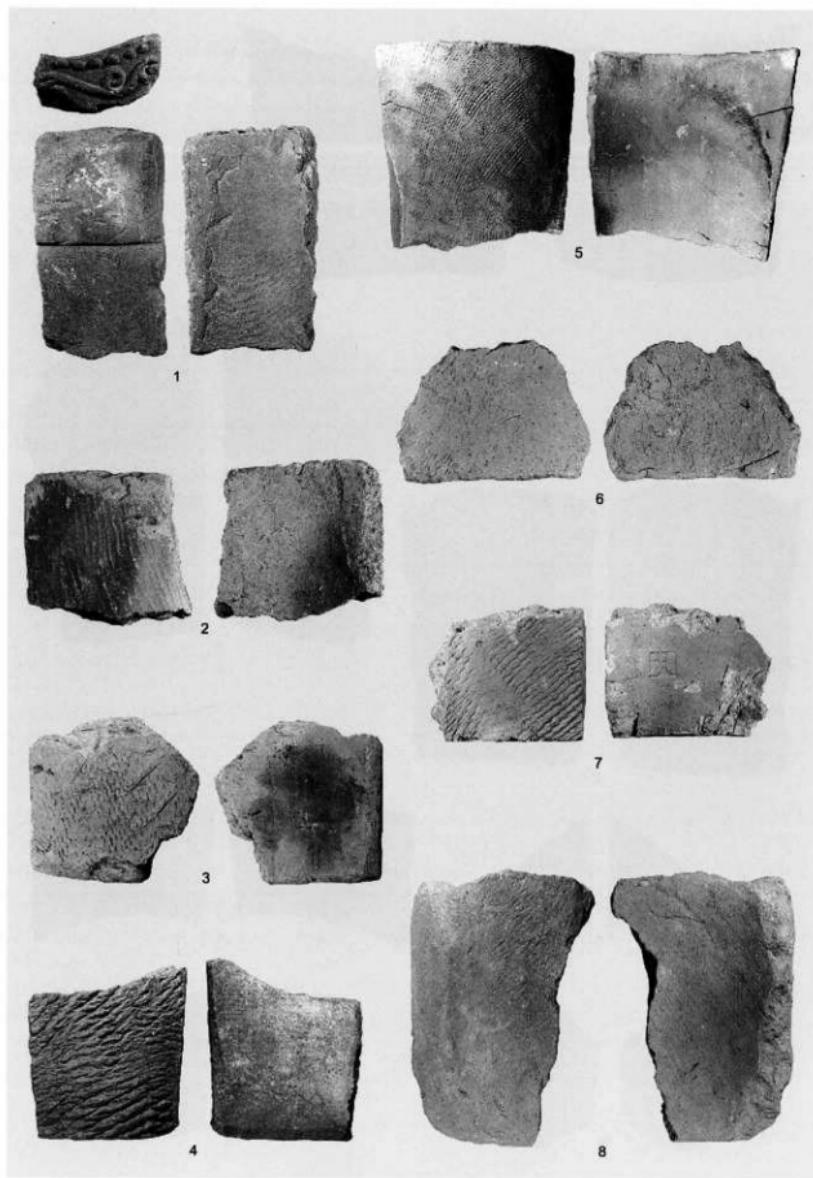
写真図版17 2区全景、SA14・19一本柱列跡、SK16



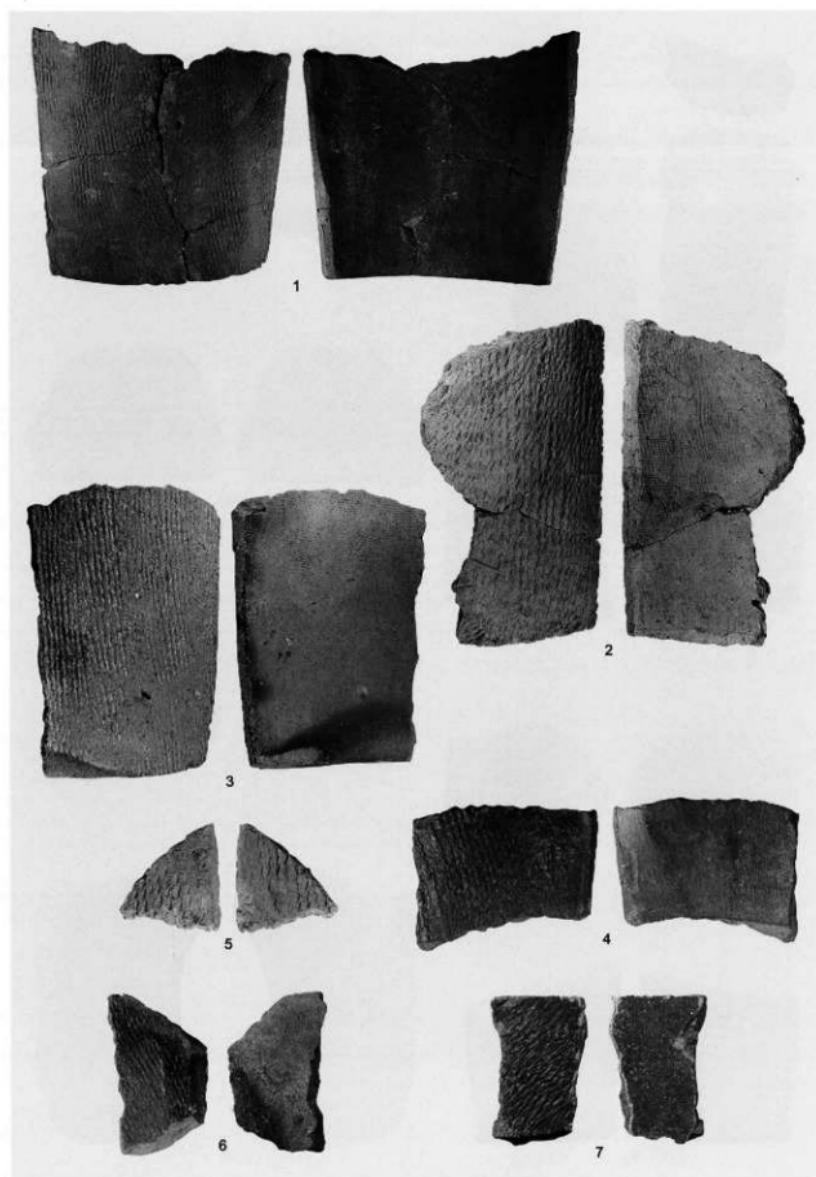
写真図版18 SK16出土遺物（1）



写真図版19 SK16出土遺物（2）



写真図版20 SK16出土遺物（3）



写真図版21 SK16出土遺物（4）

## IV. 3区の調査

### 1. 調査の概要

3区は寺地の北部の状況を把握するため、2区の北東側に東西6m×南北24mで設定した。調査の結果、堅穴住居跡、溝跡、性格不明遺構などを確認した。

### 2. 基本層序

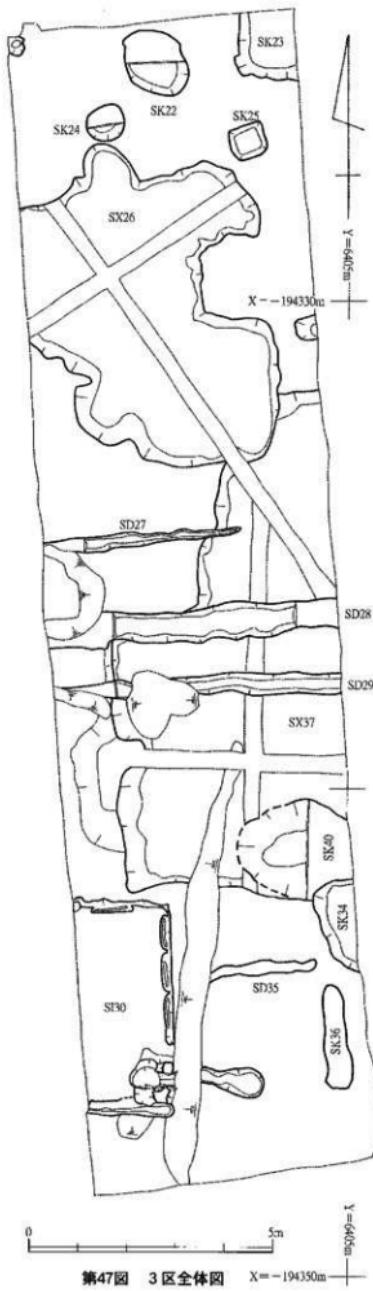
盛土上にI層(表土)、その直下にIV層を確認し、IV層上面で遺構を検出している。

### 3. 遺構と遺物

堅穴住居跡1軒、溝跡4条、土坑7基、性格不明遺構2基を確認した。陸奥国分寺跡に係わる遺構はSI30堅穴住居跡、SX26・37性格不明遺構と考えられる。SD27~29については断定できなかった。

**SI30堅穴住居跡** 調査区南西部に位置する。南北4.3m、東西2m以上で、西側は調査区外になっているため全体の規模は不明である。東辺での方向はN-2°-Wである。確認面から床面までの深さは約20cmで、堆積土は4層である。床面は硬くしまっており、床面上の北、東、南壁際には、溝状の落ち込みが残っている。東壁南寄りにカマドがあり、E-2°-Sの方向に煙道が約1.8m延びている。カマドは瓦によって補強されており、カマドの燃焼部や煙道周辺が強く焼けている。なお、カマドは全壊せず、土のうで保護し、埋め戻しを行った。

遺物は土師器、須恵器、赤焼上器などの土器類が約1,400点、瓦約370点の他、灰釉陶器と綠釉陶器が各1点出土している。第49図に出土状況を示したが、比較的カマド近くに多い傾向が認められた。圓化できた土師器D-15~23・25~27環は体部がやや内湾しながら立ち上がり、底径がやや小さく(註1)、内面のヘラミガキは放射状のものは少ない。底部は回転糸切無調整のものが多いが、手持ちヘラケズリ再調整が施されるものも認められる。なお、土師器D-15環は2個体が人字状に接着してはがせないため、そのまま圓化している。須恵器E-17・18・29环は底部が回転糸切無調整である。綠釉陶器Tc-2稜皿は薄手で、口縁部近くに宝相花文の印刻文様が認められる。猪投窓座で、黒窓90度窓式-I型式と考えら

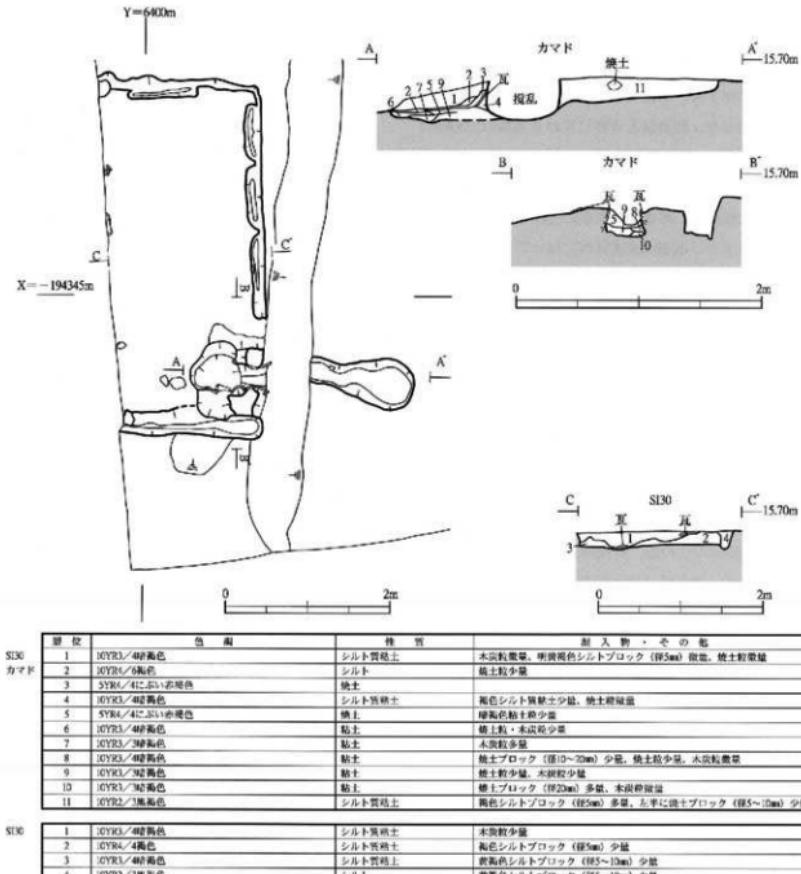


第47図 3区全体図 X=-194350m Y=35099

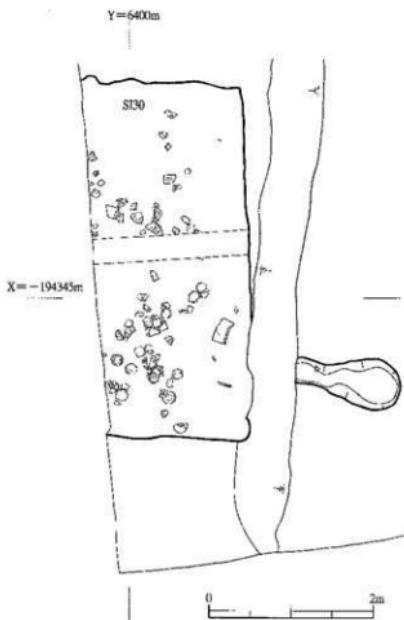
れる。灰陶器Ic-3碗も同様に猿投窓、黒窓90号窓式-1型式と考えられる。軒平瓦は瓦当面が剥離したG-41と山形文G-40がある。平瓦G-38はカマドの袖上、G-39はカマド内から出土したもので、両者共にカマドの補強材として使用されていた可能性がある。

SD27溝跡 調査区中央部や北よりに位置する溝跡である。上幅10~30cm、底幅6~20cm、深さ14cmである。断面形は逆台形で、壁は垂直に近く立ち上がり、底部はほぼ平坦である。西部は調査区外となっている。方向はE-5°-Nで確認した長さは約4mである。堆積土は1層である。遺物は須恵器、瓦が少量出土している。SX37を切っている。

SD28溝跡 調査区中央に位置し、調査区を東西に横断する溝跡である。上幅52~78cm、底幅30~52cm、深さ9cmである。断面形は「U」字形で上部は大きく開く。壁は緩やかで底部は平坦である。方向はE-3°-Nで確認し



第48図 S130平面・断面図



第49図 SI30遺物出土状況図

る。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦が250点出土している。須恵器E-20杯が図化できた。

**SK24土坑** 調査区北部に位置する。東西80cm、南北75cmの楕円形である。深さは10cmで、壁は緩やかである。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

**SK25土坑** 調査区北東部に位置する。東西75cm、南北70cmの方形である。深さは22~28cmである。遺物は土師器、瓦が8点出土している。

**SK34土坑** 調査区南東部に位置するが、東側の大部分が調査区外となっている。東西85cm以上、南北180cm以上で平面形は不明である。深さは19~21cmで、壁は緩やかである。底部は平坦である。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦が231点出土していて土師器が多い。底部がヘラ切り無調整の須恵器E-21杯と、E-22盤が図化できた。SK40を切っている。

**SK36土坑** 調査区南東部に位置する。東西40~50cm、南北215cmの葉巻形である。平面形は2区のSK20に類似しているが、精査は実施しなかった。

**SK40土坑** 調査区中央南部よりに位置する。南北165cm、東西220cm以上で、東側は調査区外になっている。平面形は明確ではないが、楕円形と考えられる。深さは17~24cmで、壁は緩やかである。堆積層は3層である。遺物は土師器、須恵器、瓦が約140点出土している。土師器C-1杯は丸底で体部はヘラケズリされている。D-13・14杯はやや厚手で歪みがあるが、ロクロを使用していると考えられる。底部へ体部にかけて手持ちヘラケズリ再調整がされているため、切り離し技法は不明である。D-12杯は静止糸切りで、底部外縁に回転ヘラヘズリ、体部下端

た長さは約6mである。堆積土は1層である。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦が約80点が出土している。

**SX37**を切っている。

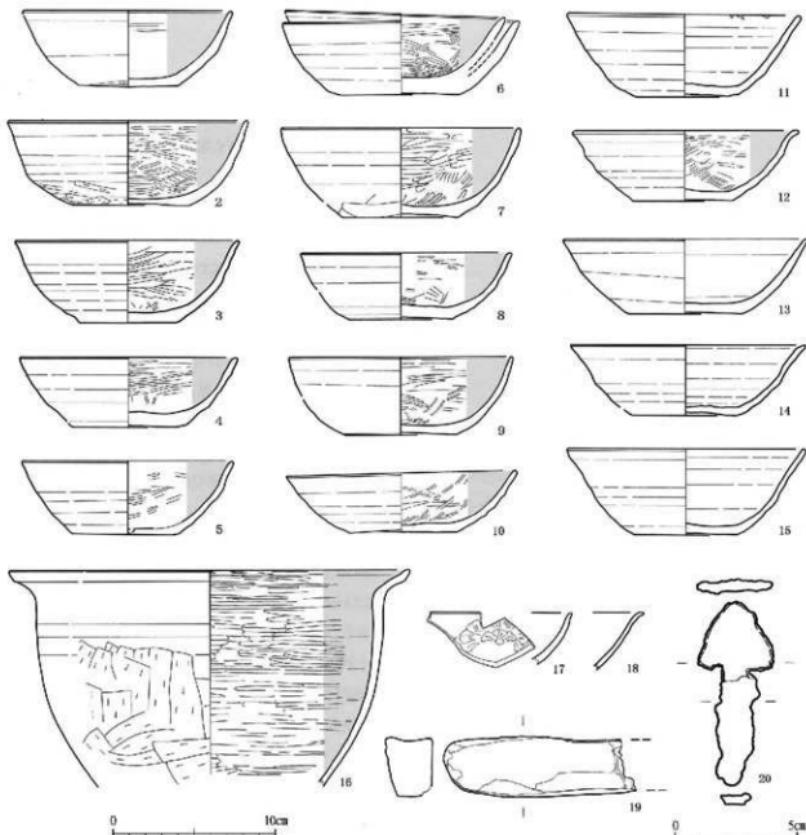
**SD29溝跡** 調査区中央に位置し、調査区を東西に横断する溝跡である。上幅35~47cm、底幅15~24cm、深さ21cmである。断面形は「U」字形で、壁は垂直に近く立ち上がる。底部は平坦である。方向はE-2°-Nで確認した長さは約5.7mである。堆積土は1層である。遺物は土師器、須恵器、瓦、鉄洋が約20点出土している。

**SX37**を切っている。

**SD35溝跡** 調査区南部に位置する溝跡で、幅が15~26cmである。方向はE-5°-Nで、確認した長さは約2.2mである。精査は行っていない。

**SK22土坑** 調査区北部に位置する。東西120cm、南北130cmの楕円形である。深さは7cmで、壁は緩やかである。堆積土は1層である。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦15点が出土している。

**SK23土坑** 調査区北東部に位置する。東西110cm以上、南北140cm以上であるが西側と北部が調査区外となっている。平面形は明確ではないが、底部は方形となっている。深さは12~20cmである。壁は緩やかである。

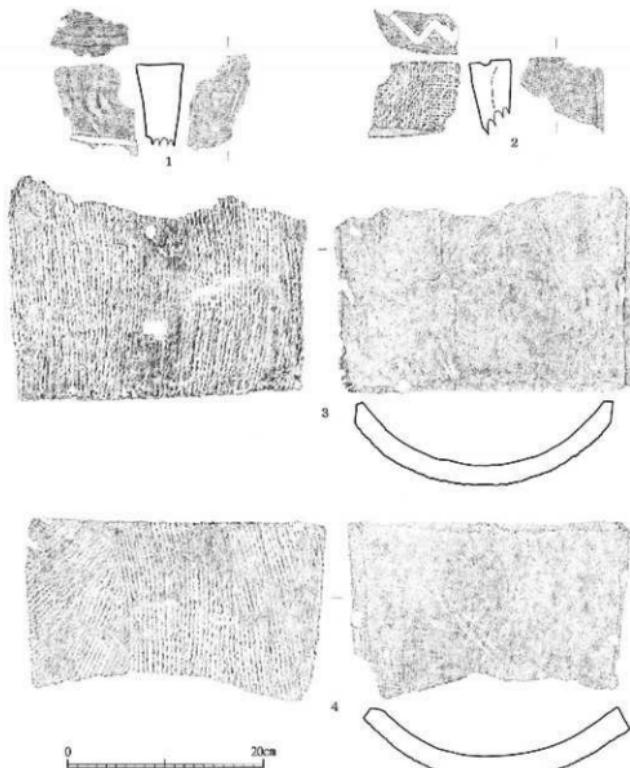


No.	登録No.	地区・遺構・部位	種別・形種	遺存度	法線 (cm)			調査・特徴	写真 回数
					口徑	底径	高さ		
1	D-18	3区・SI30	上部縦・坪	4/5	(32.7)	6.1	4.6	ロクロ調節、底部二部化・端手付・ハラカリ、複腹（直腹）、内側ラミネート、外側丸底、底部装飾、底径／口径約2.5	23-1
2	D-29	3区・SI30	土縫器・坪	4/5	14.6~15.0	7.4	5.2	ロクロ調節、底付・端手付・ハラカリ、直腹調節系切り、内側ヘラギヨリ・白色刷毛、底付端面・底径・口径約2.5	23-2
3	D-19	3区・SI30	土縫器・坪	確認定期	13.6	6.0	5.1	ロクロ調節、底付・中折ハラカリ、蓋（直腹）、内側ヘラギヨリ・白色刷毛、外側丸底、底付・口径約2.5	23-3
4	D-23	3区・SI30	上部縦・坪	3/4	13.4	7.0	4.3	ロクロ調節、底付端手切り、内側ラミネート・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-4
5	D-21	3区・SI30	土縫器・坪	3/4	12.6~13.0	6.3~6.5	4.5	ロクロ調節、底付・端手切り、内側ラミネート・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-5
6	D-15	3区・SI30	土縫器・坪	確認定期	11.14	上不規	上不規	ロクロ調節、底付・端手切り、内側ラミネート・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-6
7	D-22	3区・SI30	上部縦・坪	1/2	(14.4)	7.0	5.5	ロクロ調節、底付・端手切り、内側ヘラギヨリ・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-8
8	D-26	3区・SI30	土縫器・坪	1/3	(13.0)	6.4	4.1	ロクロ調節、底付・端手切り、内側ヘラギヨリ・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-9
9	D-27	3区・SI30	上部縦・坪	3/4	14.6	5.8	4.6	ロクロ調節、底付・端手切り、内側ヘラギヨリ・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-10
10	D-6	3区・SE2	土縫器・坪	3/4	13.6~14.2	6.5	3.5~3.8	ロクロ調節、底付端手切り、内側ヘラギヨリ・黑色装飾、底径・口径約2.5~3.5	23-11
11	D-17	3区・SE2	土縫器・坪	4/5	14.3	5.7	5.1	ロクロ調節、底付端手切り、内側ラミネート・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-12
12	D-20	3区・SE2	上部縦・坪	確認定期	13.9	6.1	4.3	ロクロ調節、底付端手切り、内側ヘラギヨリ・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-13
13	E-29	3区・SE2	土縫器・坪	確認定期	14.8	7.0	4.6	ロクロ調節、内側ヘラギヨリ・黑色装飾、底付端手切り・口径約2.5	23-14
14	E-17	3区・SE2	土縫器・坪	1/4	(14.2)	6.5	4.6	ロクロ調節、底付・端手切り、内側ヘラギヨリ・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-15
15	E-18	3区・SE2	土縫器・坪	1/2	14.6	6.4	5.3	ロクロ調節、底付・端手切り、内側ヘラギヨリ・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-16
16	D-31	3区・SE2	上部縦・坪	1/10	(21.9)	不規	不規	ロクロ調節、底付端手切り・内側ヘラギヨリ・黑色装飾、底径・口径約2.5	23-17
17	E-2	3区・SI30・下期	胸形・縦縫接縫	小片	不明	不明	不明	底付定期式・1型式、複制作成	23-18
18	E-3	3区・SI30・2期	胸形・横縫接縫	小片	不明	不明	不明	底付定期式・1型式	23-19
Na. 登録No. 地区・遺構・部位 種別・形種 遺存度									
Na.	登録No.	地区・遺構・部位	種別・形種	遺存度	法線 (cm)			特徴	写真 回数
19	K-1	3区・SI30	石製品・石器	不明	長さ (1.9cm)	幅3.4cm	厚さ2.7cm	重量190g、块状化	23-22
No. 登録No. 地区・遺構・部位 種別・形種 遺存度									
法線 (cm)									
No.	登録No.	地区・遺構・部位	種別・形種	遺存度	法線	幅	厚さ	特徴	写真 回数
20	No-9	3区・SI30	焚窓渣・灰	生焼付・中央	7.73	—	0.3	200g	23-23

第50図 SI30出土遺物(1)

に手持ヘラケズリ再調整がされている。須恵器はE-13高台坏、E-14蓋、E-12盤、E-15壺、長頸壺と推定されるE-16などがある。瓦はF-18八葉重弁蓮華文軒丸瓦、G-36偏行唐草文軒平瓦が図化できた。第52図に出土状況を示した。SK34に切られ、SX37を切っている。

**SX26性格不明遺構** 調査区北部に位置する。東西3.5~4.7m、南北5.7~5.9mの不整形で、西部は調査区外となっている。底面が基本層IV層下にある礫層上面と一致することから土取り穴の可能性があるが、深さが浅いため断定はできなかった。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器などの土器片が約7,300点、瓦約1,000点、鉄製品約10点が出土している。第52図に出土状況を示したが、北部に多く分布している。図化できた土器類は、赤焼土器、土師器、須恵器など5点と瓦15点である。土師器D-9塊は外面へラミガキ・黒色処理されている。D-10は羽釜と推定される。須恵器は盤と推定されるE-4と器種不明のE-3がある。軒丸瓦はF-16細弁蓮華文、F-17宝相花文、軒平瓦はG-26・35偏行唐草文、G-34山形文などがある。平瓦は凸面が繩叩きされたものが大部分で、叩き目が細く縦位のG



第51図 SI30出土遺物（2）

No.	登録No.	地区・遺構・剖位	柄例・特徴	保存度	特徴	色調	写真 番号
1	G-41	3区・SI30・4削	滑平瓦	小片	直面接合面ナデ、瓦当面剥落、凹面：ナデ、凹面：布目模、凸面繩目	黒灰	21-19
2	G-40	3区・SI30・下削	滑平瓦	小片	山形文、裏面：繩目（やや細い）、裏面：布目・模様・繩目、縫目やつぶれ、凸面ヘラケズリ、裏面無	黒灰	21-20
3	G-39	3区・SI30・カマフ	平瓦	1/2	凸面：繩目（やや細い）、裏面：凹面：布目一掃すり消し、板骨模、側面・小口面ヘラケズリ、底面幅25.5cm、厚3mm、自剥なし	灰白 黒灰	21-2
4	G-38	3区・SI30	平瓦	1/3	凸面：繩目（やや細い）、裏面・側面：凹面：布目やつぶれ、凹面：布目一部すり消し、側面・小口面ヘラケズリ、底面幅27.5cm、厚3mm、自剥なし	灰白	21-1

-29・32(第57図2・3)、叩き目が細く斜位のG-31・22(第57図1・4)、叩き目がやや細く縦位のG-18・19・30・33(第55・56図)などがある。G-31は繩叩きがナデによってスリ消されている。なお、G-22・30・31は凹面にヘラ描きや指描きが認められる。格子叩きはH-6(第57図6)1点のみである。

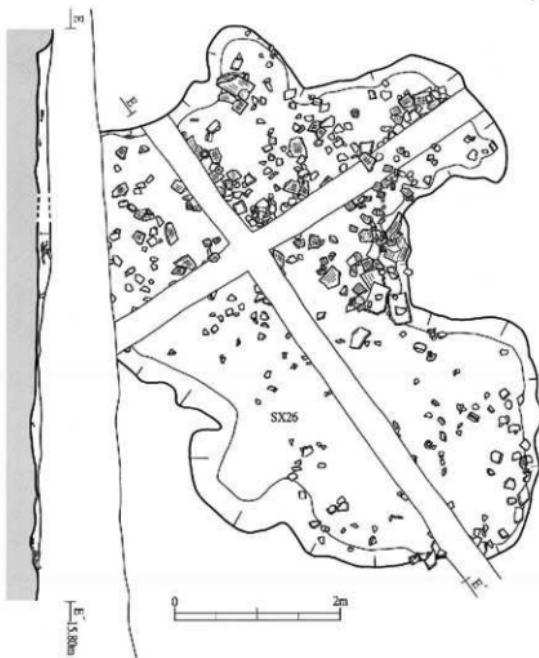
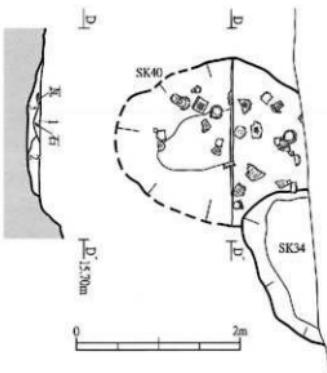
SX37を切っている。

**SX37性格不明遺構** 調査区中央部に位置する。東西4.6m以上、南北約10mの不正形である。東部は調査区外となっている。底面が基本層IV層下にある礫層上面と一致することから土取り穴の可能性があるが、断定はできなかった。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器等の土器片が約350点、瓦約230点、石製品1点が出土している。図化できた土器類は、須恵器壺や盤など7点、瓦2点、石製品1点である。須恵器E-5・10は底径が比較的大きく、底部全面または底部～体部下端に回転ヘラケズリ再調整が施されている。盤E-8は内面の磨滅が著しいことから鏡に転用されている可能性がある。瓦はF-19八葉重弁蓮華文軒丸瓦とH-5熨斗瓦がある。

SX26、SD27～29、SK40に切られている。

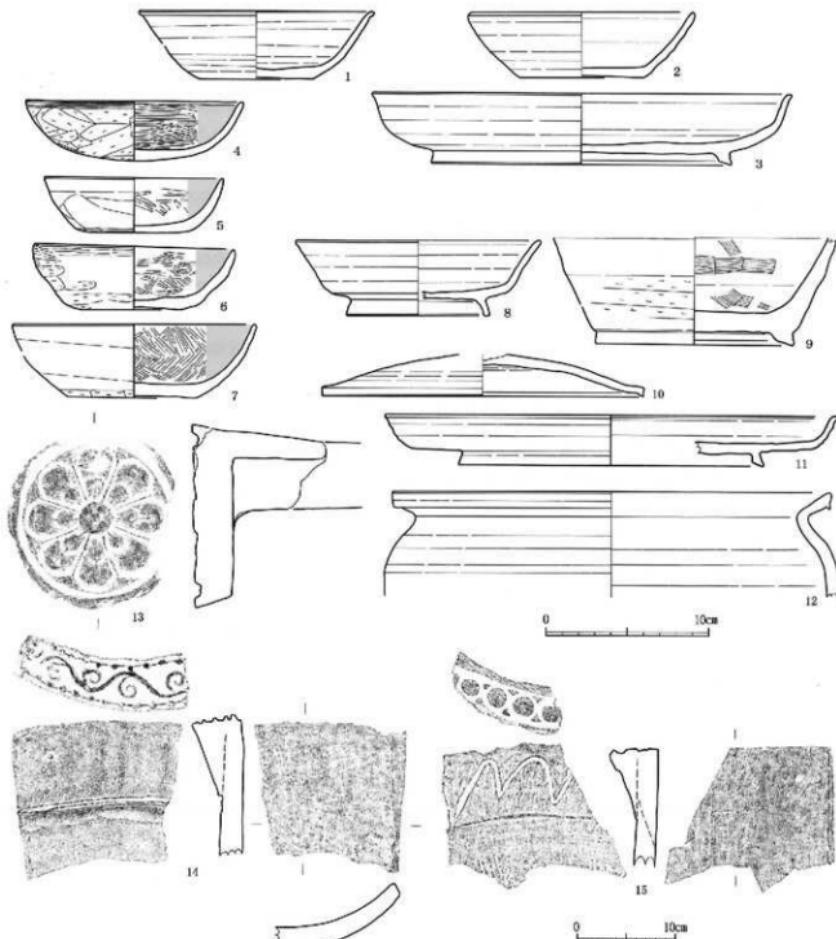
#### 4.まとめ

SI30から出土した土師器壺は、多賀城跡SK2272出土土器とSK2270出土土器(註2)に共通する要素を持っているが、どちらかといえばSK2270に近い(註3)。なお、多賀城跡SK2272は9世紀第3四半期を中心とした時期、SK2270は9世紀第4四半期を中心とした時期と考えられている。須恵器壺は底部が回転条切り無調整であることから、9世紀後半



層位	色調	性質	混入物・その他
1	19YR2/3黒褐色	粘土	块状・木炭多量
2	19YR2/3黒褐色	粘土	
3	19YR2/3黒褐色	粘土	白色粘土ブロック(厚10mm)少量、木炭少量
SX26	1 19YR2/3黒褐色	シルト質粘土	

第52図 SK34・40、SX26平面・断面図



No.	性質No.	地区・施設・施設	種別・基材	遺存度	法長(cm)	法幅(cm)	高さ	説明・特徴	参考範囲
1	E-29	須E・SK23	土器部・环	1/2	14.2	6.6	4.2	ロクロ調査、底面不規則角切、白粉なし、底径/口径0.68	24-1
2	E-29	須E・SK23	土器部・环	2/3	12.9	7.6	4.0	ロクロ調査、底面不規則角切、白粉なし、底径/口径0.55	24-4
3	E-22	須E・SK4	土器部・环	1/9	(45.9)	(18.4)	4.9	ロクロ調査、底面不規則角切、回転ハラケ入り、白粉なし	24-5
4	C-1	須E・SK4	土器部・环	底延完形	11.2	—	3.7	ロクロ調査、底面不規則角切、各部へ底落へラケ入り、内面ハラミガキ・褐色底斑、白粉無	24-6
5	D-13	須E・SK4	土器部・环	底延完形	10.9	7.0	3.4	コロクロ調査、底落不規則角切、白粉なし、底径/口径0.65	24-7
6	D-14	須E・SK4	土器部・环	完形	12.4	6.6	3.9	ロクロ調査、底落不規則角切、白粉なし、底径/口径0.48	24-8
7	D-12	須E・SK4	土器部・环	3/4	14.6	7.9	4.5	ロクロ調査、底落不規則角切、体部下端手持ハラケ入り、底部底面不規則角切ハラケ入り、内面ハラミガキ・黑色底斑、白粉無	24-9
8	E-13	須E・SK40	土器部・肩台付	1/2	15.1	8.8	4.7	ロクロ調査、底落不規則角切、白粉なし	24-12
9	E-15	須E・SK40	土器部・肩台付	底落のみ	不明	12.1	本物	ロクロ調査、底落手持ハラケ入り、白粉なし	24-13
10	E-14	須E・SK40	土器部・肩	1/3	(5.8)	—	本物	ロクロ調査、白粉無	24-11
11	E-12	須E・SK40	土器部・壁	1/5	(27.0)	18.8	3.1	ロクロ調査、底落不規則角切～底延部分ハラケ入り、白粉無	24-14
12	E-15	須E・SK40	土器部・壁	上部1/4	(27.0)	—	(6.0)	ロクロ調査、白粉無	24-15

No.	性質No.	地区・施設・施設	種別・基材	遺存度	特徴	色調	参考範囲
13	F-18	須E・SK40	新平瓦	1/3	八葉型轍面文(須分寺第60号)、瓦当表面ナガ、瓦頂凸面:ナゲ、内面:布目板、一添手り酒し、白粉なし	灰	24-10
14	G-36	須E・SK40	新平瓦	1/6	八葉型轍面文、表面ナガ、瓦頂凸面(やや細い・新瓦)、瓦目手り酒し、内面:布目板、糸切縫、切端ハラケ入り、白粉なし	青灰	24-15
15	G-47	須E・SD28	新平瓦	1/6	八葉型轍面文、表面ナガ、瓦頂凸面(やや細い・新瓦)、瓦目手り酒し、内面ハラケ入り、白粉なし	灰灰	24-17

第53図 SK23・34・40、SD28出土遺物

頃と考えられている「多賀城D群土器」(註4)の範疇に捉えられる。一方、SI30からは黒窓90号窓式・1型式と考えられる縁軸陶器lc-2梗皿と、灰釉陶器lc-3碗も出土している。2点とも小片であるので同住跡に伴うとは断定できないが、黒窓90号窓式・1型式は840~860年頃と考えられている。以上のような土器類、須恵器、縁軸陶器、灰釉陶器の年代観から、SI30の時期は9世紀後半頃で、その中でも第4四半期を中心とした頃と考えられる。

SK34・40、SX26・37は重複関係にあり、SX37→SX26、SX37→SK40・SK31の新旧関係が確認されている。最も古いSX37の出土遺物のうち須恵器E-5・10杯は、底径が比較的大きく、底部全面または底部へ体部下端に回転ヘラケズリ再調整が施されている。このような特徴を有する須恵器は、大崎市下伊場野窯跡群第3号窯跡(註5)や、色麻町日の出山窯跡群C地点西部第2号窯跡(註6)などの多賀城創建期頃とされる窯跡に認められる。E-5・10杯の製作技法は下伊場野窯跡群第3号窯跡や日の出山窯跡群C地点西部第2号窯跡と共に通するが、底径/口径比が0.53と0.64でやや小さいことは、前二者と比べると後退的な要素である。また、E-8・9のような口径の大きな盤も多賀城創建期頃とされる利府町殿沢窯跡B地区2号窯跡(註7)などで認められるが、殿沢窯跡B地区2号窯跡は下伊場野窯跡群第3号窯跡や日の出山窯跡群C地点西部第2号窯跡よりもやや新しいと考えられている。これらの点から、SX37の遺物は多賀城創建期の中でもやや新しい時期で、概ね8世紀中葉頃のものと推定される。なお、陸奥国分寺の創建年代は記録がないが、瓦の共通性から多賀城政府II期とほぼ同時期と推定されているので、SX37は陸奥国分寺の創建に近い頃の遺構であると考えられる。

SK40はSX37を切っている十坑で、土師器、須恵器、瓦が発見された状態で出土している。丸底のC-1杯は薄手で体部に段や梗が形成されないタイプで、内面はヘラミガキ・黒色処理されているものの、器形や外側の調整技法は在地のものとは異なっている。このような杯は、近くでは中田南遺跡第Ⅲ群土器に類似があり、関東系土器の影響を受けて成立したものと考えられている(註8)。D-12杯は静止系切りで底部周辺に回転ヘラケズリ、体部下端に手持ヘラケズリ再調整がされている。器形はやや異なるが、前述した中田南遺跡でも同じ製作技法の土師器が出土している(註9)。D-13・14杯は底部へ体部にかけて手持ヘラケズリ再調整されているためロクロ目が明瞭ではないが、ロクロ使用と推定される。非ロクロ土師器とロクロ土師器が共存する伊治城跡SI173住居跡のロクロ土師器は定型化しており(註10)、これらと比べるとD-13・14は重みがあつて製作技術的にはやや稚拙な印象を受ける。須恵器は高台杯、蓋、盤などがあるが、蓋は器高が低く、多賀城政府第Ⅲ期までは下らない(註11)。一方、瓦は重弁蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦で、陸奥国分寺創建期のものである。以上のような遺物の年代観と、SX37との重複関係からすると、SK40の遺物は8世紀第3四半期頃を中心とした年代が考えられる。

SK34はSK40を切っている。E-22盤は、口縁部や高台の形態などSK40出土のE-12盤と類似している。E-21杯は底部がヘラ切り無調整で、底径/口径比が0.55であるが、このような須恵器は8世紀末~9世紀前半を中心とした時期に認められる。SK34の年代も概ねこの頃と考えられる。

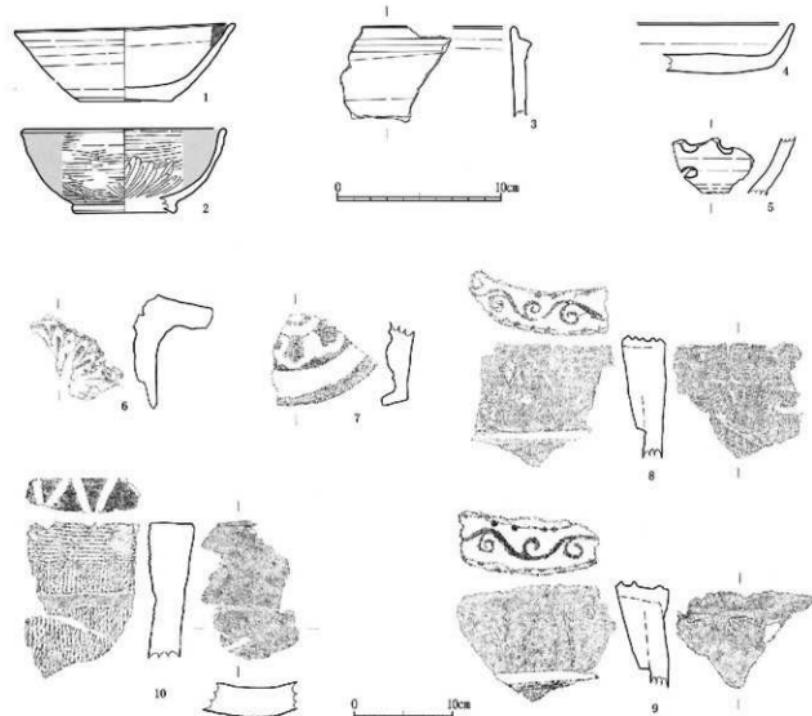
SX26からは、貞觀11(869)年の地震後の復興期の瓦とされるF-17室相花文軒丸瓦が出土している。土師器D-9碗のように内外面黒色処理された碗は多賀城跡第61次調査第7層から多く出土し、この十器群は「F群土器」に

遺構・層位	土師器		須恵器		赤陶土器		瓦		陶器	船形	石製品	金屬製品	その他
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)					
SK22	10	32	3	6	1	1	1	58					
SK23	188	1,042	20	296	12	25	30	3,020					
SK25	7	18			1	1	115						
SX26	3,974	18,602	411	5,372	2,969	7,456	1,002	135,944			8	鐵鋤4	
SD27			1	1		2	16						
SD28	26	187	10	116	6	20	45	3,746					
SD29	9	42	4	85		6	503						
SI30	1,096	5,877	91	1,267	201	730	374	31,180		2	3	鐵鋤2	
SK34	120	1,075	42	462	35	100	34	4,075					
SX37	201	589	44	2,635	5	20	235	25,655					
SK40	77	1,078	37	1,562		25	847						
I-II層・複数	2,774	9,601	385	4,461	861	2,082	793	65,336	10	11	8	近世瓦19、鐵鋤6、土製品2	
計	3,082	39,149	1,148	16,231	4,090	10,434	2,545	278,075	10	11	3	19	灰砂陶器1、縁軸陶器1、鐵鋤3、土製品2、近世瓦19

表9 3区遺物集計表

相当するとされ、灰白色火山灰との間の間層の存在から10世紀中頃以降と考えられている。ただし、内外面黒色処理された土器自体は「E群土器」の段階から認められるので、D-9碗は10世紀前半にまで遡る可能性はある。また、D-11をはじめとして赤焼土器が大量に含まれていることも考慮すると、SX26の遺物は概ね9世紀第4四半期以降で、10世紀前半以降を中心とすると推定される。

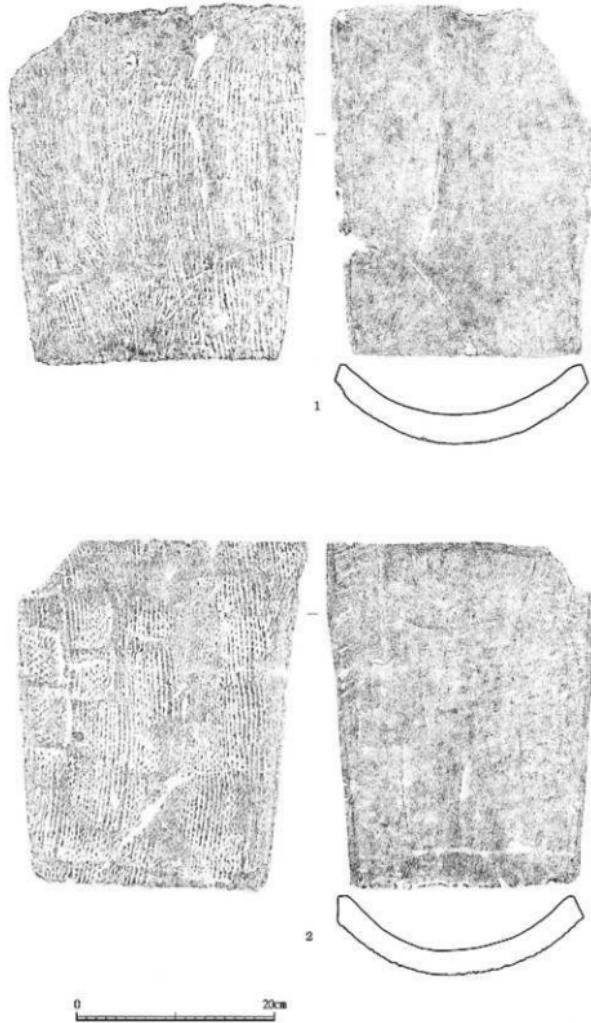
以上のように、3区の遺構は国分寺に関連するものが多い。特に竪穴住居跡の存在が確認できたことはこの地区的性格を考えいく上で重要な事項と考えられる。なお、SD27~29については、遺物の様相からすると古代の遺構



No.	施設No.	地区・遺構・部位	種別・基種	遺存度	法長(cm)			特徴・形状	写真 図版
					口徑	底径	高さ		
1	D-11	3区・SX26	赤燒土器・耳	3/4	13.4	5.2~5.0	4.3~4.5	ロクロ渦巻、底面斜板切、タール状の付着物、白粉微量、底深 /口径2.40~2.48	25-1
2	D-9	3区・SX26	土師器・瓶	1/4	(12.2)	6.0	5.2	内外面ヘラクギ目、底色粗粒、白粉微量	25-2
3	D-10	3区・SX26	土師器・刮削	小片	不明	不明	不明	ロクロ渦巻、白粉なし	25-3
4	E-4	3区・SX26	陶器部・罐	1/6	不明	不明	3.0	ロクロ渦巻、底部ロクロナダ→周縁ヘラカズリ、白粉多量	25-5
5	E-2	3区・SX26	陶器部・盤?	小片	不明	不明	不明	ロクロ渦巻、穿孔3ヶ所、白粉なし	25-4

No.	施設No.	地区・遺構・部位	種別・基種	遺存度	法長(cm)			特徴	色調	写真 図版
					口徑	底径	高さ			
6	F-6	3区・SX26	軽瓦	小片	細井窯灰文(国分寺第3期)、瓦面直・瓦斜面・丸瓦六八面:ナガ、白粉なし	灰白	25-6			
7	F-7	3区・SX26	軽瓦	小片	宋官窯文、瓦当畫面前ナガ:白粉なし	灰白 赤理	25-7			
8	G-35	3区・SX26	軽瓦瓦	1/10	幅広灰文、盤形:ナガ、一部火炎が付着、凸面:側面削り落とし、側面ヘラカズリ、凹面:右側一帯削り落とし、布合せ付、白粉なし	灰 赤理	25-30			
9	G-26	3区・SX26	軽瓦瓦	1/10	輪郭灰文、瓦面:薄削落、盤形:ナガ、左に朱が付着、凹面:ナガ、白粉なし	灰	25-8			
10	G-34	3区・SX26	軽瓦瓦	1/10	由加文、輪郭:側面削り落とし、凸面:側面削り落とし、凹面:側面削り落とし、白粉なし	灰白 に白粉	25-9			

第54図 SX26出土遺物（1）



No.	登録No.	地区・遺構・層位	種別・断面	保存度	特徴	色調	写真 回数
1	G-19	東C・SX26	平真	ほぼ完形	表面: 緩斜(やや細かい、規則、斜板), 縞目ややつぶれ。凹凸: 有りすり面し。断面: 小口は直角カズリ。底端幅21.0cm、長さ30.0cm、厚さ2.5~26mm。口付なし。	にじみ青	26-5
2	G-18	東C・SX26	縦ばく形	ほぼ完形	表面: 緩斜(やや細かい、規則、斜板), 縞目ややつぶれ。底端幅23.5cm、長さ36.0cm、厚さ2.0~25mm。口付なし。	にじみ青	26-6

第55図 SX26出土遺物（2）

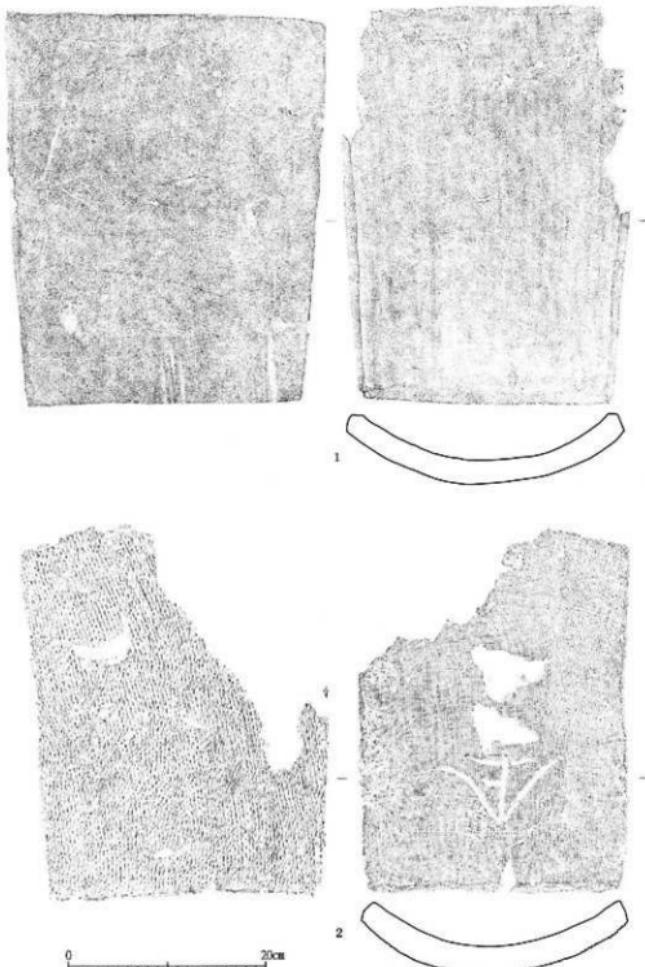
である可能性はある。櫻ね伽藍中軸線と直交するので区画溝の可能性があるが断定は控えておきたい。

なお、赤焼土器については、SI30出土のD-17、SX26出土のD-11のように口縁部に油煙と考えられるタール状の付着物が認められるものが多い。灯明具として使用されたと推定される。

(註1) 図化できた11点の底径／口径は0.44～0.52、平均0.48である。

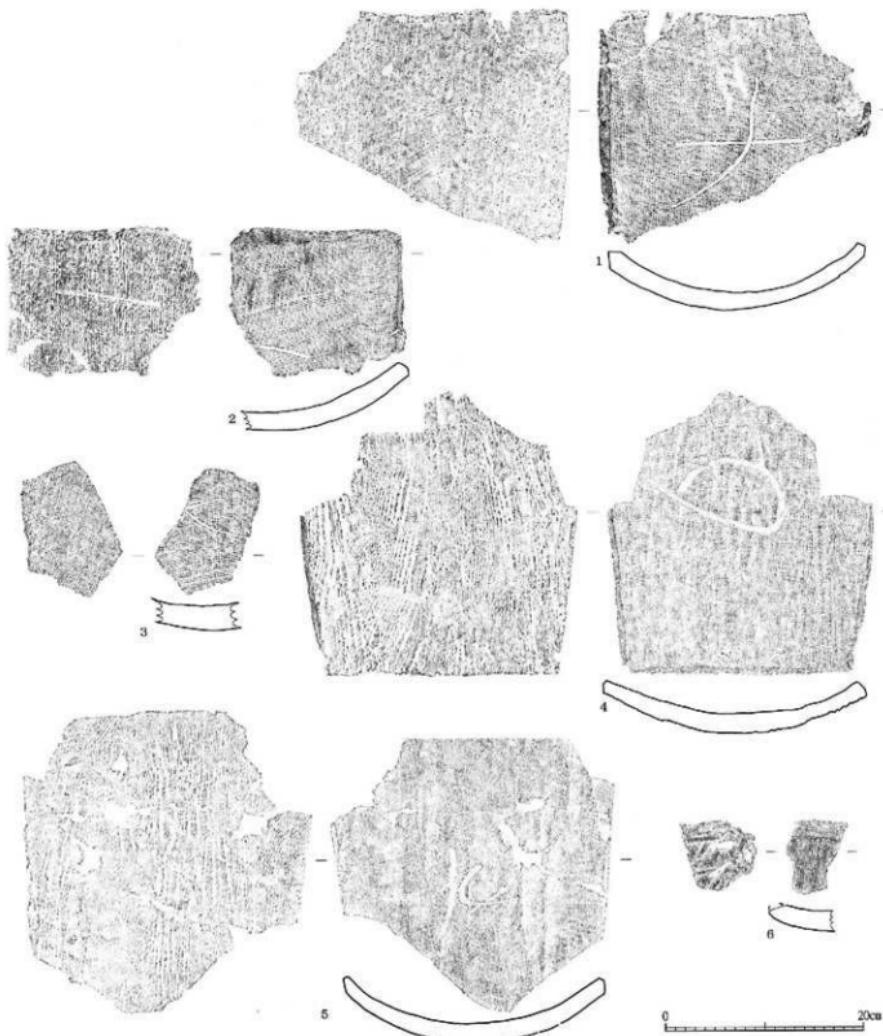
(註2) 宮城県多賀城跡調査研究所 1994「現状変更に伴う調査」『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1994

(註3) 底部の切り離しと再調整技法を見ると、SI30出土土器は回転糸切り無調整のものが多く、回転糸切り後に



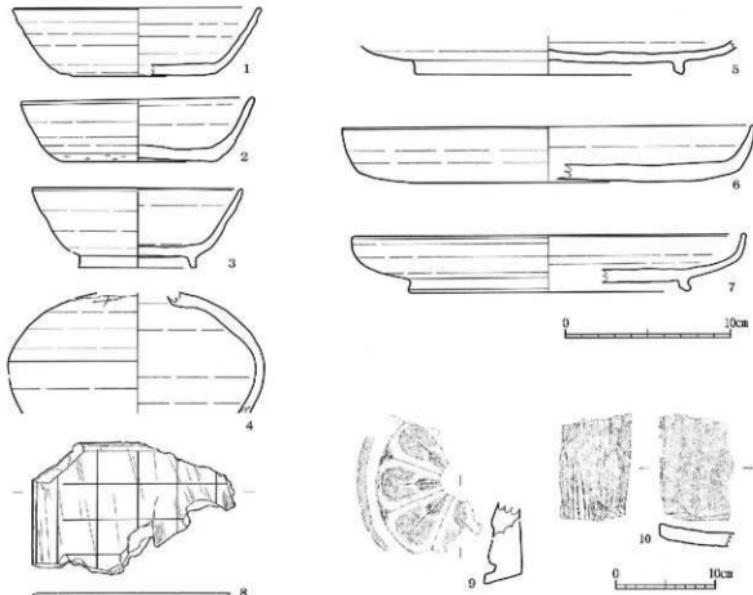
第56図 SX26出土遺物（3）

No.	954No.	地区・施設・層位	縦剖・断面	断面概	特徴	色調	写真 頁数
1	G-33	MF・SX26	平底	横延定期	内面：糊押さ（やや傾い・定位）、縫口すり消し、側面・小口面へラケズリ、外面：布目すり消し、 内切り直、横刃削、側面・小口面へラケズリ、広鉗脚26.6cm、底盤幅24.8cm、長径48cm、厚辺2~ 2.5mm、上計なし	青灰	25-11
2	G-30	MF・SX26	平底	4/2	内面：糊押さ（やや傾い・定位）、外面：布目板、熱切削、指詰き「企」、側面・小口面へラ ケズリ、鉗脚幅25.0cm、厚辺2~2.5mm、内折なし	灰白	25-12



No.	番号No.	地区・遺構・層位	種別・器種	保存度	特徴	色調	写真 図版
1	G-31	3区・SX26	平瓦	1/3	凸面：側印き(無い・複数)、純目すり出し。凹面：布目模、高切痕、ヘラ模き「ナ」、側面 へラケズリ。厚13~19mm、白粉なし	灰青 に赤い斑駁	25-1
2	G-29	3区・SX26	平瓦	1/6	凸面：側印き(無い・複数)、側目ややつぶれ。凹面：布目模、ヘラ模き「ナ」?、側面 小口面へラケズリ。厚20~23mm、白粉なし	灰青 に赤い斑駁	25-3
3	G-32	3区・SX26	平瓦	1/3	凸面：側印き(やや無い・複数)、側目つぼれ。凹面：布目模、ヘラ模き「大」?、側面 白粉なし	灰青 に赤い斑駁	26-2
4	G-22	3区・SX26	平瓦	2/3	凸面：側印き(無い・複数)、側目つぼれ。凹面：布目模、側面へラケズリ。凹面：布目 模、側面へラケズリ。厚12~19mm、白粉なし	褐色	26-4
5	G-23	3区・SX26	平瓦	2/3	凸面：側印き(やや無い・複数)、側目つぼれ。凹面：布目模、側面へラケズリ。凹面：布目模、側面へラケズリ。厚15~20mm、白粉なし	褐色	26-7
6	H-6	取手・SX26	近鉢瓦・熨斗瓦	小片	凸面：端子崎立、小口面へラケズリ。凹面：布目模。小口面へラケズリ。厚20mm、白粉なし	灰黄	26-8

第57図 SX26出土遺物（4）



No.	埋蔵No.	地区・遺跡・剖面	種別・器種	遺存度	径幅(cm)			測量・特徴	写真 図版
					口徑	底径	器高		
1	B-5	3区・SX37	粗底器・耳	1/3	15.0	8.0	4.2	ロクロ調整、底部切離不明→回転ヘラケズリ、白糞なし。底付/口徑CS	25-1
2	B-10	3区・SX37	粗底器・耳	完形	14.2	9.1	3.85	ロクロ調整、底部切離不明→底部へ回転ヘラケズリ、白糞無し。底付/口徑CS	25-2
3	B-5	3区・SX37	粗底器・底付?	3/4	12.4~13.0	7.1~7.2	4.9	ロクロ調整、底部切離不明→回転ヘラケズリ、白糞微量	25-4
4	B-11	3区・SX37	粗底器・長脚?	1/3	不明	不明	不明	ロクロ調整、再びにヘラ記号「+」	25-5
5	B-7	3区・SX37・上層	粗底器・縫合?	1/6	不明	6.4	不明	ロクロ調整、底部切離不明→回転ヘラケズリ、白糞微量	25-3
6	B-8	3区・SX37	粗底器・縫合	1/3	(25.0)	(23.0)	3.3	ロクロ調整、底部切離不明→回転ヘラケズリ、底付無し。内面作成。	25-6
7	B-9	3区・SX37	粗底器・縫合	1/4	(24.0)	(17.0)	3.5	ロクロ調整、底部切離不明→回転ヘラケズリ、白糞なし	25-7

No.	埋蔵No.	地区・遺跡・剖面	種別・器種	遺存度	特徴	写真 図版
8	K-3	1区SX37・1区複数	石製品・芯抜	1/20	長さ不明、幅不明、厚さ0.3mm、重さ4.2g、黒色岩	25-11

No.	埋蔵No.	地区・遺跡・剖面	種別・器種	遺存度	特徴	色調	写真 図版
9	B-19	3区・SX37	軸丸瓦	1/5	八邊正方形基文(四分部等)～3期)、白糞なし	灰	25-6
10	B-5	3区・SX37	追加瓦	小片	△底:平面明き(底付)、側面ヘラケズリ、表面:有目で消し、無面・小口面ヘラケズリ、厚1mm、白糞なし	灰	25-8

第58図 SX37出土遺物

手持ちヘラケズリ調整が施されるものも認められること、岡化できた11点の底径/口径比が0.44~0.52で、平均0.48であることなどの状況は多賀城跡SK2270出土土器に類似している。しかし、多賀城跡SK2270の土師器壺には、回転ヘラケズリ再調整のものが僅かに含まれる点が異なり、内面のヘラミガキに横方向のものが多いことは多賀城跡SK2272出土土器に共通する要素である。

(註4) 白鳥良一 1980『多賀城出土土器の変遷』『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所

(註5) 宮城県多賀城跡調査研究所 1994『下伊場窯跡群』多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書第19冊

(註6) 色麻町教育委員会 1993『日出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第1集

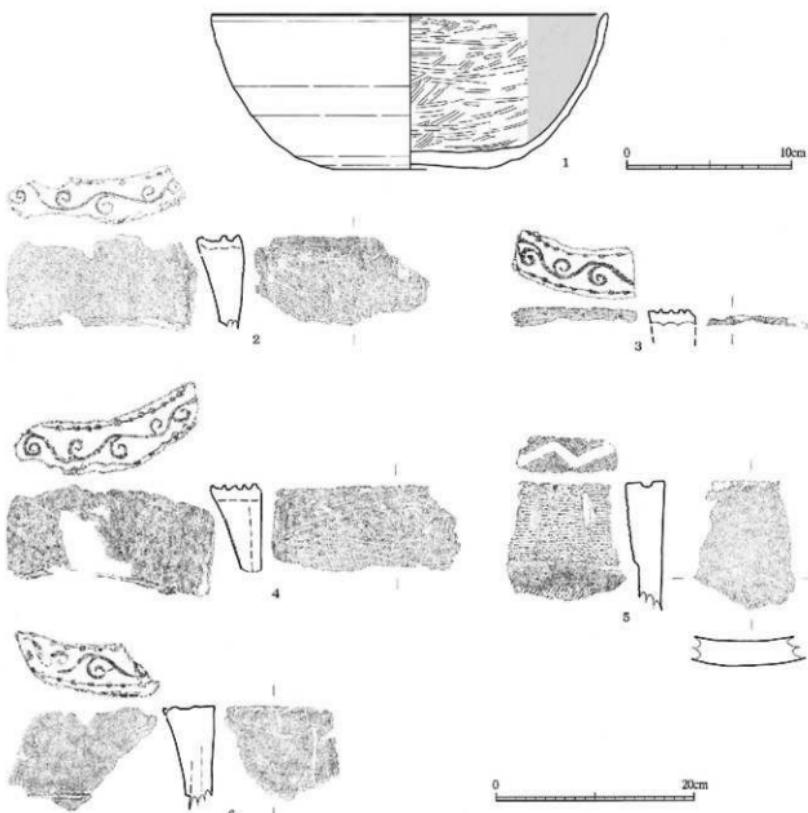
(註7) 宮城県教育委員会 1988『硯沢・大沢窯跡』宮城県文化財調査報告書第116集

(註8) 仙台市教育委員会 1994『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第182集、中田南遺跡第Ⅲ群土器は7世紀末~8世紀前半に位置づけられ、その中でも8世紀前葉に年代の中心を置いている。

(註9) 第17号整穴住居跡床面から出土している。報文では日の出山窯跡C地点第14号住居跡出土の同技法の土師器坏との対比から、8世紀前葉における土師器の静止系切り技法の存在を指摘している。なお、17号住居の堆積土からはC-1のような丸底坏も出土している。

(註10) 築館町教育委員会 1991『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第4集

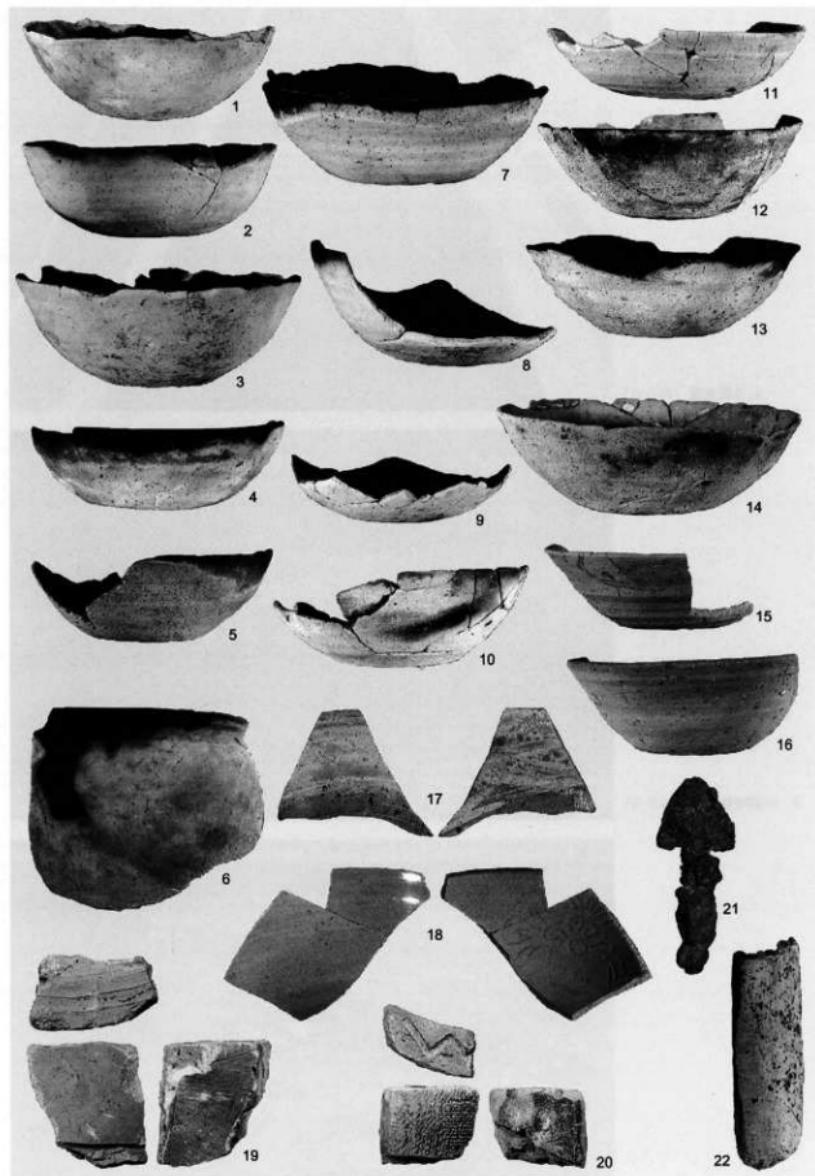
(註11) 村田晃一 1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会



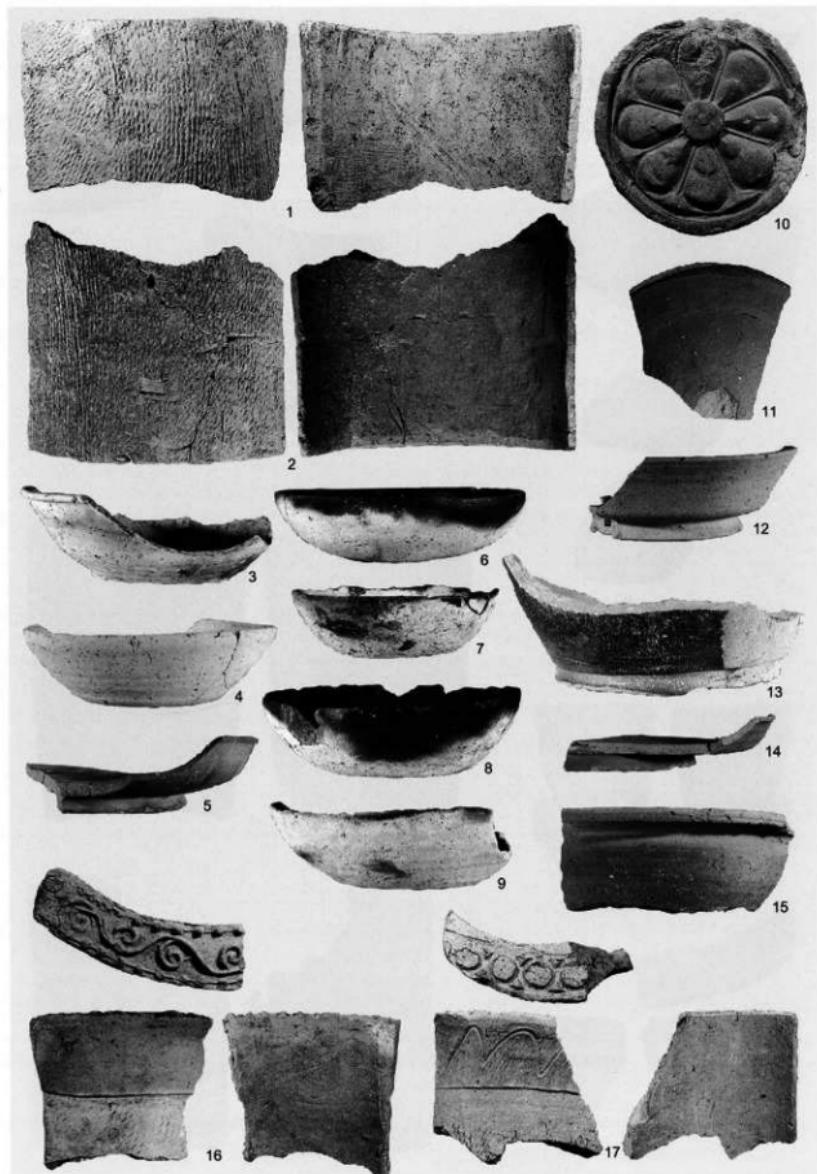
No.	登録No.	地区・遺構・部位	種別・形種	保存度	寸法(cm)			測定・特徴	写真 図版
					口径	底径	高さ		
1	D-29	JR・通路側面	土師器・壺	1/4	34	9.6	9.5	ロクロ裏面。一部剥離。底部欠損不明(?)。内面ヘラキガキ。 黒色光沢。底部・上部6cm。白粉なし	27-10
2	G-02	廻E・1、E壁	押平瓦	1/8				縦行切妻文。裏面:ナギ。側面:春日板。ナギ。側面ヘラケズリ。白粉なし	27-12
3	G-46	廻E・通路側面	押平瓦	小片				縦行切妻文。表面した瓦面。露面ナギ。白粉なし	27-14
4	G-45	廻E・1、E壁	押平瓦	1/8				縦行切妻文。裏面:ナギ。側面:春日板。ナギ。白粉なし	27-13
5	G-42	廻E・1、E壁	押平瓦	1/10				山形文。露面:焼牛さく(やや細い・横位)。裏面:御印さく(やや細い・斜位)。堀口一括入り	27-15
6	G-44	廻E・1、E壁	押平瓦	1/8				縦行切妻文。裏面:ナギ。側面ヘラケズリ。表面:春日板。側面ヘラケズリ。白粉毫無	27-16

第59図 基本層出土遺物

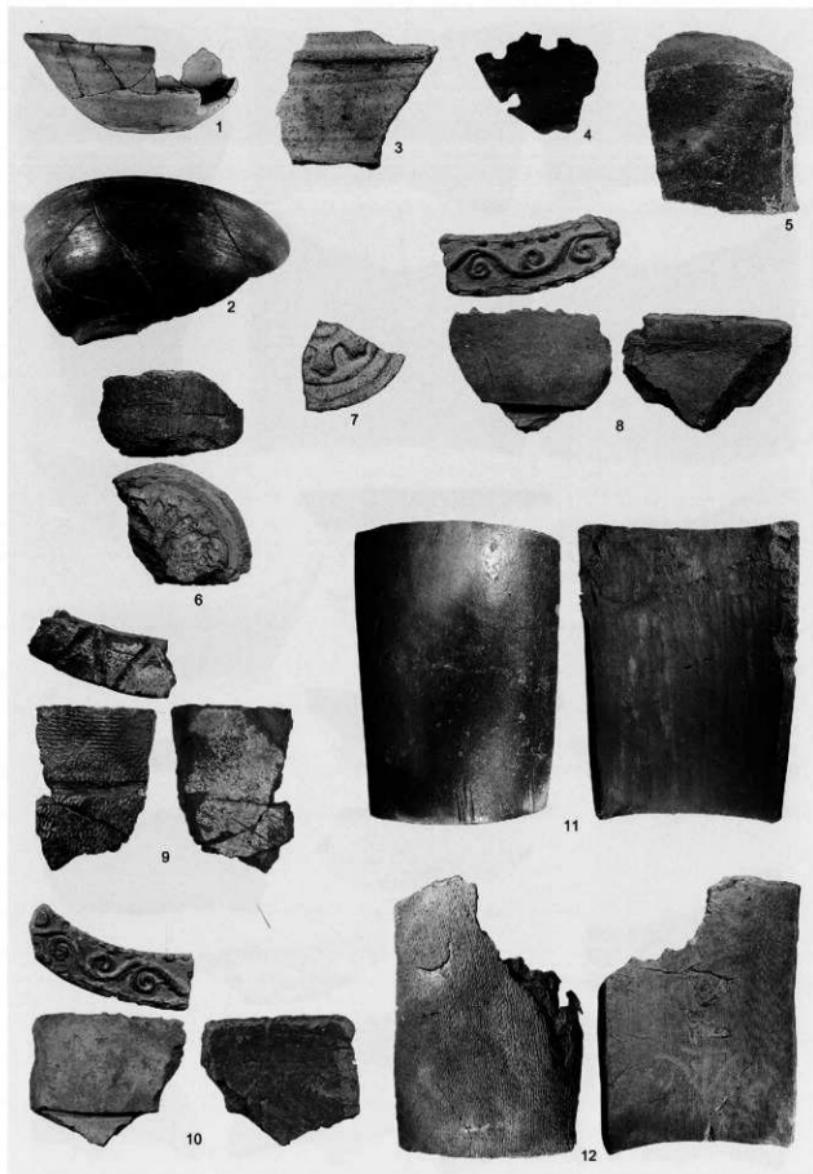




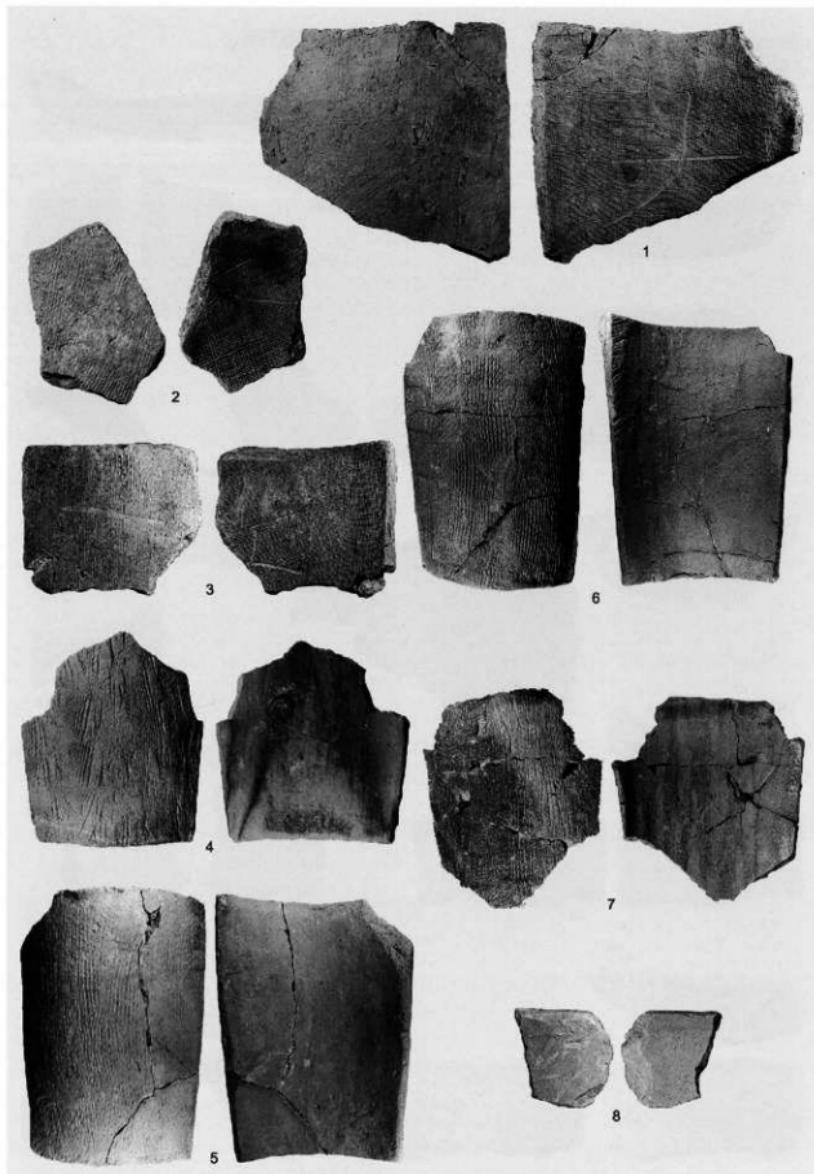
写真図版23 S130出土遺物



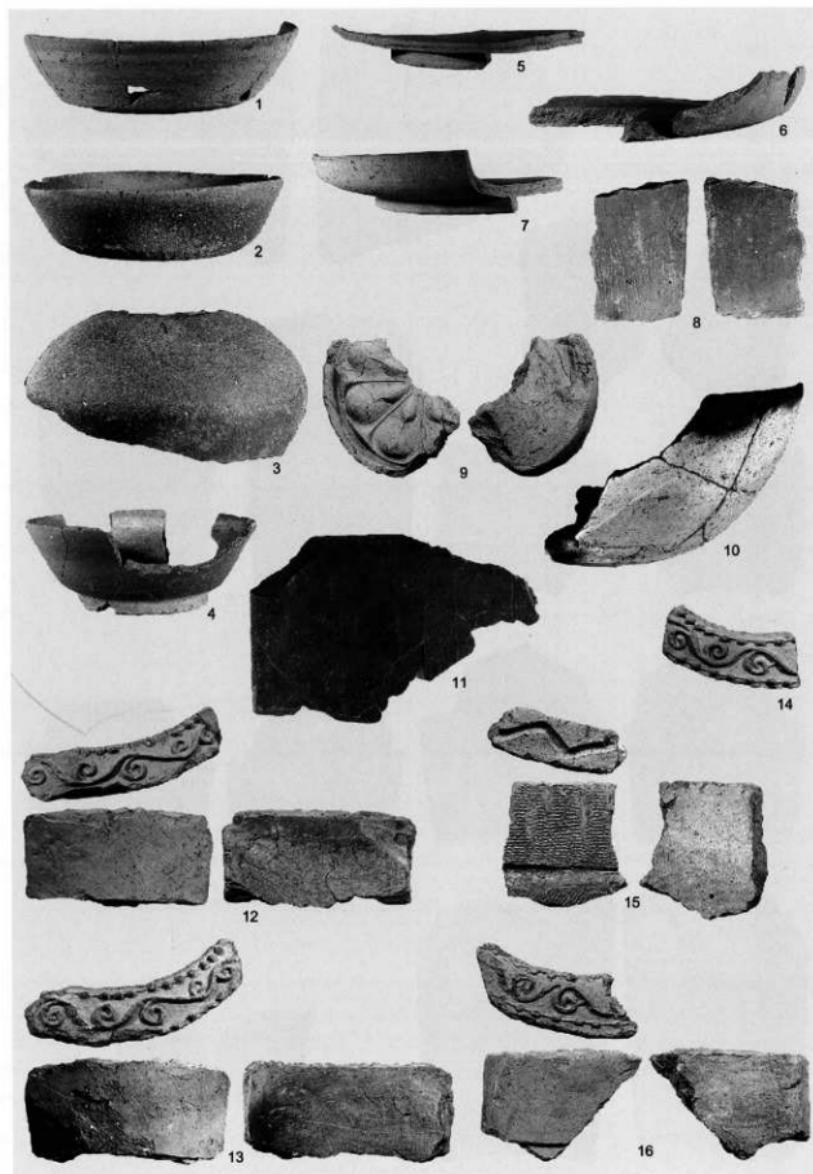
写真図版24 SI30、SK23・34・40、SD28出土遺物



写真図版25 SX26出土遺物（1）



写真図版26 SX26出土遺物（2）



写真図版27 SX37、基本層出土遺物

## V. 4区の調査

### 1. 調査の概要

4区は寺地の北辺を確認するため、3区の北東側に設定した。東西6m×南北27.5mで、伽藍地南辺からは約225～250mの地点である。調査の結果、北辺に係わる遺構は確認できなかったが、概ね伽藍中軸線と方向を合わせた堅穴住居跡などを確認した。

### 2. 基本層序

盛土下で確認した基本層序はⅠ層とⅣ層のみである。

Ia層 10YR 2/3 黒褐色シルト。小礫を少量含む。

Ib層 10YR 3/3 暗褐色シルト。木炭粒を少量含む。

Ic層 10YR 3/4 暗褐色粘土。部分的に灰白色火山灰ブロックをわずかに含む。灰白色火山灰ブロックは下層からの巻上げと推定される。

Id層 10YR 3/3 暗褐色粘土。黒褐色粘土ブロックを少量含む。

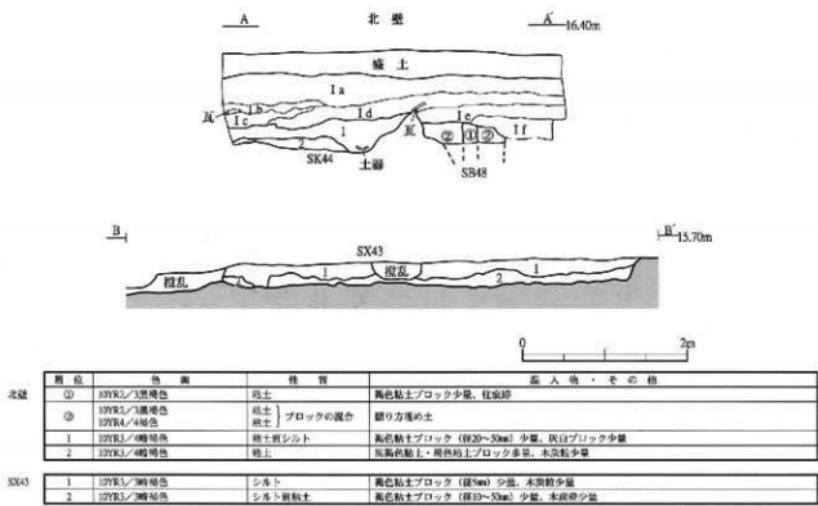
Ie層 10YR 3/3 暗褐色シルト。北東部に部分的に分布する。

If層 10YR 3/3 暗褐色シルト。黒褐色粘土ブロックと褐色粘土ブロックを多量に含む。北東部に部分的に分布する。

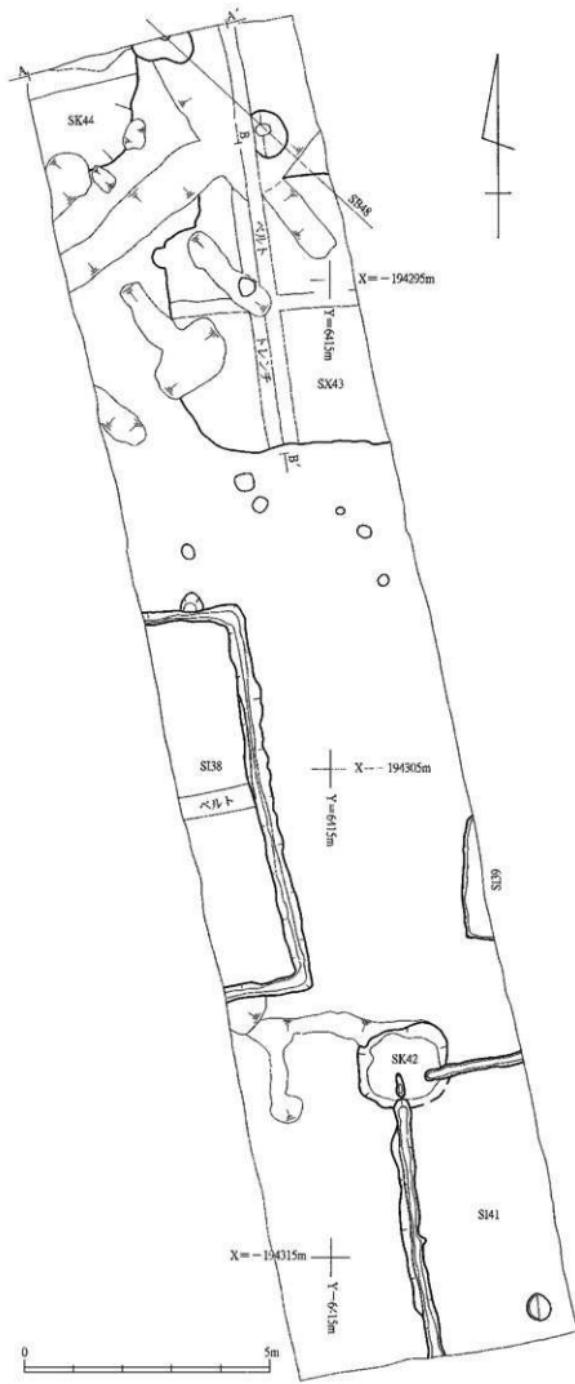
IV層 10YR 4/4 褐色粘土。上面が遺構確認面である。

### 3. 遺構と遺物

掘立柱建物跡1棟、堅穴住居跡3軒、土坑2基、性格不明遺構1基、ピット7基を確認した。陸奥国分寺跡に係わる遺構は堅穴住居跡3軒であるが、性格不明遺構も同時期の可能性がある。



第60図 調査区北壁・SX43断面図



第61図 4区全体図

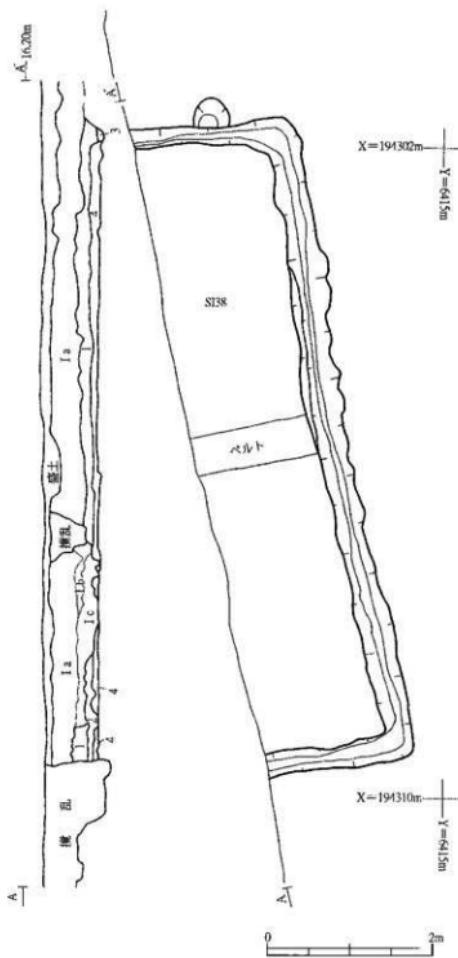
**S48掘立柱建物跡** 調査区北東隅で柱穴2基を確認した。方向はN-47°-Wである。N1は北壁際に位置し、掘り方は東西約1.2m、南北0.6m以上で、柱痕跡は直徑約18cmの円形である。N2の掘り方は東西約0.8m、南北約1.0mで、柱痕跡は内径20~30cmの楕円形である。柱間寸法は約2.8mである。遺物は出土しなかった。一本柱列の可能性もあるが、一応掘立柱建物跡と想定しておく。

また、方向が伽藍と全く異なるので国分寺との関係は明らかではない。

**S138堅穴住居跡** 調査区西部に位置し、西側の部分が調査区外となっている。東西2m以上、南北8.1m、方向は東辺でN-11°-Wである。深さは約10cmで、壁はやや傾斜を持って立ち上がる。床面は住居の掘り方を5~10cm埋め戻して作られており、固い。床面上にはカマドや柱穴などの施設は確認できなかったが、壁際に周溝が巡っている。周溝の幅は25~40cm、床面からの深さは10~15cmである。掘り方を含めた堆積土は4層である。遺物は非クロロ調整の土師器、須恵器、瓦、鉄製品が150点出土した。土師器C-3はハケメ調整の表で、須恵器E-26杯は静止糸切り後、部下端に手持ちハラケズリがされている。E-28高台杯は掘り方埋め土から、半瓦G-50は床面上から出土している(第63図)。なお、E-28は内面が著しく磨滅していることから現に転用されている可能性がある。

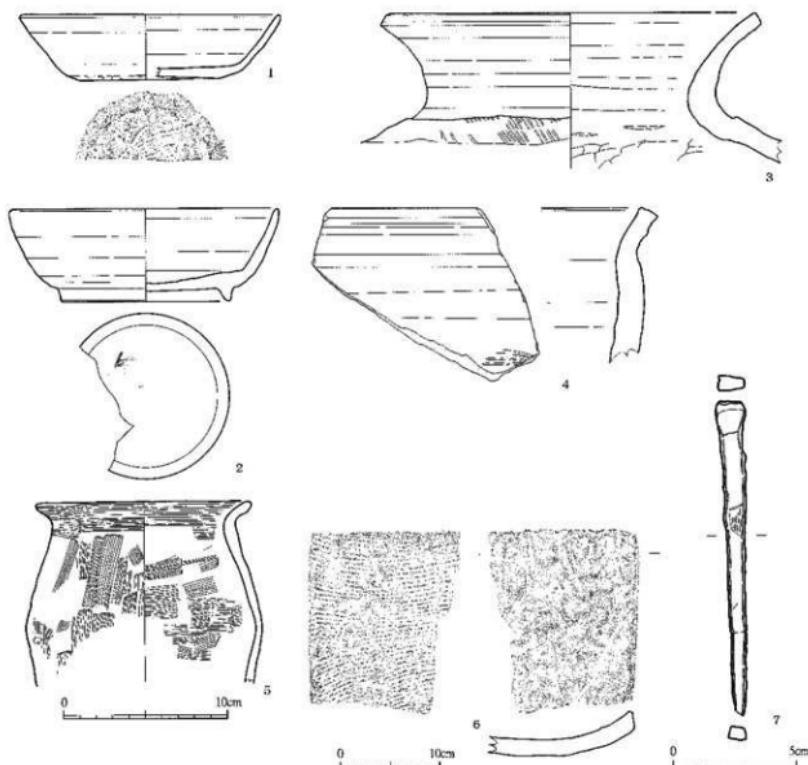
**S139堅穴住居跡** 調査区東部に位置する。大部分が調査区外となっているため規模や方向は不明で、住居以外の造構である可能性はあるが、底面が平坦であることから一応住居跡と考えた。深さは約10cmで、壁はやや傾斜を持って立ち上がる。床面上にはカマドや柱穴などの施設は確認できなかった。堆積土は1層である。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦が約110点出土した。赤焼土器D-30杯、須恵器E-27杯が図化できた(第65図1・2)。

**S141堅穴住居跡** 調査区南東隅に位置しているが、東側と南側の大部分が調査区外となって



第62図 S138平面・断面図

件名	当 期	性 質	施 入 物・その他の
1	KYB2.2切削器	シルト	褐色粘土ブロック(径5~10cm)少見、灰土块、木炭数箇
2	10Y30/20褐色	シルト	褐色粘土ブロック(径5~10cm)少見
3	10Y33.2/26褐色	シルト	褐色粘土ブロック(径5~10cm)多量
4	10Y33.2/26褐色	粘土	褐色粘土ブロック(径5~10cm)多量



No.	笠置No.	地区・遺構・部位	種別・器種	遺存度	諸量(cm)			調整・特徴	号其 同様
					口径	底径	浮き		
1	R-26	4区・SI38	陶器器・平	I/1	15.2~16.8	(5.7)	3.8~4.1	ハクレ調整、底/浮静止角切り→底茎外周一帯能下斜手縫ヘラケズリ、底部にヘラ接ぎ「太」?、白粉なし、灰瓦/(11.0/3.2~0.5)	20-1
2	R-28	4区・SI38・裏方埋土	瓦器器・高台付	I/3	(16.2)	(10.2)	5.7	コクノ調整、底部規則不規、圓筒ヘラケズリ、内面厚底、礎に転用?、底面に帶状、白粉なし	20-2
3	B-24	4区・SI38	実器器・質	上部I/4	(21.2)	平削	不明	ロクロ調整、側面タクナ、内面振ナゲ、口部少量	20-2
4	U-25	4区・SI38	陶器器・質	小片	不定	下削	不明	ロクロ調整、白粉少量	20-3
5	C-3	4区・SI38・1層	土器器・質	E部I/4	(13.2)	不削	不明	口端落丁(ナゲ)、底部ヘラナゲ	20-4

No.	笠置No.	地区・遺構・部位	種別・器種	遺存度	諸量(cm)			特徴	色調	号其 同様
					長さ	幅	厚さ			
6	(S-50)	4区・SI38・床面	平版	I/4	右面: 織印(やや細い・深位・西側), 離目やつぶれ, 側面・小口面ヘラケズリ, 底面: ハル・横溝, 白粉なし 左面: すり面, 側面・小口面ヘラケズリ, 底面, 白粉なし	10.0m	1.0	0.5	1.0	20-5

No.	笠置No.	地区・遺構・部位	種別・器種	遺存度	諸量(cm)			調整・骨渣	号其 同様
					長さ	幅	厚さ		
7	Ka-10	4区・SI38	陶器器・折	EDH充填	12.9	12.0	0.6	21.1kg	1-20-6

第63図 SI38出土遺物

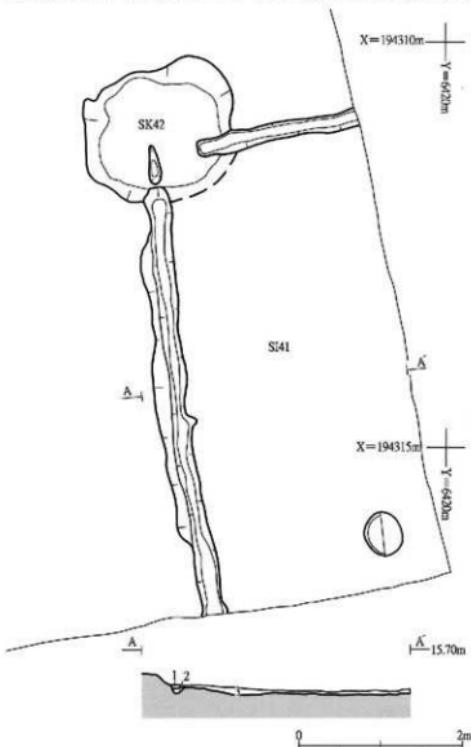
いる。東西3.1m以上、南北5.8m以上、方向は西辺でN-9°-Wである。深さは約20cmで、壁はやや傾斜がある。床面はやや凹凸がある。床面上にはピットが1基あるが、住居に伴うかどうかは不明である。カマドは確認できなかつた。壁際には周溝が巡っている。周溝の幅は25~40cm、床面からの深さは約10cmである。堆積土は3層である。這

物は非クロコロ調整の土師器、須恵器、瓦が55点出土した。駆斗瓦H-4と床面上から出土した平瓦G-48が固化できた(第65図3・4)。

**SK42土坑** 調査区南部に位置する。東西約1.8m、南北約1.6mの隅円方形である。深さは約20cmで、断面形は逆台形を呈し、壁はやや傾斜をもって立ち上がる。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層である。遺物は赤焼土器、瓦、鉄製品が4点出土したのみである。

**SK44土坑** 調査区北西隅に位置する。東西2.3m以上、南北2.2m以上であるが平面形は不明である。深さは約40cmで、壁は緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸がある。堆積土は2層である。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦、鉄製品などが約100点出土した。

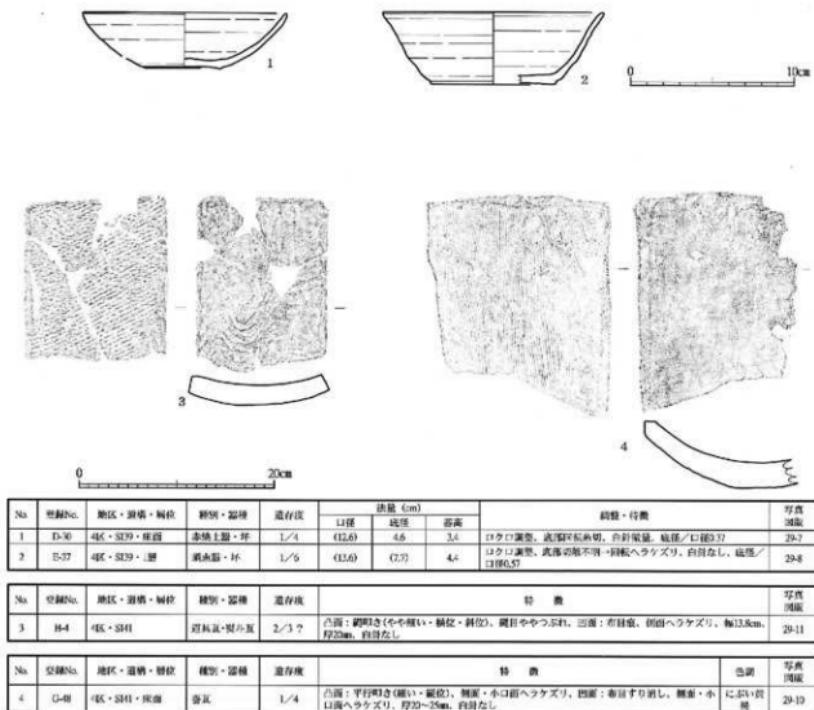
**SX43性格不明透構** 調査区北部に位置し、東部が調査区外となっている。東西3.8m以上、南北5.4mで、平面形は北西部が欠けた隅円方形である。深さは約30cmで、壁はやや傾斜を持って立ち上がる。底面はやや凹凸がある。堆積土は2層である。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦が約370点出土した。



第64図 SI41平面・断面図

透構・層位	土師器		須恵器		赤焼土器		瓦		陶器	田器	石製品	金属製品	その他の	
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)						
SI38	99	1,319	33	1,877	—	—	16	1,885					2	
SI39	42	136	1	24	58	103	7	255						
SI41	19	179	7	186			29	6,380						
SK42					2	5	1	1.0					1	
SX43	163	474	34	445	76	205	95	4,000						
SK44	39	164	13	220	25	80	20	2,560					2	
I・II層・埋没	312	1,417	61	967	167	16	289	19,444	13	18		8	近世瓦27	
計	614	3,689	149	3,719	308	409	457	34,534	13	18	0	13	近世瓦27	

表10 4区遺物集計表



第65図 SI39-41出土遺物

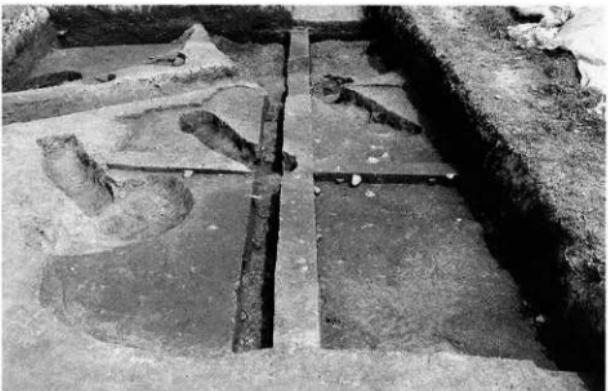
#### 4.まとめ

SI38から出土した須恵器E-26环やE-28高台环は、多賀城創建期の瓦窯跡である色麻町日の出山窯跡群C地点西部第2号窯跡（註1）や利府町歳沢窯跡B地区2号窯跡（註2）に類例が認められる。SI38は3区のSX37と同様に陸奥国分寺の創建期に近い時期の造営であると考えられる。SI39は赤焼土器D-30环が床面から出土していることと、他にも赤焼土器の破片が比較的多く認められることから、赤焼土器が増加するとされる「多賀城E群土器」の年代である10世紀前半以降の時期と推定される。SI41は遺物から年代を確定することはできないが、方向がSI38と近いことと床面から瓦が出土していることから国分寺と同時期の造営であると予想される。

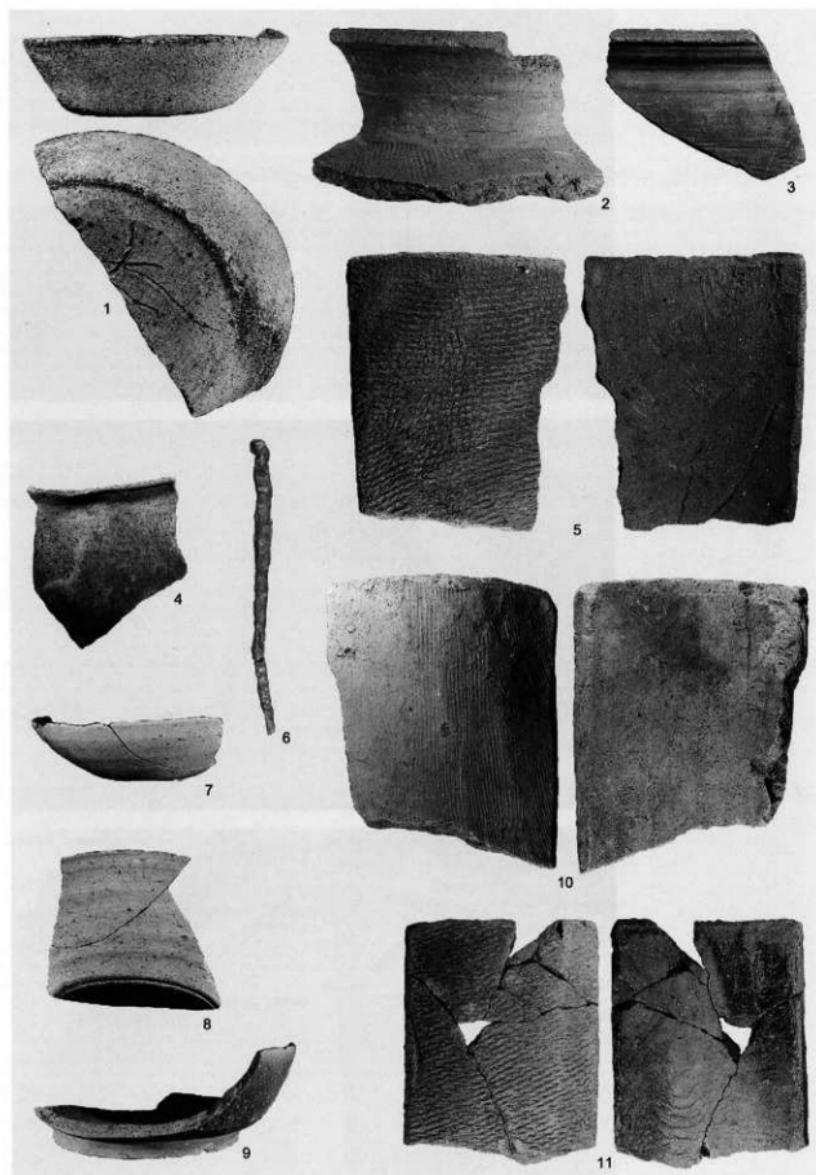
北辺の区画施設は確認できなかったが、3区と共に4区にも堅穴住居跡が存在することが確認できた。今後は寺地の内部における各地区的機能の違いを明らかとし、付属施設の位置や広がりなどを解明していく必要がある。

（註1）色麻町教育委員会 1993『日出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第1集

（註2）宮城県教育委員会 1988『歳沢・大沢窯跡』宮城県文化財調査報告書第116集



写真図版28 4区全景、SI38竪穴住居跡、SX43



写真図版29 SI38・39・41出土遺物

## VI. 5区・6区の調査

### 1. 調査の概要

5区・6区は寺地の北辺を確認するため、2区の北側の伽藍中軸線上に設定した。5区は東西3.5~4m×南北17.5mで、伽藍地南辺からは約250~270mの地点、6区は東西4m×南北9.5mで、伽藍地南辺からは約280~290mの地点である。両調査区共に搅乱が激しく、遺構確認面の状況は良くない。調査の結果、東西方向の溝跡を5区で2条、6区で1条確認した。断定はできないが、5区の溝跡は北辺に係わる区画溝の可能性がある。

### 2. 基本層序

盛土下で確認した基本層序はI層とIV層のみである。

Ia層 10YR 3/3暗褐色シルト。木炭粒、砂粒を少量含む。

Ib層 10YR 3/3暗褐色シルト。

IV層 7.5YR 3/4暗褐色粘土。上面が遺構確認面である。

### 3. 遺構と遺物

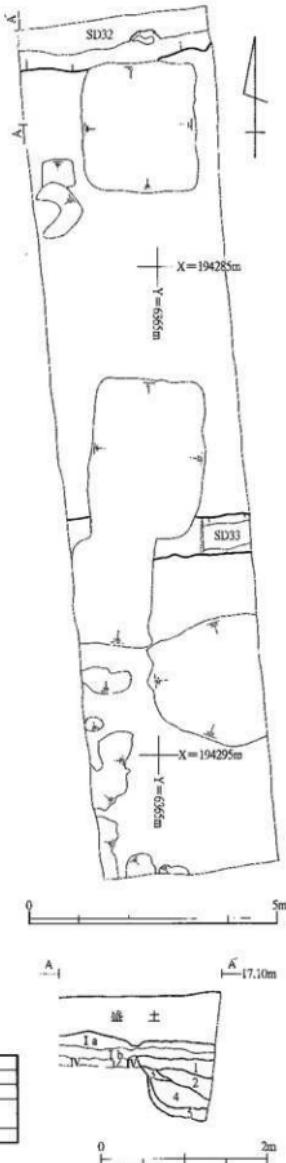
5区で溝跡2条、6区で溝跡1条を確認した。陸奥国分寺跡に係わる遺構は5区のSD32溝跡のみである。

**SD31溝跡** 6区北部で確認した東西方向の溝跡である。上幅約80~95cm、底面幅20~40cm、深さ約60cmで、断面形は上部が開く「U」字形である。底面はほぼ平坦である。方向はE-7°-Nで、確認した長さは約3.7mである。堆積土は2層で、粘土の自然堆積層である。遺物は瓦が3点出土したのみである。なお、このSD31は盛土層直下で確認した溝跡であり、盛土層が溝の上部に入り込んでいることから、盛土工事の際に上部が開口していた可能性がある。現代の溝の可能性が高いが、現代と確定できる遺物がないため遺構として取り扱った。

**SD32溝跡** 5区北部で確認した東西方向の溝跡であるが、南側の肩を確認できたのみである。上幅1m以上、底面幅60cm以上、深さ約80cmである。断面形は逆台形で、壁は急角度で立ち上がっている。底面はほぼ平坦である。方向はE-6°-Nで、確認した長さは約3.8mである。堆積土は5層で、粘土質シルトの自然堆積層である。遺物は土師器、

層位	色調	性質	割入物・その他の
1	10Y32/3深褐色	粘土質シルト	
2	10Y33/3暗褐色	粘土質シルト	
3	10Y3/3暗褐色	粘土質シルト	褐色砂質シルトへブロック（厚5mm）少量
4	10Y3/3暗褐色	粘土質シルト	
5	10Y3/3暗褐色	粘土質シルト	褐色砂質ブロック（厚5~20mm）少量

第6図 5区全体図、SD32断面図

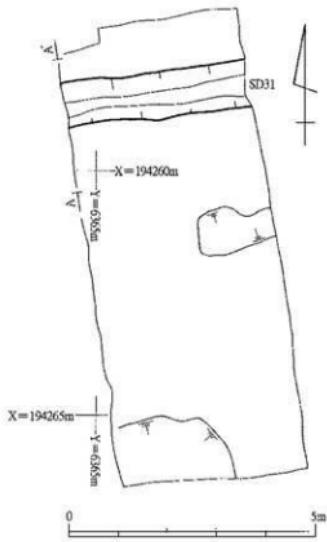


須恵器が2点と瓦が26点出土した。

**SD33溝跡** 5区中央部で確認した東西方向の溝跡である。大部分が擾乱されており、遺存状況はよくない。上幅約75cm、底面幅約50cm、深さ10~15cmである。断面形は浅い皿形で、壁は緩やかに立ち上がりしている。底面はほぼ平坦である。方向はE~3°~Nで、確認した長さは約3.6mである。堆積土は1層である。遺物は出土しなかった。

#### 4.まとめ

5区で確認したSD32溝跡は、幅は確定できなかったが規模が比較的大きく、断面形が逆台形で、伽藍地南辺を東西するSD1溝跡と様相が似ている。また、数量は少ないものの土師器、須恵器、瓦などが出土していることから、SD32は古代の区画溝の可能性がある。陸奥国分寺内部の区画溝の可能性と、寺地北辺の可能性を考えられ、どちらかは断定できなかった。なお、築地堀は確認できなかったが、5区は擾乱が激しいことから築地堀が基礎でも完全に削平されている可能性も否定できない。この点については、今後SD32の延長部分における調査によって検証していく必要がある。



第67図 6区全体図、SD31断面図

遺構・層位	土師器		須恵器		漆器		瓦		陶器		磁器		石製品		金属製品		その他の	
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	陶器	磁器	石製品	金属製品	金具類	金具類	金具類	金具類	金具類	金具類
SD32	1	1	1	1	8	—	26	3,230	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SD33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
1・II層、擾乱	3	14	3	94	4	10	23	2,113	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
計	4	15	4	102	4	10	49	5,342	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

表11 5区遺物集計表

遺構・層位	土師器		須恵器		漆器		赤陶土器		長		陶器		磁器		石製品		金属製品		その他の	
	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	数量	重量(g)	陶器	磁器	石製品	金属製品	金具類	金具類	金具類	金具類	金具類	
SD31	0	0	0	0	0	0	3	430	0	0	0	0	—	—	—	—	—	—		
計	0	0	0	0	0	0	3	430	0	0	0	0	—	—	—	—	—	—		

表12 6区遺物集計表



1. SD32完掘状況（東から）



2. SD32断面（東から）



3. SD31完掘状況（南から）

## 第4章 総括

### I. 郡山遺跡

I期官衙の北東部では第175次調査（個人住宅対応）と第178次調査（範囲確認）が実施され、共に官衙の外郭に関連する遺構を確認した。

第175次調査においては並行する2列の材木列（北側がSA2130、南側がSA2135）と一本柱列1列、堅穴住居跡1軒などが発見された。北西に約180m離れた第148次調査区（註1）でも2列の材木列が調査されていたが、今回の第175次調査で発見された材木列と比べると、材の太さや抜き取りの状況が類似していること、さらに位置関係から、両調査区で検出された各2列の材木列は関連する可能性が高いと考えられた。第148次調査区のSA2030材木列は第175次調査区のSA2130材木列へ、第148次調査区のSA2035材木列は第175次調査区のSA2135材木列へと連続する遺構になると推定した。この結果、今回の第175次調査区から第148次調査区まで180m以上にわたる材木列の存在が想定されるに至った（第68図）。なお、平成15年に行われた第152次調査（註2）で確認されたI期官衙東辺における材木列の様相との比較から、第148次調査区のSA2030材木列と第175次調査区のSA2130材木列は外郭北辺の材木列である可能性も考えられた。ただし、第2章IVで述べたように、第148次調査のSA2030材木列はI期官衙期の掘立柱建物跡を切っていることから、仮に北辺であると仮定した場合でも、ある時期には移動していることになる。I期官衙の北辺については、今後も検証を重ねていく必要がある。

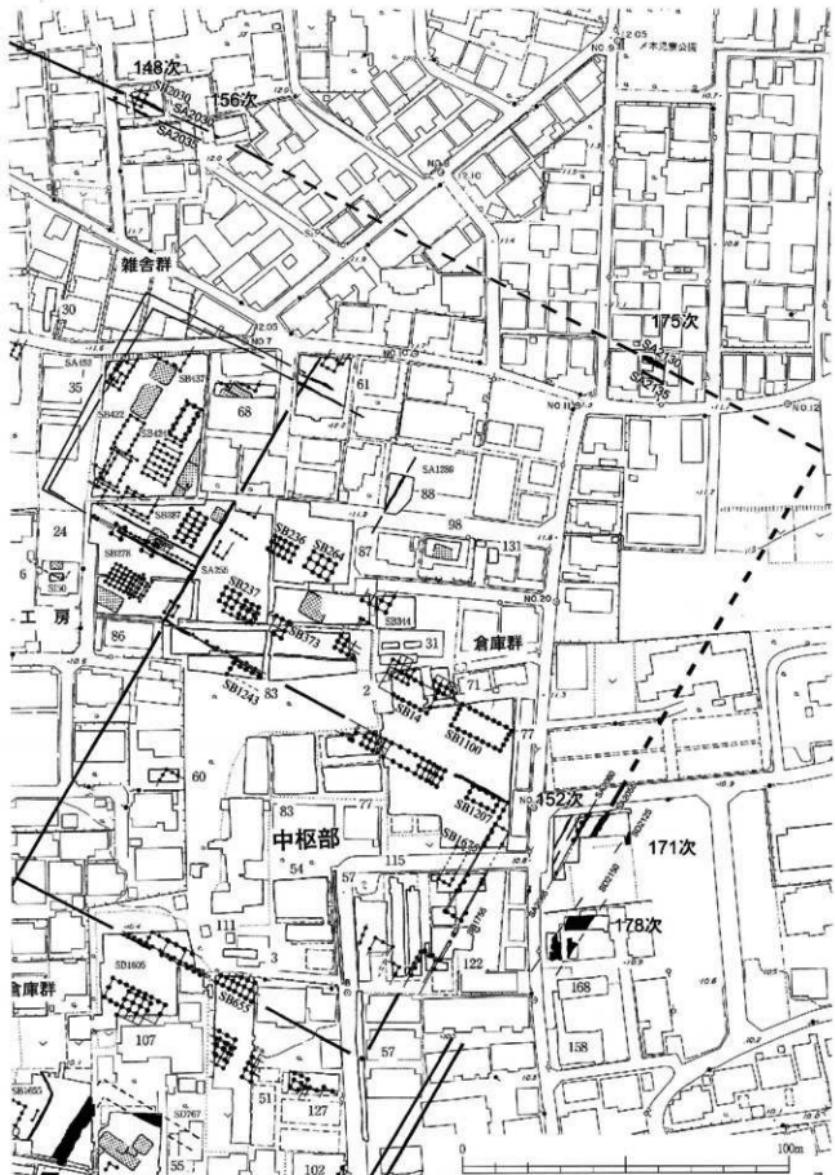
第178次調査で発見したSD2150溝跡はI期官衙に係わる人規模な溝跡である。SD2150溝跡は北東に約30m離れた第171次調査区（註3）のSD2125溝跡とつながる可能性が高いが、このSD2125溝跡はI期官衙東辺のSA2055材木列よりもさらに東に約8m離れて並行しているので、SD2125溝跡とSD2150溝跡はI期官衙東辺のさらに東側に位置することとなる。幅が確定できないが、約5.0～6.3mあり、これまで郡山遺跡で調査された中では最も規模が大きい。堆積上の様相からは水成堆積層であると推定され、溝の底面が平坦であることや、北東には広瀬川が流れていることなどから、区间や防護などの機能の他に、「運河」としての機能を持っていた可能性が考えられる。SD2150溝跡が「運河」としての機能を有するかどうかについては、北東方向や南西方向の延長部分における調査が不可欠である。広瀬川から取水したと仮定した場合、第2章Vで述べたように、河川の流路が現代とは大きく異なって遺跡北部にかなり近い地点を流れていた可能性があり、その場合は現代の流路よりは取水が容易であった可能性もある。しかし、河川の水面標高や取水路の特定など検証すべき点も多い。したがって、「運河」としての機能を有するか否かについてはまだ断定することは避け、その可能性を指摘するに留めておきたい（註4）。

SD2150溝跡内で認められた縦の集中については、性格は特定できなかった。別の調査地点での類例を待ちたい。

### II. 陸奥国分寺跡

陸奥国分寺跡の調査は整備計画策定のため、今年度からは継続的に実施していくこととなった。第1年次にあたる今年度の主要な目的は、伽藍地南辺を構成する築地の構造を明らかにすることと、寺地の北辺を明らかにすることとの2点であった。今年度の調査成果は以下のとおりである。

伽藍地南辺の1区では、築地網本体は遺存していなかったが掘り込み地業跡であるSF45の版築層を確認できた。残存するSF45の幅は約2.6mであるが、昭和58年の調査結果（註5）を考慮すれば、本来は南北両側にそれぞれ20～30cm広く、3m前後の幅であった可能性がある。SD1溝跡は上幅1.2～2.0mで、SF45の南側に並行し、共に伽藍地南辺を構成している。SF45とSD1の方向は調査区内においては概ねE-4°-Nである。



第68図 郡山遺跡Ⅰ期宮町北部全体図

僧坊の北側の2区の調査では、一本柱列と推定される構造を3列確認した。このうち東西方向と推定したSA14・SA19…本柱列は柱痕跡の太さと柱穴の構造から、僧坊などが配置されている南側の伽藍地と付属施設の存在が予想される寺地北部とを区画する遮蔽施設である可能性が考えられた。今後の調査で東西方向の延長部における検証作業を行っていく必要がある。第69図に陸奥国分尼寺跡の尼坊と推定されている2棟の掘立柱建物跡（註6）と陸奥国分寺跡の僧坊および2区の位置関係を示した。陸奥国分寺跡の小字坊は明らかにされていないが、昭和33年の学術調査では僧坊の北側に掘り込み地蔵が確認され、建物があった可能性も指摘されていること（註7）、SA14の南側に国分尼寺跡のSB1と同規模の建物が入る余地があることなどから、今後検証していく必要がある。

土取り穴と推定されるSK16の埋没時期は概ね9世紀第3四半期頃と推定された。遺物の年代から貞觀11（869）年の地震後の復旧作業に係る可能性もあるが、土取り穴として掘削された年代について限定することができなかつたため断定はできなかった。なお、SK16からは少量であるが繩の羽口や鉄洋、漆紙が出上している。寺地内部における鍛冶や漆工に関する遺構の存在を示唆するものと考えられる。

3区と4区では、豊穴住居跡が4軒と土取穴の可能性のある遺構などが確認され、遺物が大量に出土した。豊穴住居跡が確認されたことは、寺地内部におけるこの地区的機能を考え上で大きな成果であったと考える。

5区で確認したSD32溝跡は、国分寺内部の区画溝である可能性と、寺地北辺である可能性が考えられ、どちらかは断定できなかった。なお、築地跡は確認できなかったが、基礎部分までも完全に削平されている可能性も否定できないことから、今後SD32溝跡の延長部分の調査は継続していく必要がある。

陸奥国分寺跡の調査は、昭和30～34年の学術調査で主要伽藍が解明され、昭和47年から断続的に実施されてきた整備のための調査では、伽藍の東辺、南辺、西辺は築地塀と溝によって区画されているらしいことが判明してきた。ここでは現時点における問題点を整理し、今後の調査に向けた課題を整理しておきたい。

これまで行われた調査では座標を計測していないため、各地点の遺構の座標上における位置関係及び東北に対する方位が不明となっている。現在このことが要因となって以下のような問題点が現れてきている。

①伽藍地の東辺、南辺、西辺を構成する築地塀と外側の区画溝の方位が不明である。このため各辺が直交するのかどうか不明であり、結果としてこれらに区画された伽藍地の平面形も不明となっている。

②伽藍地の平面形が確定できないため、現在東西800天尺と推定されている伽藍地の東西規模（註8）が、南辺にも当てはまるのかどうか不明である。

③伽藍中軸線の方位（真北からの角度）は概ねN-4°-Wと想定されるが、詳細な方位は確定できない（註9）。また、前述したように東辺、南辺、西辺の方位も不明なため、これらと伽藍中軸線との関係も明らかではない。

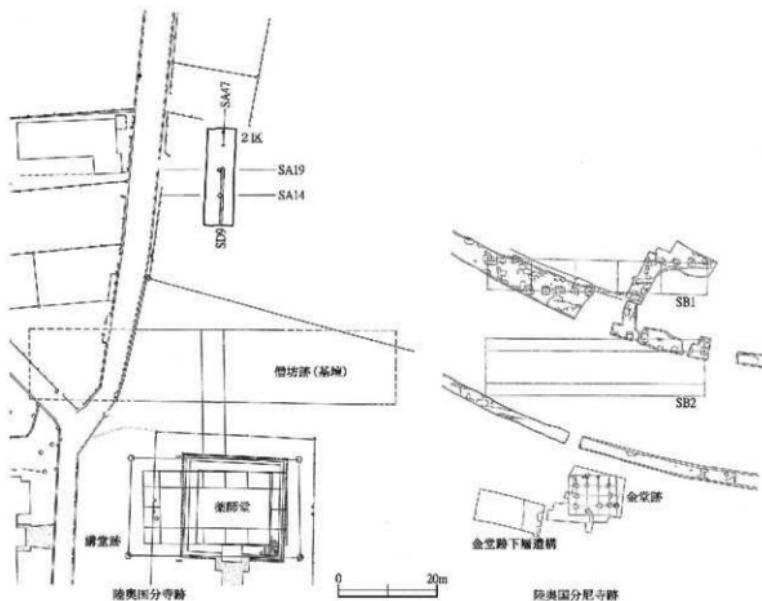
今後は広い範囲で遺構の計測を重ね、精密な位置関係や方向を確定していく必要がある。既存の道路や建物による制約のため検証できない箇所もあるが、今後の調査を進めていく上で重要な課題といえよう。

なお、座標に関する以外の課題としては、以下のよう北辺に関する問題点が挙げられる。

④築地塀と溝跡が伽藍地のみを区画している施設であるのか、あるいは北部では寺地をも含んだ区域を区画する施設となっているのか明確ではない。

この点については、今年度2区で確認したSA14・19と5区で確認したSD32溝跡の尖端を明らかにしていくことが解明への手がかりとなっていくと考えられる。この点も含め、今後は寺地の内部における各地区の機能の違いを明らかとし、付属施設の位置や広がりなどを解明していく必要がある。なお、寺地の範囲については現在南部で判明しているような築地塀と溝による区画よりもさらに広範囲である可能性は十分考えられるが、市街化が進んだ現状では確認するのは困難な状況にある。

- (註1) 仙台市教育委員会 2003「第148次発掘調査」『郡山遺跡23』仙台市文化財調査報告書第263集
- (註2) 仙台市教育委員会 2004「第152次発掘調査」『郡山遺跡24』仙台市文化財調査報告書第269集
- (註3) 仙台市教育委員会 2006「第171次発掘調査」『郡山遺跡25』仙台市文化財調査報告書第296集
- (註4) 第176次調査(本書第2章V)で述べたように、Ⅱ期宮衙外溝の北西コーナーのすぐ東の地点では、広瀬川の旧河道と推定される大規模な河川跡が発見されている。この河川跡の年代は特定できていないが、宮衙の存続した時期に、広瀬川が現在よりも遺跡に近接した場所を流れていた可能性はあり、これらの点も含めて考えていく必要がある。
- (註5) 仙台市教育委員会 1984「陸奥国分寺跡 昭和58年度環境整備予備調査概報 南大門跡東脇築地跡」仙台市文化財調査報告書第63集
- (註6) 陸奥国分尼寺跡のSB1は小子坊、SB2は大坊と推定されている。
- (註7) 薬師堂境内と運動場との境の溝の断面と、北側のトレーニングで掘り込み地業が確認されている。報文では「僧坊北端の根石との距離は約40尺、大体東西10尺、南北8尺の方眼の上にのり、僧坊の柱間と一致する」との記載があり、断定はしていないが僧坊から北に約12m離れた場所に僧坊と同じ柱間の建物があった可能性が指摘されている。なおこの掘り込み地業の位置が平面図に記載されていないため、第69図中には示せなかった。
- (註8) 伽藍地の規模は、東門、伽藍中軸線、寺地西部で確認された柱列の間隔から東西800尺平尺と推定されている。これは概ね東辺と西辺の築地塀の心々の間隔を想定している。
- (註9) 昭和30~34年の調査報告書では「金堂、講堂の中心を結ぶ線は磁石で測ってNE 2° 15'」と記載されてい



第69図 陸奥国分寺跡僧坊北部、陸奥国分尼寺跡尼坊

る。磁北の真北からの振れ（偏差）は1964年のN-6°16'Wを基準とし、年差（1年で増加する誤差）が1'4" Wとされている。伽藍中軸線の磁北からの角度NE2°15'が計測された年を、講堂が調査された昭和31年と仮定すると、昭和31（1956）年の偏差はN-6°7'28"-Wであるので、「磁北からの角度NE2°15'」の真北からの振れはN-3°52'28"-Wとなる。調査当時は1/4度単位までの計測であるので、概ねN-4°-Wと考えられる。

## 引用・参考文献

- 齊藤孝正 2000「猿投窓出土の灰釉・緑釉陶器碗・皿類の変遷」『越州窯青磁と緑釉・灰釉陶器』日本の美術6 30  
409
- 色麻町教育委員会 1993『日出山空跡群』色麻町文化財調査報告書第1集
- 白鳥 良一 1980「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所
- 仙台市教育委員会 1980『郡山遺跡発掘調査概報』『年報1』仙台市文化財調査報告書第23集
- 仙台市教育委員会 1981『史跡陸奥国分寺跡 昭和56年度環境整備予備調査概報 東門跡』仙台市文化財調査報告書第27集
- 仙台市教育委員会 1981『郡山遺跡I』仙台市文化財調査報告書第29集
- 仙台市教育委員会 1982『史跡陸奥国分寺跡』『仙台平野の遺跡群I』仙台市文化財調査報告書第37集
- 仙台市教育委員会 1982『郡山遺跡II』仙台市文化財調査報告書第38集
- 仙台市教育委員会 1982『郡山遺跡-第13次-』仙台市文化財調査報告書第42集
- 仙台市教育委員会 1983『郡山遺跡III』仙台市文化財調査報告書第46集
- 仙台市教育委員会 1983『史跡陸奥国分寺跡と昭和58年度環境整備予備調査概報』仙台市文化財調査報告書第47集
- 仙台市教育委員会 1984『史跡陸奥国分寺跡昭和58年度環境整備予備調査報告書』仙台市文化財調査報告書第63集
- 仙台市教育委員会 1984『郡山遺跡IV』仙台市文化財調査報告書第64集
- 仙台市教育委員会 1985『郡山遺跡V』仙台市文化財調査報告書第74集
- 仙台市教育委員会 1986『郡山遺跡VI』仙台市文化財調査報告書第86集
- 仙台市教育委員会 1987『郡山遺跡VII』仙台市文化財調査報告書第96集
- 仙台市教育委員会 1988『郡山遺跡VIII』仙台市文化財調査報告書第110集
- 仙台市教育委員会 1988『陸奥国分寺跡』『仙台平野の遺跡群VII』仙台市文化財調査報告書第111集
- 仙台市教育委員会 1989『郡山遺跡IX』仙台市文化財調査報告書第124集
- 仙台市教育委員会 1990『郡山遺跡X』仙台市文化財調査報告書第133集
- 仙台市教育委員会 1990『郡山遺跡-第84・85次-』仙台市文化財調査報告書第145集
- 仙台市教育委員会 1991『郡山遺跡XI』仙台市文化財調査報告書第146集
- 仙台市教育委員会 1992『郡山遺跡-第65次発掘調査報告書-』仙台市文化財調査報告書第156集
- 仙台市教育委員会 1992『郡山遺跡XII』仙台市文化財調査報告書第161集
- 仙台市教育委員会 1993『郡山遺跡XIII』仙台市文化財調査報告書第169集
- 仙台市教育委員会 1994『郡山遺跡XIV』仙台市文化財調査報告書第178集
- 仙台市教育委員会 1994『中田南遺跡』仙台市文化財調査報告書第182集
- 仙台市教育委員会 1995『郡山遺跡XV』仙台市文化財調査報告書第194集
- 仙台市教育委員会 1996『郡山遺跡XVI』仙台市文化財調査報告書第210集
- 仙台市教育委員会 1997『郡山遺跡XVII』仙台市文化財調査報告書第215集

- 仙台市教育委員会 1997『郡山遺跡－第112次－』仙台市文化財調査報告書第222集
- 仙台市教育委員会 1998『郡山遺跡XVII』仙台市文化財調査報告書第227集
- 仙台市教育委員会 1999『郡山遺跡IX』仙台市文化財調査報告書第234集
- 仙台市教育委員会 1999『後河原遺跡－第3次・第4次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第236集
- 仙台市教育委員会 2000『郡山遺跡XX』仙台市文化財調査報告書第241集
- 仙台市教育委員会 2001『郡山遺跡21』仙台市文化財調査報告書第250集
- 仙台市教育委員会 2001『郡山遺跡－第124次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第251集
- 仙台市教育委員会 2002『郡山遺跡22』仙台市文化財調査報告書第258集
- 仙台市教育委員会 2003『郡山遺跡23』仙台市文化財調査報告書第263集
- 仙台市教育委員会 2004『郡山遺跡24』仙台市文化財調査報告書第269集
- 仙台市教育委員会 2006『郡山遺跡25』仙台市文化財調査報告書第284集
- 仙台市教育委員会 2005『郡山遺跡－第162次1区・第164次発掘調査報告書…』仙台市文化財調査報告書第288集
- 仙台市教育委員会 2005『郡山遺跡発掘調査報告書－総括編一』仙台市文化財調査報告書第283集
- 仙台市教育委員会 2005『陸奥国分尼寺跡－第10次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第286集
- 仙台市教育委員会 2006『郡山遺跡26』仙台市文化財調査報告書第296集
- 築館町教育委員会 1991『伊治城跡』築館町文化財調査報告書第4集
- 宮城県教育委員会 1980『青木遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第71集
- 宮城県教育委員会 1980『観音沢遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第72集
- 宮城県教育委員会 1981『清水遺跡』『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第77集
- 宮城県教育委員会 1981『東山遺跡』『東北自動車道遺跡調査報告書V』宮城県文化財調査報告書第81集
- 宮城県教育委員会 1988『附沢・大沢窯跡』宮城県文化財調査報告書第116集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1991『第60次調査』『多賀城跡』多賀城跡調査研究所年報1991
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1991『第61次調査』『多賀城跡』多賀城跡調査研究所年報1991
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1994『五万崎地区』『多賀城跡』多賀城跡調査研究所年報1994
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1994『現状変更に伴う調査』『多賀城跡』宮城県多賀城跡調査研究所年報1994
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1994『下伊場野窯跡群』『多賀城跡』多賀城跡調査研究所年報1994
- 陸奥国分寺跡発掘調査委員会 1961『陸奥国分寺跡』
- 村田晃一 1992『多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産』『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大戸古窯跡群検討会

## 調査成果の普及と関連活動

### 1. 広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当職員	主 催
2006.6.6	郡山遺跡展示室見学	齋藤	東長町小学校2年生
8.3	陸奥国分寺跡報道発表	吉岡・平間・齋藤	仙台市教育委員会
8.5	陸奥国分寺跡現地説明会	吉岡・平間・齋藤	仙台市教育委員会
11.7	郡山遺跡展示室見学	齋藤	ディスカバーたいはく
12.19	郡山遺跡第178次調査見学	平間	八木松市民センター
12.19	郡山遺跡展示室見学	齋藤	八木松市民センター
2007.1.27	郡山遺跡展示室見学	平間	NIIK文化センター
2.20	郡山遺跡展示室見学	齋藤	NHK文化センター

## 2. 調査指導委員会の開催

平成18年度 郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会 平成19年2月8日 本庁舎2階第1委員会室

- ・平成18年度の調査成果について

- ・平成19年度の調査計画について

## 3. 資料の貸し出し・展示

仙台市富沢遺跡保存館 第38回企画展「百花繚乱…土の中からのメッセージ10」

八本松市民センター 市民センター祭り（パネル）

## 4. 展示室の利用者

平成18年4月～平成19年3月 168名

# 報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせき	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
書名	郡山遺跡27	市町村遺跡番号					
副書名	郡山遺跡・仙台平野の遺跡群 平成18年度発掘調査概報						
巻次	27						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第307集						
編著者名	平間亮輔、齋藤義彦						
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1	TEL022-214-8893～8894					
発行年月日	2007年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村遺跡番号					
郡山遺跡	宮城県仙台市太白区郡山三丁目他	04100 01003	38°12'58"'	140°53'41"'	2006.4.10～2006.12.22	261m <sup>2</sup>	重要遺跡の範囲確認調査ほか
陸奥国分寺跡	宮城県仙台市宮城野区木ノ下三丁目	04100 01019	38°14'55"'	140°54'22"'	2006.5.23～2006.8.10	739m <sup>2</sup>	重要遺跡の範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
郡山遺跡	官衙跡	飛鳥～平安	掘立柱建物跡 材木列跡、一本柱 列跡、溝跡	上師器、須恵器	I期官衙の材木列跡、 溝跡を発見した		
陸奥国分寺跡	寺院跡	奈良～平安	整穴住居跡、溝跡 塗地廻跡、一本柱 列跡、土坑	土師器、須恵器、灰釉陶器、 綠釉陶器、金属製品、瓦	伽藍地南辺で築地廻跡、 北部で一本柱列跡と整穴住居跡を発見した		

仙台市文化財調査報告書第307集

## 郡山遺跡27

—郡山遺跡・仙台平野の遺跡群—  
平成18年度発掘調査概報

2007年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区間引町三丁目7-1

文化財課 022(214)8893

印刷 株式会社 建設プレス

仙台市青葉区折立三丁目2-10

TEL 022(302)0177

